334

356

始

419

334
30

舊約史要

(上)

特231
997

浦川和三郎著

舊約史要（上）

長崎教報社

昭和六年
7

舊約

Nihil obstat

P. Matsukawa, censor libror.

die 4 Octobris 1930

Imprimatur

† J. Hayasaka Ep. Nagasaki.

はしがき

本書の編纂に當りて、著者の參考せし內外の書名を擧げるに、

舊約物語

舊約のはなし

少年聖書

Histoire de l'ancien testament, par Mgr. Pert.

La sainte bible, par Fillion.

Histoire d'Israel, par Fillion.

Leçon d'histoire sainte. par Fillion

Dictionnaire de la bible, par Vigouroux

Supplément, par Louis Pirot

La Bible et découvertes modernes, par Vigouroux.

Histoire sainte, par un professeur de seminaire.

Chronologia veteris et novi testamenti, per Ruffini.

L'Ami du Clergé. (1923)

等である。成るべく正確を期した積であるが、人間の仕事だから、誤なきを保し難い。お氣付きの御

はしがき

方は御指敎の勞を惜み給はざる樣、切にお願ひ申して置く。

非常に多忙なりしと、健康の餘り勝れなかつた爲、校正に十分力を用ゐる能はず、誤植が少からず見出されるのは汗顏の至りに堪へない。

卷末には「モイゼ五書の編纂に就て」と云ふ評論を添へる考であつたが豫定の紙數を超ゐることと百三十ページにも及んだので、已むを得ず割愛した。何れ中卷か下卷かに加へることにしよう。

本書は諸學校や神父樣方の御後援によつて發行の運びを見るに至つたのである。聊か謝意を表し、併せて中卷、下卷にも引續き御後援を賜はらんことを祈る。

一九三一年三月七日、聖トマスの祝日

著者誌す

舊約史要（上）

目次

はしがき……一

總說　舊約史の性質……七

參考　楔狀文獻に就て……一五

第一期　世界開闢からアブラハムまで……一五

第一章　世界開闢……一五

參考（1）科學上から觀た世界開闢說……二二

（2）六日間の御業の科學的解說……三〇

第二章　人類の創造と樂園……三八

參考（1）樂園の位置……四三

（2）人類と進化論……四六

（3）創世記の兩記事……四七

第三章　人類の墮落と原罪……四八

參考　アッシリヤ、バビロンの世界開闢說と人祖の墮落……五九

目次

第四章　カインとアベル……六四
第五章　セトとその子孫……七一
参考（1）古代人の長命に就て……七六
（2）文化の起源……七七
第六章　大洪水……七九
参考（1）カルデアの洪水物語……八五
（2）洪水と科學……九一
（3）大洪水の範圍……九二
第七章　ノエの子孫……九六
参考（　）人種誌（Table Ethnographique）……一〇四
（　）大古の年表……一〇七
第二期　アブラハムの召出からモイゼの誕生まで……一一七
第八章　神の選民……一一七
参考（　）聖地の地理一斑……一二二
（2）カナアンの住民……一三一

（3）テル・エル・アマルナ文献……一三三
第九章　アブラハムの召出……一四〇
参考（1）メルキセデクに就て……一四八
（2）エラム族の侵略に就て……一四九
第十章　新な契約……一五三
参考　割禮に就て……一五九
第十一章　ソドマの滅亡……一六一
参考（1）一夫多妻に就て……一六九
（2）塩の柱……一七〇
第十二章　イザアクの誕生……一七一
参考　人身御供に就て……一七七
第十三章　イザアクの結婚……一七八
第十四章　エザウとヤコブ……一八三
第十五章（一）父の祝福……一八八
第十五章（二）ヤコブ、ハランへ走る……一九四

第十六章　ヤコブの歸國……二〇二
第十七章　ヨゼフの生立……二〇九
第十八章(一)兄弟と再會……二一〇
第十八章(二)ヤコブ、エジプトに引越す……一三三
參考　太祖の歴史の總括……二四五
第十九章　ヨブの大なる試練……二五一
第二十章　三人の友……二五七
第二十一章　大團圓……二六五
參考　ヨブの歴史的存在に就て……二七〇
第二十二章　モイゼの使命……二七一
參考　ヤウエの讀み方……二七九
第二十三章　十の災害……二九〇
參考(1)十の災害に就て……二九三
(2)出エジプトの年代……三〇二
第二十四章　紅海を渉る……三〇三
參考　紅海を渉る迄の道筋……三〇七
第二十五章　紅海よりシナイ山まで……三一三
參考　シナイ半島……三一六
第二十六章　律法と契約……三二三
參考　シナイ山に就て……三二七
第二十七章　モイゼの律法……三四〇
(一)聖所……三四三
(二)教役者……三四四
(三)聖祭……三五一
(四)律法上の汚れと食物に關する規定……三五七
(五)祝祭日……三六三
參考(1)律法の目的とその重要……三六六
(2)モイゼの律法とハムラビ法典との比較……三七五
第二十八章　シナイ山からカデスまで……三七八

第三期　モイゼの誕生からカナアンの征服まで

……三八三

目次

第二十九章　ファランの荒野……三九三
参考　ホル山に就て……四〇五
第三十章　バラアムの預言……四〇六
第三十一章　モイゼの遺言とその永眠……四一六
参考　神感に就て……四二六

頁	誤	正
七一	第五章　セット	セト
一一七	第二期　召出より	召出から

舊約史要（上）

總說　舊約史の性質

(1)獨特の民族　―舊約史は又キリスト前に於けるイスラエル民族の歴史で、是こそ人類史上にその類を見ない、全く世界無比の珍しい歴史だ。宗教の點から見て然るのみならず、他の方面から云つても、彼等は驚異、感嘆を禁じ得ざらしめる獨特の民族であつたのである。（彼等はまたヘブレア人とも稱す）

祖先を尋ねると、遠いカルデアの地に出で、パレスチナに移り、若年時代をエジプトに過した。最初は是れと云ふ程の束縛も受けないで、自由に、のんびりと、しかも比較的質素に成長した。後に至つて夫れこそ苦しい、悲慘な奴隷の境遇に沈められ、隨分苦勞も見、にがい涙も呑んだものだが、突然凱旋軍隊の如く威風堂々と多年住み慣れたエジプトの地を去り、何時しか强大なる一民族となり、カナアンの地を征服して之に落着いた。彼等が獨特の政體と云ひ、完備せる法典と云ひ、四隣に國せる諸民族のそれに比べると、一頭地を抜いて居たのである。

尤も建國當初は政治的統一が十分に行はれず、爲に頗る國步艱難で、しばしば外敵の侵略に惱されたものだ。然し紀元前十一世紀頃から王國となり、ダウイド、サロモンの如き英邁な君主の下に統一せら

れて隆々たる旭日の勢を示し、四隣を討平して大に版圖を擴張した。不幸にしてサロモンの死後、内亂が突發して國家は南北に分れ、勢威もそれだけ失はれ、終にアッシリア、バビロンの諸王に征服せられて、民は多くエウフラト河の向ふへ移された。

他民族ならばそのまゝ死滅し終つて、殆どその痕跡すら留めなかつたであらうに、彼等ばかりは然らず、驚くに餘るほどの粘着力を有し、依然としてその傳統を保持した。後ペルシア王シルスの寛大な取計ひにより、多少の自由を回復して本國へ歸つた。固より當初は弱い亡國の民たるに過ぎなかつたが、刻苦勉勵の結果、次第に勢力を盛り返して繁榮に赴いた。アレクサンデル大王の歿後、エジプトやシリアの諸王から猛烈な迫害を一度ならず浴せられても、彼等は魏然として屈せず、終に首尾よくそれに打勝ち、以て國家の獨立までも回復するに至つた。ヘロデ王の時はローマの附庸にこそなつてゐたが、それでも光輝ある一時代を劃したものである。後ローマの軛が暴戾堪へ難くなるや、夫をかなぐり棄てんと欲して事を擧げ、一敗地に塗れて世界の四方に打散され、國家としては永久にその存在を失つたが、然し民族としては今猶侮るべからざる勢力を擁し、その獨特の制度、生活の樣式を固守して毫も失墜しないのである。

然し彼等に就て見るべきものは、その人的方面ではない。ダウイド王の晩年とサロモン王の治世の大部分とを除けば、その國は狹少、羸弱、到底之をエジプト、アッシリア、バビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、ローマ等の諸强國と比ぶべくもなかつた。武略は彼等の長ずる所でなく、政治文物、殖産工業の上にも、彼等は何等の見るべきものを有さなかつた。たゞ彼等が世界史上に千載不磨の名を止めるに至つたのは、その優れた獨特の宗教觀に由るのである。彼等と祖先を同うせるセム族にせよ、彼等の移住先に國せるカム族にせよ、擧つて多神教に流れ終つたにも拘らず、彼等ばかりは固く一神教を守つて動かなかつた。是れ他民族が自然の傾向に委棄せられたのに反して、彼等は神の御旨を承れる太祖や、豫言者等によつて絶えず訓戒誘掖せられた結果に外ならぬ。

蓋し神はイスラエル民族をば己が選みの民となし、特に擁護の御手を之が上に翳し、之と一種の契約を結び、以て眞の宗教を世に傳へしめ、後日救世主を遣すべき素地を拵へ置き給うたのである。

(2)舊約の意義—されば舊約史を一口に約めると、救世事業の準備とでも云つた樣なものであらうか。「滿期の時いたりて神は御子を女より生りたるもの、律法の下にありし人々を贖ひ、我等をして子とせらるゝことを得しめ給はん爲なり」(四ノ四ガラチア)と聖パウロは云つてゐる。

その所謂救世事業が神の御子たるイエズス・キリストによつて全うせられる迄には、長い〳〵準備期を要した。その準備として神がイスラエル民族と結び給うた契約を舊約と云ひ、キリストによつて遂げられた救世事業そのものも、神と人類との契約と云ふ形の下に全うせられたので、常に之を新約と呼び倣して居る。この契約の意を表すが爲、ヘブレアの原文には「ベリト—Berith」と云ふ語を用ひ、ラテ

ン譯を始め、近代語譯には、皆「テスタメントウム—Testamentum」と云ふ語をそれに當てゝある。この語は「契約」と「遺言」と二つの意義を有し、「救世」の性質を表すのに最もよく嵌つて居る。實に「救世」とは單に神と人との契約に出でたものではなく、實はイエズス・キリストが死に臨める際に我等を「神の子にして又世嗣」(四ノ七)と定め給うた遺言、殊にイエズス・キリストの御死去の結果なのである。「キリストは新約の仲介者に在して、死を凌ぎて……過を贖ひ、召されたる人々に永遠の世嗣の約束を得させ給ふ也。遺言書ある時は遺言者の死を要す。そは遺言書は人死して後に効力あり、遺言せる人の存命する間は未だその効あらざればなり」(一五—一七)

兎に角、神の契約には舊新の兩約があり、舊約は神がアブラハム及びその後裔と結び給うた契約で、それは固より不完全であり、一時的であり、たゞイスラエル民族だけを相手にしたものであつた。新約になるとイエズス・キリストが全人類と結び給うたもので、それこそ完全で、普遍的で、何時になつても不變、不動、不朽、不滅にして、萬國、萬代に及ぶべきはずのものである。

さて神が救世のために結び給うた契約の條文のみならず、その契約に關係ある歴史や教訓や預言やをば神感によつて綴つたものを聖書と云ひ、キリスト前に成つたものを舊約聖書、以後に成つたものを新約聖書と稱する。舊約史と云ふのはその舊約聖書中でもモイゼの五書—創世記、出エジプト記、レウイ記、民數紀、申命記—ヨズエ記、判士記、ルト記、サムエル書、列王紀、歴代誌略、エスドラ書、ネエミア書、トビア書、ユヂト書、エステル書、マカベ書等から歴史上の事柄を抜粋したものである。その他、預言書からも頗る重要な史實を拾ふことが出來る。

聖書は神感によつて書かれ、神をその原作者とするだけに、その語る所は純然たる眞理のみで、史料としては是ほど正確なものはない。(神感の何たるかは卷末に說明を附してある)

(3)聖書以外の史料—聖書の外に、舊約史の參考とするに足るべきものにはユデアの史家フラヴイウス・ヨゼフス(Flavius Josephus-37-105)の物せし「ユデア舊紀—De antiquitate Judaica」がある。それは世界開闢からネロ帝に至るまでのユデア史で、頗る貴重な參考史料である。たゞ著者はギリシア人やローマ人に阿り諛ふの餘り、なるべくユデア民族の特性を現すまいと務め、往々國民間に存せし傳說や聖書の記事を改作して居る。惜しみても餘ある事ごもである。

その他、ユデア教の傳說を集めた「タルムド—Talmud」、エジプトのマネトン(Manethon)(紀元前五世紀頃)ソエニキアのサンコニアトン(Sanchoniathon—神官で、その國の舊い傳說を蒐めたもの、開闢から書き出して居る)、カルデアのベロズ(Berose—紀元前三世紀頃の人)等の書き遺した歴史の斷片がある。

終に近年エジプトやアッシリア、バビロンに於て發掘された各種の記錄、神殿、墳墓、碑銘、彫刻、器具等は大いに史實を確めるに有力な傍證となるのみならず、またイスラエル國民、及び之と多少の關係を有せし隣國民の風俗、習慣、政治、宗教、家庭生活などの眞相を突留めるのに、得難い參考史料な

のである。

(4)舊約史の區分—今舊約史は之を大きく區分して九期として置く。

第一期、世界開闢からアブラハムの召出まで、

第二期、アブラハムの召出からモイゼの誕生まで、

第三期、モイゼの誕生からカナアンの征服まで、

第四期、カナアンの征服から王國の建設まで、

第五期、王國の建設から南北の分裂まで、

第六期、南北の分裂からイスラエル國の滅亡まで、

第七期、イスラエル國の滅亡からエルザレムの燒打まで、

第八期、エルザレムの燒打からバビロン囚擒の終まで、

第九期、バビロン囚擒の終からイエズス・キリストまで、

第一期中の出來事は至極簡單で、實は歷史とするに足りない位だ。嚴密に言へば、神と人との契約の歷史はアブラハムの召出に始まつて居る。その以前の出來事は舊約史の緒論か序說とでも謂つて然るべきであらうか。之を以て一個の世界史、又は諸民族史と見るのは全然誤つて居る。聖書はその第一ページから救世の歷史に外ならぬ、決して普通の萬國史ではない。隨つてその記述せる所は神の契約を寄托されたイスラエル民族のみに限られ、その他の國や、民や、種族については殆ど語る所がないのである。

參考　楔狀文獻に就て

—附たり、エジプト文字—

(イ)世界最古の文明國—世界で最も早く文化圈內に入つたのはエウフラト、チグリス兩河の會流せるカルデア地方であつた。此處の先住民はアッカド人(Akkad)、又はスメル人(Sumer)とも稱し、初め幾多の小邦に分れ、ウル(Ur)、エレク(Erech)、ラルサン(Larsan)、シッパル(Sippar)等を都としたものである。紀元前三八〇〇年頃、アッカド王サルゴン、其子ナラムーシン(Naram-Sin)は遠くシリア地方、シナイ半島にまで遠征を試みて居る。最近、此地方に發掘を試みて、原始時代の古風な楔狀文字の刻まれた偶像や、小像や、石の彫刻物等を多く發見した。其等の遺物は極めて古い時代のものたるにも拘らず、また頗る進んだ文化の跡を示して居る。特種の樣式を備へた個人間の契約書までが此處彼處から堀出された。粘土製の板に書き付け、更に其上を他の粘土板に包んだもので、その包裝にも殆ど同樣な契約文を認めてある。

(ロ)アッカド語の性質—アッカド人は果して如何なる民族に屬せしものか、セム族だと云ふ學者も二三無いではないが、多くは彼等を以てトウラニアン(Touraniens)、卽ちウラル・アルタイ語族だと主張して居る。實際、言語上から云ふと、セミチク語系でもなければ、アリアン語系にも屬しない。彼等はウラル・アルタイ語に見るが如き膠着語(Lingua agglutinativa—語根の變化せざること、文法上の關

係を表すが爲め接尾語を添加し、接頭語の用法なきこと、名詞、動詞の區別が判然せざることなど、例へば日本語の如きもの）を使用したものである。アッシリア學者間には、之をアッカド語だの、スメル語だの、スメロ・アッカド語だのと呼んで居る。アッカド語はアレクサンデル大王の頃までも、學術語としてアッシリア、バビロンに保存せられた。アッシリア王アッスルバニパル（Assurbanipal—紀元前七世紀）の如きは、人を下カルデアに遣はして、スメロ・アッカド語で綴つた古文書を騰寫、飜譯せしめ、國民教育の爲にこれを之をニニヴ宮殿内の圖書館に所藏したものだ。幸ひ右の文書は大部分發掘せられたが、アッシリア語に飜譯してあるので、容易に之を讀破することが出來る。アッシリア・バビロン文化の淵源を研めるのに頗る貴重な參考資料である。

彼等の使用せし文字は楔狀文字（L'écriture cunéiforme）と稱する。字畫が楔形を成せる所から斯く呼び做したものである。つまり一種の繪畫文字で、最初は右から竪に書き下すのであつたが、後次第に發達して、線畫體（Lineaires hieratiques）と成り、紀元前十八、九世紀の頃、アッカド人がバビロンに征服せられるや、この繪畫文字もセム族の採用する所となつた。そしてバビロンでは紙がなかつたので、粘土にその文字を書き、日光に乾すか、火に燒くかして固めたもので、之を書くには勢ひ金屬か象牙の如き硬い三角の筆を用ゐる必要があつた爲め、字畫は舊體を維持すること能はず、自から楔狀文字と變じ、書寫法は左記横行となり、繪畫文字は何時しか音譜文字となつた、とは云へ一方にはなほ表意文字としても、殊に「人」「王」「月」等と云ふ樣な常用語の如きは、そのまゝ使用せられたものである。

（八）發掘の歴史—從來アッシリアとバビロンの歴史は舊約聖書に散見せる外、ヘロドトス（Herodotos）の歴史や、バビロンなるベル神の司祭ベロズ（Berose）が紀元前二七五年に書き殘した文書の斷片に賴るより外はなかつた。然るに一八四二年以來アッシリア、バビロンに大々的發掘が行はれ、大古の王宮、神殿は勿論、紀元前三千五百年頃から紀元壹百年頃までに及べる歴史、文學、宗教、法律などの參考資料が夥しく堀出され、各國の學者は非常な興味を以て之が研究に從事し、未聞の新事實を續々と發見するに至つた。

楔狀文字

抑もニニヴは紀元前六一二年バビロン、メヂア、シチアの聯合軍に滅されて以來、全く土中に埋沒し終つて痕跡を止めず、その位置すらも確に知り能はぬのであつた。然るに印度商會の代理人でバグダドに勤務せる英人レイチ氏（Raich）は一八一一年エウフラト、チグリスの流域を遍歴し、其後もまたヒルラ（Hillah）、コユンジク（Koyundjik）、モッスル（Mossoul）等を巡遊せる際、釘の如き不思議な文字を記入せる陶器や煉瓦の破片を拾ひ、何かの參考にもと之をロンドンのブリテン博物館に送つた。

（二）ボッタの偉勳—偶々佛國パリー亞細亞協會の秘書ジュル・モル氏（Jules Mohl）はロンドンに遊んで之を見、右樣な古遺物の落ちて居る地域を探檢したらば、歴史上極めて重要な發見をなし得るに相違ないと獨り自ら考へて居ると、恰もよし一八四二年佛國政府はボッタ氏（Botta）を代理領事としてモッスルに派遣することゝなつた。之を知つたモルは大いに喜び、早速自分の考をボッタに打開け、駐劄地附近に發掘を試むべく

勸めた。ボッタはその勸めに從ひ、任地に赴くや早速作業に取りかゝり、案の如くニニヴ（今のコユンジク）、及びコルサバド（Khorsabatd）の廢墟を發見した。たゞコユンジクでは發掘が淺かつた爲、地中に埋沒せる寶物は後から來た英國探檢家の手に歸して、ブリテン博物館を飾る珍藏品となつた。

その代りにボッタは一八四三年コルサバドに於てサルゴン王の宮殿を堀當てた。その宮殿の浮彫は延長一九九八メートル、總面積六〇〇〇平方メートルに及び、極めて多方面に亘れる出來事を實寫したもので、殆どアッシリア全史の百科辭典とも謂ふべきであつた。別に楔狀文字を刻んだ長い大碑銘も發掘されたが、惜しい哉、宮殿は陷落の際、兵燹に罹り、その大理石は石灰化して居た分が少くはなかつたので、濕氣を帶びた空氣に觸れるや、忽ち瓦解して粉末となり、珍らしい繪畫、彫刻が多く永久に失はれ終り、たゞ無事に取止め得たのは碑銘だけであつた。

千八百四十五年ボッタが發掘物を携へてパリーへ歸るや、噂は忽ち全歐洲に響き渡り、各國の學者は競つてモッスル附近に蝟集した。一八四五年から一八四七年にかけて英人レイヤード氏（Layard）はボッタがコルサバド宮殿の發掘に沒頭してゐる間に、モッスルの南方のカラク（Kalach、今のNemrod）コユンジク等を探檢して八個のアッシリア宮殿を發見した。一八四九年から一八五一年に亘つてセンナケリブの宮殿を一層深く探つて、アッスルバニバル（Assurbanipal）王の圖書館の一部を掘出した。ジョウジ・スミス人のラッサン（Rassam）は亦アッスルバニバル王の宮殿内に他の一部を掘出した。ジョウジ・スミス氏（George Smith）が一八七一年に同所で發掘した三千の粘土版、四年の後ラッサムが掘出した千四百の粘土版を合せると二万枚以上に上り、その中には綴字表あり、文法書あり、辭典あり、すべて楔狀文字を讀み、その意義を闡明するに要する書籍は殘らず手に入つた譯で、實にアッシリア・バビロンの典籍を研究するに非常な助となつたものである。續いて英、米、獨の諸學者はバビロンや、ウル（Ur—今のMugayyar）や、ニップル（Nippour—今のNuffor）等を探檢して、種々の古い、貴重な遺跡を發見した。終に一八九七年、佛人ド・モルガン氏（De Morgan）はエラムの舊都スサン（Susan）に發掘を試みて、得る所が頗る多く、殊に一九〇一年の末には有名なハンムラビ（Hammourabi）法典を刻んだ石柱を掘出した。

發掘は是で終つた譯ではない。舊い都市の跡で、未だ一度も手を着けないもの、手は着けてもたゞ表面たけに止まるものが頗る多い。ヒルプレチュ氏（Hilprecht）の說によると、ワルカ（Warka、昔のOurouk、又はErech）の廢墟は全バビロニア州中の最も廣大なもので、之を隅から隅まで發掘するには二百六十万フランクと少くも五十年の歲月を要し、ムガイヤル（Mugayyar—昔のウル、アブラハムの出身地）の發掘にでも、百万フランクと二十五年の日子を費さねばならぬと云ふことだ。

（ホ）文獻の價値—抑もアッシリア、バビロンの書籍は平い、四角な粘土板の兩面に草書體で極めて線を細く、密接に書き並べ、日光に乾かすか、火に燒くかしたものである。

この粘土板には一々枚數を記し、同じ形の幾枚かを集めて一冊となしてある。各板は上欄に枚數を記すのみならず、下にも次の板の第一字を記してある。書籍の形は大小一樣でなく、枚數にも不同がある、百枚以上から成つた書籍さへ見受けられる。

ニニヴ王の圖書館はその發見された斷片から以て察すると、凡そ一万冊近くの書籍を藏し、當代學藝の殆ど全部を網羅したものらしく思はれる。王宮の階上に之を所藏し、神學、天文學、政治史、博

物誌、文法、辭典、地理、其他邦國、都市、山川、住民の大要と云ふ樣に、科に從つて夫々分類し、圖書館員が所藏書籍の目錄を作つて之が保存に當つたものである。目錄の外に題號を書いた卵形の板も發見された。今日洋書の背に題せる書名の如きものであつたらうか。同じ書籍にも篇毎に題名を附けてある。題名は論語に「學而篇」だの、「鄕黨篇」だのとあるが如く、各篇の書出しの第一句を取つてある。

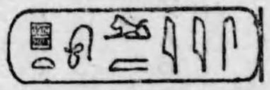
アッシリア人はその記錄を作るに何故粘土板を用ゐたかと云ふに、彼等はエジプト人の如くパピルスを有たなかつた。ペルガム、ギリシア、ローマ人の如く洋皮紙の用途も格別知らなかつた、知つては居たにせよ、廣く行はれなかつたらしい。たゞ粘土が多かつたものだから、之を以て紙に代用したので、爲に幾千年の久しきに亘つて、よく水火の難に堪へ、以て當時の文物制度を今日に傳ふるを得たのは何よりの幸であつたと謂はなければならぬ。

夫ればかりか、若し是等の遺跡が二三世紀も前に發見されたものなら、或ひは無用の長物として破却放擲し去られたかも知れない。然るに言語學は長足の進歩を遂げて、太古の死語をもよく讀破し得る學者が輩出し、史學は空前の發展を遂げ、古文書に重きを置くの風を馴致し、而も交通の便は開けて運搬は容易となり、寫眞術の發達も著しく、坐ながらにしてその實形を觀察し得る十九世紀の後半に至つて之が發掘されたのは、全く神の特別の攝理に出たものと思ふより外はない。

(ヘ)聖書との關係—この發掘によつて、舊約聖書の記事は少からず闡明され、根據づけられ、裏書きされるに至つた。蓋しヘブレア人はアッシリア、バビロン人とその祖先を同くし、長らく同一の地に住み、同一の生活をなしたものである。アブラハムの移住後、兩民族は東と西とに遠く相離れたにも拘らず、嘗て一家をなせし當時の面影は失はなかつた。その言語、風俗、習慣は餘程相類似したもので、全然相違せるのはたゞ宗教のみであつた。ユダヤとイスラエルが袂を分つて獨立した頃からアッシリアとの關係は再び頻繁となり、兩國の重要事件には、毎度アッシリア王が干渉の手を突込む樣になつた聖書の中でも、ヨナ、ユヂト、ナフムの三書は專らアッシリア關係の事を錄し、トビア、エゼキエル、ダニエル、エステルの諸書も、アッシリア、バビロンに囚はれの身となれるヘブレア人の出來事を書き留めたものである。古代民族中にあつて、アッシリア、バビロンほど多くヘブレア人に接觸したものはなく、隨つて彼等の歷史ほどヘブレア人の歷史を明にするのに有益、且つ必要な傍證を與へるものはないのである。

(ト)エジプトの文化—アッシリア・バビロンと匹敵すべき世界最古の文明國はエジプトであつた。しかもエジプトの古代史は漠然と取留めもない口碑傳說の上に築かれたものではない。エジプト人は正銘的確な世界最古の史料を多く遺してくれた。夙に宏壯なる神殿を建て、雄大驚くべき金字塔を築き、高い一本石の方尖碑を作り、之に見事な浮彫を施し、象形文字の前身たる繪畫文字を以て、立派な體をなせる詩文を銘刻した。

其等の遺跡によつて、この國の風俗、宗教、文化の程度が十分に伺はれる。しかもヘブレア人はこの國に四百年以上も安住し、カナアンに歸國後と雖も「全くリシ風馬牛相關せず」ではなかつたので、エジプトの風習や、慣例や、日常生活やアッはヘブレア人の夫れを明にするのに頗る助けとなることは言ふ迄もない所である。



ΠΤΟΛΕΜΑΙΟΣ

猶エジプトは空氣が乾燥し、寒暑の差も甚しくないので、古代の遺跡は多く舊のまゝ現存して居る。ピラミッド内なる石棺からは木乃伊と共にパピルスに書いた「死人の書」なるものが發見され、それによつて三四千年前の古い文化が、我等の眼前に展開されて來たのを見る樣な心持さへ覺えるのである、

(チ)**死人の書**—こは埋葬詩集、又は死者案内記とでも云はうか、冥土に於て爲すべきこと、呪禁やら、祈禱やらをする方法、神の前に出たとき申上ぐべき詞、三途の河を渡る爲の船を得る手段、極樂に到るべき道、恐るべき敵の容貌等を敎へたもので、その寫の一部、もしくは全部を死者に持たしてやるのは、何よりも有難い供養たつたのである。

(リ)**パピルス**(Papyrus)—は我國の「かやつり草」と同種で、ニール河畔に叢生し今でも上流のヌビアにはその野生を見ると云ふ。この草は腕大の根が深く泥中に横亘し、隨所に發芽して、約五六尺もの三角狀莖幹を生じ、その先端に花を開く、莖の內部なる軟質部は食料に適し、莖部は撚りて繩を造り、或は織りて帆布を製し、ヌビア人は之を編んで扁舟を作ると云ふ。モイゼの流された舟もこのパピルスで編んだものであつた。然しその用途の最も廣いのは紙の代用であつたのである。

その製法は先づ莖部を一定の長さに截ち、外皮を去りて縱斷し、一層づゝ剝ぎ取つて臺盤上に擴け、斯くて縱橫に數枚を重ね、之に一種の粘性を有するニール河の水を注ぎ、强く壓搾して層々相粘着せしめ、後日光に乾かして仕上げるのである。斯くして出來上つたパピルスは色が純白で、纖維の縱橫に配列せる美麗な紙となり、頗る耐久性に富み、幾千年前のものが今猶現存するのを見るのである。パピルスは長く繼ぎ合せ、卷物として取扱つたものゝ如く、古墳、等から發掘して、博物館に藏めたものには、この種のものが頗る多い。

第一期　世界開闢からアブラハムまで

第一章　世界開闢

(一)**創世記の書き出し**—創世記には世界開闢の話から書き出して、

「始に神は天と地とを創造し給うた」

と大書特筆してある。「始」とは時の始まる刹那を指したもので、それまでと云ふものは、天も地も海も陸も、草木、禽獸、人類、一として存在するのではなかつた。存在しないから、變遷もなければ、榮枯盛衰もなく、隨つてまた時と云ふものもなかつた。時が始まつたのは物の創造されてからのことで、たゞその間は全能、全智、無量、無邊、無始、無終の神が、その尊く明るい永遠の中に在すのみであつた。

創造の二字はヘブレア語「Bârâ」の譯で無より造出すことを意味する。全く何もなかつた、何處にも存在しなかつた天地萬物が、神の全能によつて存在を與へられたことを敎へたものである。

次に創世記は話を地球の上に移して、その地球が渾沌として秩序もなく、光もなく、生命もなく、しかも夫れを眞暗な闇の幕が包み、神の靈—聖靈—が淵の面を蔽ひ給ふのであつた、と記して居る。この

渾沌として、それと定つた形すらないものを神は六日間にそれ〴〵整理し、按排し、裝飾、完成して、今の如き見事な世界となし給うた。六日とは二十四時間を一日とした六日ではなく、想像も及ばぬ程の長い〳〵歳月を大きく六つに區分けした迄に過ぎない。今その所謂六日間の御業を聖書の本文によつて伺ふことにしよう。

(2)六日間の御業―「始めに神は天と地とを創造し給うた。地は形なく、空しくして暗黑淵を包み、神の靈、水の面を覆ひ給ふのであつた。

「光あれよ、と神が宣ふや、光があつた。神は光を善と觀給うた。神は光を暗より分ち、光を晝と呼び、暗を夜と名け給うた。夕あり朝あり、是れ第一日である。

「神は又宣うた、水の中に大空あつて水と水とを分てと。斯くて神は大空を造り、大空の下の水と大空の上の水とを分ち給ふと、卽ちさうなつた。神は大空を天と名け給うた。夕あり朝あり、是れ第二日である。

天地萬物の創造

「神は又宣うた、天の下の水は一處に集つて乾いた土が出よと。卽ちさうなつた。神は乾いた土を地と名け、水の集りを海と名け給うた。神はこれを善と觀給うた。神はまた宣うた、地は青草と種を生ずる草と、その類に從つて實を結び、自ら種を持つ樹とを出せと。卽ちさうなつた。地は青草とその類に從つて種子を持つ草と、その類に從つて實を結び、自ら種を持つ樹とを生じた。神は之を善と觀給うた。夕あり朝あり、是れ第三日である。

「神は又宣うた、天の大空に光明あつて、晝と夜とを分ち、季節と年とを示す爲のしるしとなり、又天に光明あつて地を照らせと。卽ちさうなつた。神は二つの巨な光明を造り、大きい方に晝を、小さな方に夜を司らしめ給ひ、又星をも造り給うた。神は是等を天の大空に置いて地を照らし、晝と夜とを司らせ、光と暗とを分たしめ給うた。神は之を善と觀給うた。夕あり朝あり、是れ第四日である。

「神は又宣うた、水には生物が數々生じ、地の上、天の大空の面に鳥は飛ぶべしと。又神は巨きな魚と、水中に多く生じ且つ動くべき諸の生物をその類に從つて造り、又翼あるすべての鳥をその類に從つて造り給うた。神は之を善と觀給うた。神は是等を祝して、生めよ、殖えよ、海の水を充せ、又鳥は地に蕃息よと宣うた。夕あり朝あり、是れ第五日である。

「神は又宣うた、地は生物をその類に從ひ、家畜と爬蟲と野の獸とをその類に從つて出せと。卽ちさ

うなつた。神は野の獸をその類に從ひ、家畜とすべての爬蟲とをその類に從つて造り給うた。神はこれを善と觀給うた。

「又神は宣うた、我等に像り、我等の俤の如くに人を造り、海の魚と空の鳥と、すべての家畜と、すべての地と、地上を匍ふすべての爬蟲とを司らしめようと。卽ち神はその像に從つて人を造り、男と女とに之を造り給うた。神は彼等を祝して、生めよ、殖ゑよ、地に充ちて之を從はせよ、海の魚と、空の鳥と地上に匍ふすべての生物とを治めよ、と彼等に宣うた。

「神は又宣うた、視よ、我全地の上にある種を持てるすべての草と、種になるべき果を結ぶすべての樹を汝に與ふ。是は汝の糧となるであらう。又地のすべての獸と空のすべての鳥と、地上に匍ふすべての物で生命あるものには、食物として諸〻の草を與ふと。卽ちさうなつた。神はその造り給うたものを觀給へるに、皆甚だ善かつた。夕あり朝あり、是れ第六日である。

「天と地とそれに含まれるすべてのものは悉く成つた。第七日に神はその造り給へる業を竣へ給ひ、卽ちその造り給へる業を竣へし七日目に安息し給うた。斯くて神は第七日を祝して之を聖とし給うた。そは創造して爲し給うたすべての業を竣へて、この日に安息し給うたからである」

是が創世記の開卷第一章に描いてある「ヘクサメロン—Hexameron」卽ち六日間の御業で、詩篇第百三(ヘブレア文第百四)にはこの御業を美しい詩に作り、造物主の驚くべき全能、感ずべき愛、嘆賞に餘りある御情等を巧みに歌つてある。

その日〻の業が成る毎に神は「之を善と觀給うた」が、最後に「その造り給うたものを觀給へるに、皆甚だ善かつた」と記してある。この勝れた藝術家は一々その作を打眺め、全部完成した上では、更に之を通覽し給うた。何れも理想通りの出來榮で、相互間の調和も全く申分がないのを見て、滿足の微笑を洩し給うたのである。

第三日に草木が造られ、生命がこゝに始まつた。水に游ぎ、空に翔ける動物が世に顯はれたのは、やつと第五日で、夫れには造物主の特別な祝福さへ施された。

第六日には高等動物が顯はれ、是で一切の準備が出來あがつたので、最後に有形世界の傑作たる人間が造られた。神は之が創造に着手する前に、暫く沈思熟考でもし給ふかの如く、「我等に像り、我等の俤の如くに人を造らう」と宣うた。是こそ我等人間の又なき光榮、比びなき特典で、實際ここから見ても人間の上には神の俤が輝いて居る。その形態の美しさや、他の被造物の上に有する支配權は言ふ迄もなく、理性あり、自由意志あり、道德心あり、超自然的聖寵も惠まれてあり、殊に造られた當時は不死で無罪で、その幸福には一點の翳すら掛つてゐなかつたのである。

(3)諸國の開闢說—世界開闢說は何れの民族間にも存したものだが、然し聖書のそれに比べると全くお話にならぬ。バビロンの神話には「天地いまだ開けない時、萬物の起源は渾沌たる水であつた……マルド

ウク(Mardouk)と云ふ勇士がティアマ(Tiâmat)と云ふ女神を眞二つに斬ると、その半身が天となり、他の半身が地になつた」とある。

フエニキア人は「最初世界は渾沌狀態に在り、暗黑に包まれて居たが、幾世紀かの後に神靈と渾沌とが相合して世界を造つたのだ」と說いて居る。

支那の三五略記には「天地洋海鷄子の如し、盤古その中に生れ、一万八千歲、天地開闢、陽晴天となり、陰濁地となる、云々」とある。

日本書紀は支那の傳說をそのまゝ轉載したものらしく、「古へ天地いまだ剖れず、陰陽分れざる時、渾沌たる鷄子の如く溟りて牙を含めり。その淸み陽なるものは薄靡いて天となり、重く濁れるものは淹滯いて地となり……神聖その中に生れます」と云つて居る。

古事記の言ふ所は少し異つて居る。「天地の初發の時、高天の原になりませる神の御名は天之御中主神、次に高御產巢日神、次に神產巢日神……次に國稚く浮脂の如くして海月なす漂へる時に、葦牙のごと崩ゐ騰る物によりて成りませる神の御名は、うましあしかびひこぢの神云々」

何れの開闢說も「渾沌」を認めると云ふ點には一致して居る。是は最初の口碑の遺跡と見てさしつかへあるまい。然しその渾沌が如何にして生じたかと云ふ點は一向明にしてない。しかも多くは日本書紀と同じく、渾沌があつて、然る後神がその中に生じたかの如く說いてある。是等に比べると聖書の開闢說は全く類を絕したもので、開卷第一ページから、

1—唯一無二、無限絕對、全能全智全善の神の存在し給ふこと、

2—宇宙の起源は偶然にあらず、自然にあらず、神の自由意志によりて無より創造されたこと、

3—人類はアダム、エワの夫婦に出で、如何なる人種、民族を問はず、文野、賢愚、古今、遠近を論ぜず、すべてこの兩人を祖とし、その流を汲めること、

4—人類は特に神の僕に從つて造られ、他の動物からすると、限りなく尊貴くして、到底日を同うして論ずべからざること、

等をはつきりと敎へてある。

敎訓—ダウイドは天地萬物を打眺め、その調子よき自然の聲に耳を傾けて、「天は神の御光榮を語り、その御手の業を蒼穹は告ぐ」(詩篇八ノ二)と叫んだ。實に天も地も、廣い海も、高い山も、生けるもの、呼吸せるもの、動くもの、すべて神の御光榮を歌つて居るが、然し自分ではその意識がない。聲は持つて居るけれども、魂を持たない。是非とも智慧あり、意志ある人間がその聲に魂を入れて活きた讃美となし、以て神の御光榮を揚げ奉らねばならぬ。その爲にこそ造られたのだから、人たる者は飽まで己が品位を認め、萬物の靈長たる身を持ちながら、自ら賤めてその奴隷となる樣なことをしてはならぬ。

參考（1）科學上から觀た世界開闢說

（イ）科學の叫び――世界開闢に關して聖書の敎へる所は　前章に略述せし通りであるが、十九世紀以來、實驗科學もまたこの問題に携つて、それ〴〵自家の信ずる所を主張するに至つた。その主張と聖書の所說とは一見非常に齟齬せるかの如く思はれるので、非キリスト敎徒は得たり賢しと、直に聖書の誤謬呼はりをやり出した。されば實驗科學の主張する所が何であるか、その主張と聖書の所說とは到底氷炭相容れざるものであるか、この二點を詳にするのは極めて重要たると共に興味もまた淺からぬことゝ信ずる。

さて一口に實驗科學と云つても、世界開闢問題に喙を容れ得るのは、天文學、地質學、古生物學の三者に過ぎない。固よりこの三者と雖も、宇宙の第一起原に關しては何等言及する所もなければ、また言及する資格も有せぬ。是は頭から實驗を超越し、全く哲學の領域に屬する。その哲學は天啓に導かれて研究の步を進め、物質の第一起原にまで溯つて、之を無限絕對なる神の創造的能力に歸する。たゞその第一物質よりして宇宙がどんな鹽梅に生成されたかと云ふことだけは、類推(Analogie)やら、正しい歸納法(Induction legitime)やらを以ておし究めることだけが、實驗科學の畑なのだ。天文學者が宇宙の生成を解說せんが爲に案出した星雲說の如きが正しく夫である。

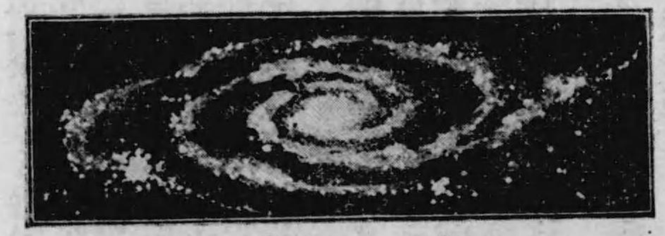
（ロ）星雲說――星雲說は最初デカルトの考案に出で、カントやハーシェルが之を敷衍し、ラプラスが之を系統的に組織し、ファイユ、及びその他の天文學者によつて修正、補足されたものである。最近に至つて更にチエンバリンやムルトンの微遊星說だの、ジーンスの新說だの、次から次へと顯れ出て居

るが、何れも皆星雲にその出發點を置いて居るのである。

然らば星雲とは何であるか、天空を望遠鏡で覗くと、光輝の極めて薄い、擴りの甚だ大きい、雲や霧の如くぼんやりと見ゆる天體がある。之を星雲(Nebuleuse)と稱する。其數は非常に多く、望遠鏡で見得るのは、數百万に上り、その形によつて無定形星雲、環狀星雲、瓦斯狀星雲、渦狀星雲等と呼ひ做して居る。

ラプラスは是等の星雲から思ひ付いて、太陽系生成の次第を想像したのである。即ち初は極めて高溫の瓦斯狀星雲が太陽系の最も遠い海王星の外方にまで擴り、その中心を通る軸のまはりに徐々と回轉しつゝあつた。然るにその瓦斯團は表面から熱を輻射して次第に冷却し、體積を減じ、それと共に回轉は漸く迅速となつた。爲に遠心力の最も大きな赤道附近は膨脹し、終には母體を離れて輪を造つた。現に土星の如きは今なほ輪を伴つて居る。してその輪は組織の均等ならざる所からして一部分が切斷され、集つて一個の惑星となり、惑星はまた同樣にして自家の衛星を作つたのだ。故に惑星でも衛星でも、大抵同一面上を同じ方向に運轉する云々。

この說は一時非常なセンセーションを學界に與へ、殆ど動かすべからざる眞理の如く持囃されたものであるが、望遠鏡の進步するに隨ひ、土星の輪は瓦斯ではなく、微細な星塵であることが判つて來た。その上、木星の第八、第九衛星、土星の第十衛星、及び天王星や海王星の諸衛星は、何れもラプラ



ラプラスの星雲說

スの主張を裏切つて逆行し、殊に天王星のそれになると、主星の軌道面とは殆ど直角をなして回轉して居る。ラプラスの星雲説はその根據を奪はれ終つたので、種々の修正案が提唱されることゝなつた。

十九世紀の末葉に當つて米國のチエンバリンとモールトンの兩氏は渦狀星雲から暗示を得て、新に太陽系生成論を公にした、星雲の中で最も多いのは渦狀星雲で、その數は一百万にも上り、之が進化して行くに隨ひ、中央の核は終に太陽となり、腕の節々は密集して惑星や衛星となるのだ。してその所謂渦狀星雲はどうして出來たかと云ふに、一個の恒星が偶然相接近した刹那、互に潮汐作用を及し、その結果、星の表面の一部が脫離して外界に飛出し、渦狀の腕の形に配列したのだ、と恰度見て來たものゝ樣に想像を逞うして居るのである。

英國のジーンスは一歩進んで太陽系生成の假説を恒星界全般に及し、宇宙は最初形も何もない大きな瓦斯團から出發して、漸次一個の渦狀星雲に變じ、それが更に發達して幾多の恒星に分れた。その恒星は何等かの作用によつて回轉しつゝあつたが、收縮と共に益々その回轉速度を增し、自體の分裂を來し、惑星や衛星を生むに至つたのである。

何れもラプラス説の燒直しで、固より一個の假説たるに過ぎない。だが是を以て事實に近いものとするならば、

1—星雲瓦斯團から恒星の發生を見るに至るまでの年數は、到底算へも計りもされたものでないこと

2—各恒星の發生は決して時を同うして居ない。互に長い間を隔てゝ相前後して居ること

この二つを承認しなければならぬ。

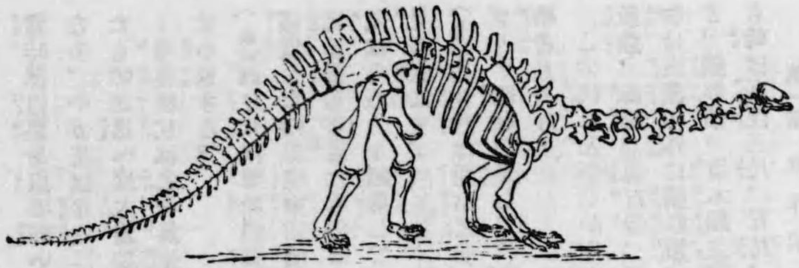
(八)地質學と古生物學—星雲説に從へば吾地球の如きも同じく中心星雲から脫離したもので、脫離した當時は白熱を以て輝いて居たに相違ない。だが時を經るに隨ひ、次第にその熱を放散して黃色の星となり、やがては赤色に變じ、いよ〳〵冷却して皮殼に覆はれ、無光體となり、斯くて地質時代に入つたものと思へば大差ないであらう。

地質時代は之を無生時代と有生時代の二つに大別し、有生時代は更に之を古生代、中生代、新生代に小別する。

(a)無生代は地球の表面に皮殼が生じたばかりの時代で、溫度はなほ非常に高く、今日の海水は皆水蒸氣となつて空中に飛んで居たのみならず、炭酸、塩素、弗素、その他種々の揮發し易き瓦斯類も皆之に混じて居たものと思はなければならぬ。然るに溫度が下降して三百七十度以下になると、水蒸氣はそろ〳〵凝集して水となり、地球は一時熱水の下に葬り去られた。隨つて當時まだ生物の發生を見る能はず、この時代に出來た地層は全く化石を含有して居ない。無生代と稱するのは之が爲である。

(b)古生代は通常之を分つてカンブリア紀、シルリア紀、デウオン紀、石炭紀、二疊紀となす。カンブリア紀を二分して、前カンブリア紀とカンブリア紀となし、前カンブリア紀を原生代と呼んで居る學者もある。

この代に入つてから生物が始めて海水中に顯れた。實際原生代の地層中には、少數ながら海藻、放散蟲、海綿、海百合、三葉蟲等の化石が發見される。尤もシルリア紀までは殆ど海產動物のみで、植物は海藻の外に鱗形類、羊齒類、石松類がちらほら見え出した迄に過ぎない。然るに石炭紀に入ると、鱗形類、蘆木類(木賊の類)、羊齒類等の陸生植物が全盛を極め、高さは四十尺、六十尺、百尺から竦は直徑三尺、五尺、六七尺にも及び、現今熱帶地方に見る沼澤的大叢林の如き觀を呈するのであ



ブロントサウルス雷龍

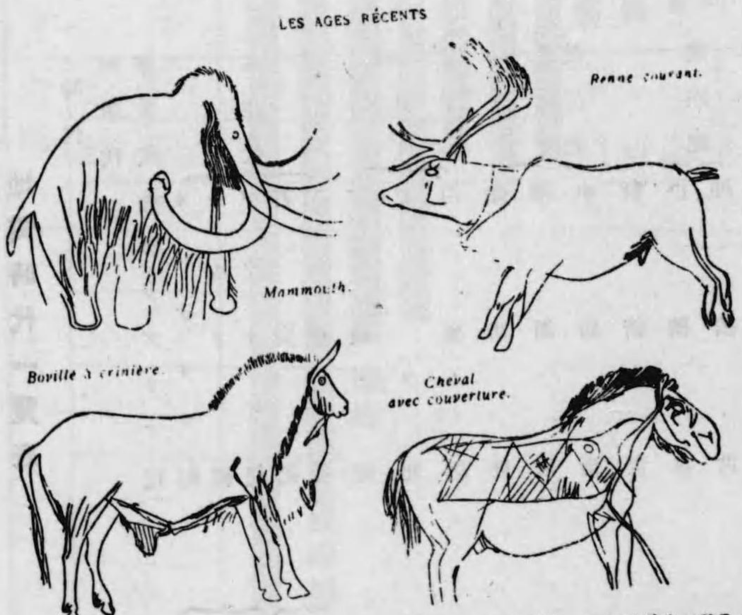
つた。今日世界に存する古い石炭層は實に是等の植物が炭化したものに外ならぬ。

(c)中世代は三疊紀、ジュラ紀、白堊紀の三よりなる。この時代に入ると古生代の植物は大抵死滅し終つて、新に蘇鐵と松柏類が繁茂し、動物界は爬蟲類が代表して居る。身長八メートルに及べる魚龍(Ichthyosaurus)、背面正中に三十メートルもあらうかと思はれる載域龍(Atlantosaurus)、十二枚の劍狀突起を戴き、身長約十メートルに及べる劍龍(Stegosaurus)等が淺海を游泳するやら、陸上をのそり〳〵と徇徇するやらしたものである。

その他翼手龍(Pterodactylus)の如く、空中を飛翔せる爬蟲類、始祖鳥(Archæopteryx)の如く、爬蟲に類似せる鳥等がジュラ紀の終頃から現はれて居る。

(d)新生代は第三紀と第四紀とに區分し、動植物とも現代の夫れにいよ〳〵近似して來た。是までは地球上到る處、すべて一樣に熱帶の氣候で、今日永久の雪に埋れて居るグリンランド地方にでも、赤道直下と同じ植物が繁茂して居たのであるが、この頃から熱帶、温帶の別を生じ、次第に四季の變遷をも見る樣になつた。

第三紀は更に小さく分つて始新世、漸新世、中新世、鮮新世となす。



植物には濶葉樹が現はれ、動物を代表せるのは、哺乳動物で、中にも兇猛類(Dinotherium)や乳房齒類(Mastodon)の如き巨大な長鼻類を始め、馬、河馬、犀等がこの紀に現出して居る。

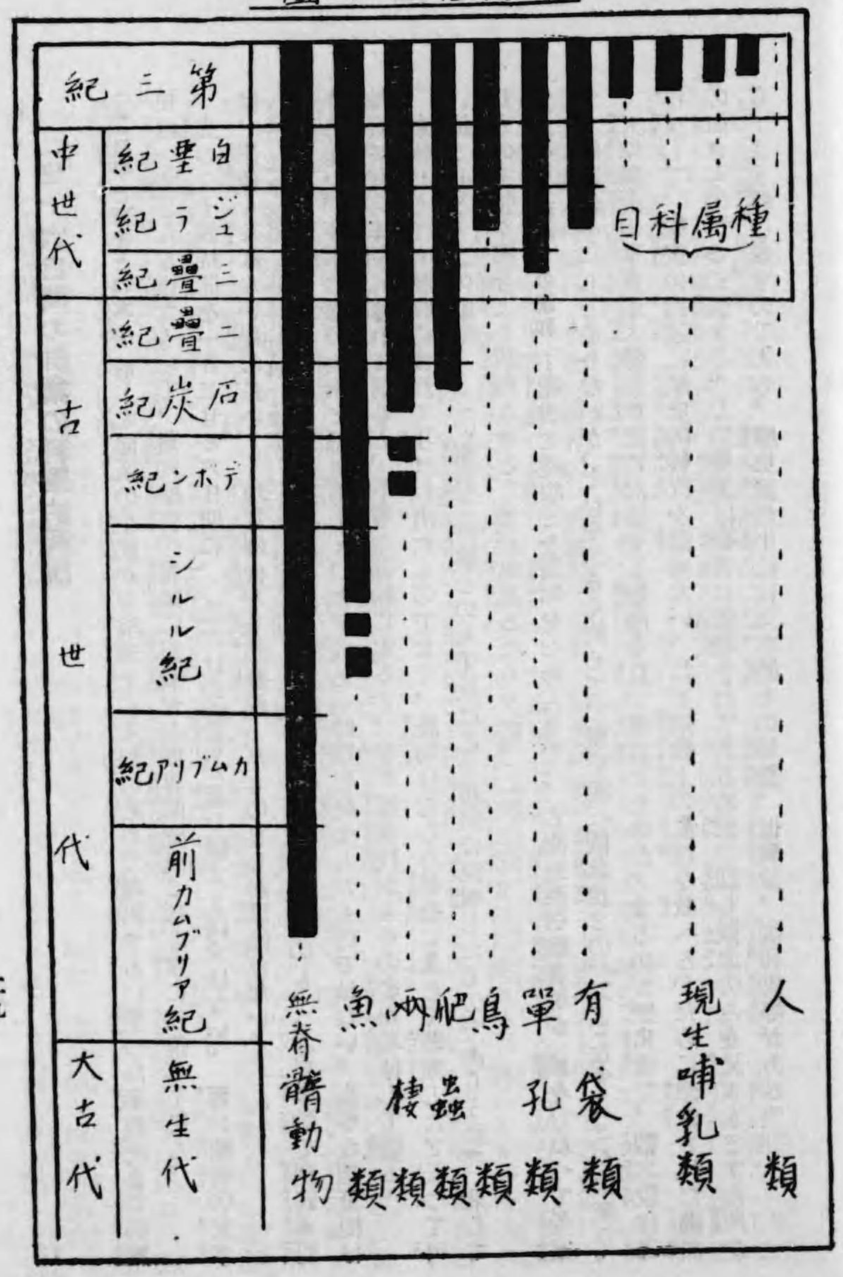
第四紀は最新の前世界で、常に之を洪積世と沖積世とに區分する、沖積世は即ち現世界だ。洪積世には氣候が一般に寒冷で降雪多く、北歐アルプス山や北アメリカ等には、今のグリンランドの內陸も同樣な氷河を見るに至つた。無論この寒冷な氣候は全洪積世を通じて變化なしに繼續した譯ではない。幾回も温暖な氣候と交代し、その都度氷が伸びたり、縮んだりした。氷の伸びた時期を氷期と云ひ、温暖期を間氷期と稱する。

して當時の寒濕な氣候に應じて蕃殖した動物は、マンモス象(Mammoth)、馴鹿、穴熊等である。人類が始めて現出したのも、このマンモス等と時を同うしたことは、彼等が岩窟內にマンモスや馴鹿等のスケッチを遺して居るのを以ても知られよう。

地質時代一覽表

時代			生物
無生代			ナシ
原生代	前カンブリア紀		
古生代	カンブリア紀		海藻、珊瑚、海百合、三葉蟲
	シルリア紀		甲殼類
	デヴォン紀		羊齒類
	石炭紀		魚類
	二疊紀		
中世代	三疊紀		松柏類
	ジュラ紀		爬蟲類
	白堊紀		
新生代	始新世		濶葉樹
	漸新世		哺乳動物
第三紀	中新世		
	鮮新世		現代種
第四紀	洪積世		
	沖積世		人類

動物發生の圖



（2）六日間の御業の科學的解說

（ニ）科學と聖書との大矛盾—太陽系の生成から地球上に人類の始めて現出するに至つた第四紀までの歷史は一すこんな樣なもので、舊約聖書の卷頭に記載せる世界開闢說とは非常に相違して居る。

先づ二十四時間を一日とせる六日間に、是だけの變化が起り得ようはずはない。舊約聖書の記事は、想像も及ばない程の長い〳〵地質時代を全然無視したものとしか思はれない。

日、月、星は地球が既に完成し、草木も繁茂した後に造られたと云ふのも、非科學的で到底承認されない。草木は他の生物と懸け隔てゝ、たゞ或る一時期に發生したものではない。高等な濶葉樹は地質時代の末期に顯れて居るが、下等な藻類になると、早や原生代からその姿を現はして居る。

動物にしても植物に後れて現はれ出たものでなく、最初はむしろ植物に先じて蕃殖したと云つて可い位である。この齟齬、この聖書と科學との大矛盾は之を如何に說明したものであらうか。

（ホ）聖書と科學との調和—聖書と科學とを調和せしめんとして、古來東西の學者等が頭をひねつて考案せし解說は一にして足りないが、それを大きく約めて、歷史說と觀念說との二つとなすことが出來る。

天地開闢の事實が大體創世記に記述せる順序を以て進行したのだとするのが歷史說で、觀念說は之に反して、聖書の記述に歷史的性質を認めない、たゞ宗教上の眞理を敎へるがために想像された畫面の如きものだと主張する。この解說は聖書に表現されてある思想、即ち觀念のみを見ようとする所から、さう呼び做すのである。歷史說の中には文字通りの解說、復興說、調和說等がある。

（1）文字通りの解說—とは、聖書の記事をあるがまゝに解釋する方で、「日」とは二十四時間を一日としたもの、世界は實際創世記に記述してある順序で、一週間內に創造されたのだ、と手輕に片付けて了ふのである。

この說は古代の聖エフレム、聖ヨハネ・金口、ニースの聖グレゴリオ等を始め、すべてアンチオキア學派の間に行はれ、中世紀學界の一般通說となり、初代のプロテスタント神學者も概して之を採用したものである。今日と雖も極く少數ではあるが、なほ頑としてこの解說を固守せる學者がないではない。前世界の地層や化石はあのまゝ神に造られたか、或は人類創造後の天變地異、殊にノエの大洪水によつて生じたかしたのだ。地質學者の言ふことなど、餘り當にされたものではないのだ等と、頑張つて居るのである。

なるほど地質學者の言ふ所は甲論乙駁、相一致しない點も少くないが、然し地球生成に關する彼等の學說は、大體に於て確實な根底に基き、万人の承認する所となつて居る。隨つて今日すべてのカトリック神學者は文字通りの解說には毫も耳を傾けない。「之を論駁せんと試みるだけでも暇潰しだ！……世界が二十四時間を一日とせる六日間に創造されたと云ふ解說は、地質學、古生物學上から確證されし事實に一々衝突する」とシャング（Schang）氏の如きは一蹶し去つて居る。

（2）復興說—右樣の不合理を避けて、しかも文字通りの解說を維持し得んがために考案されたのが復興說である。その言ふ所に由ると、前世界の地層や化石は六日間の御業の前に成つたものだ、創世記第一章の「始に神、天と地とを創造し給うた」の一節は、地球の生成と、草木、禽獸等が地質學の敎へるまゝに、長い年代を經て、徐々に創造された事實を物語るのである。それから振古未曾有の一大變

動が起つて、從來の生物は悉く死滅し終り、地球は見る影もなき渾沌狀態に陷つたのを、神が二十四時間を一日とせる六日間に復興し給うたのだ、創世記の記事はこの復興の次第を書きとめた迄に過ぎないと。

如何にも窮した、愚にもつかぬ解說で、聖書も、神學も、地質學も等しく之を排斥するに躊躇しない。

聖書には「地は形なく、空しかつた」とあるのみで、覆滅の結果、さうなつたとは記してない。六日間の御業も創造の事實としてこそあるが、復興の出來事とした個所は聖書の何のページにも見當らない。

神學上から言ふと、折角、立派に出來上つた地球、見事に整頓、發達しつゝあつた生物界をわざ〳〵覆滅に歸せしめ、然る後、之を短時日內に復興すると云ふは、全智の神の爲し給ふべきことゝは思はれない。

地質學上から見ても、舊い動植物は漸を追つて衰滅し、其次の時代の新種と代つて居る。例へば人類は第四期のマンモス、その他の絕滅動物と時を同うしたもので、論者の言ふが如き大變動の迹は、決して何の地層にも見られない。かう云ふ譯で、今日復興說は全く顧みられなくなつた。

(3)調和說—是に於て科學界の新發見を十分考慮に入れ、六日を以て長い〳〵時代となし、以て双方を巧く取合せようと試みた調和說が考案された。最初この說を提唱したのは、佛の有名な生物學者クウイエ(Cuvier)、及びマルセル・セール(Marcel Serres)等で、彼等の言ふ所によると、創造の御業を六日に配してあるが如く、地質時代も六期に分れ、各期の間には夫れ〴〵大變動が起つて、はつきりと區劃が立つて居ると。

この說は一時多くの神學者、聖書註釋家に歡迎され、その結果モイゼは一躍して有數の科學者となり、ニウトン、ラプラス等の先驅者でもあるかの樣に高く祭り上げられたものである。

然し科學の進步するにつれて、古人の夢想だもし得なかつた新事實が續々と發見された。地質時代を區劃せると云ふ大變動なるものはクウイエ等の夢であり、その區劃や各時代を特色づける生物やも、創世記の六日—長い〳〵時代の意味にしても—とは吻合しないことが明となつた。よつて彼等はその主張を修正して、六日を以て天地創造の主要時代を語るものと解し、第一日には太陽の光が漸く晝夜を分つ位に暗澹と射し込んで來たものとし、第二日を無生代、第三日を古生代、第四日と第五日を水棲爬蟲類が全盛を誇りし中世代、第六日を巨大な哺乳動物の發生した新生代の第三紀と、人間の初めて現はれた第四紀とに振り當てることゝした。

調和說は一見頗る巧妙な解說の如く思はれるが、然しクウイエ等の唱へた如き嚴密な意味に於ける調和は今日全く容れられない。先づ聖書學上から言つても、調和說の根據とせる所は隨分怪しいもので、聖書は人に科學を敎へる目的で書かれたものではない。科學の證明を聖書に求めるのは、それこそ求める方が野暮である。

次に調和說は最近發見された地質學、古生物學上の新事實に突合せて見ると、實に矛盾だらけで、到底そのまゝ之を承認する譯には行かない。地質時代の區劃は調和論者の說くが如く判然したものではない。生物進化の順序も彼等の主張を裏切つて居る。創世記によれば、植物はすべて第三日に造られ一日を間に置き第五日に至つて動物が造られて居る。然し地質學から見ると、動物は植物と時を同う

し、既に原生代から存在したもので、植物の中でも松柏類や濶葉樹の如きは、中世代、若くは新生代に入つてから、やつと現出して居る。日、月、星は最初から存在したのだけれども、當時空際に彌漫せる濃厚な瓦斯に遮られてその姿を顯はし得なかつたのだ、然し第三日、即ち石炭紀に繁茂せる植物が盛に炭酸瓦斯を吸收した結果、空氣は漸く稀薄、清朗となり、第四日に至つてその姿を現出するに至つたのである、と彼等は言つて居るけれども、その以前の植物でも日光を受けなかつたと云ふ證跡は化石の上に遺つて居ない。又總の恒星が或る一定の時期に造られたものでないことも明白である。

是等の難問に滿足な解答を與へ得ない所から、今日調和論は餘程下火となり、熱心に之を唱道して居た學者も、之に大々的修正を施すか、或は全然拋棄するかするに至つた。

（ヘ）**觀念說**—以上の諸說は モイゼが世界開闢の事實を物語れるものとするので、之を歷史的解說（Interpretatio historica）と稱するのだが、觀念說者の主張する所は之とは全く趣を異にする。聖書は天地萬物の發展進步せし實際の過程を記して居るのではない。たゞ一個の宗敎思想を當時の天文知識に合せて、通俗的に、具体化して述べた迄に過ぎない。即ち神が天地萬物の創造主に在すことを明にすると共に、七日を一週となし、六日間働いて七日目に安息すると云ふ制度を立てるのがモイゼの目的であつたのだ、と云ふのである。

觀念說の中にも、創世記卷頭の三章を以て、天地萬物の創造を歌へる宗敎詩となせる英國クリフトン（Clifton）のクリッフォード（Clifford）司敎の如きあり、或はモイゼなり、アダムなりが、天地創造の次第を幻影の中に見せて戴き、それをそのまゝ書き傳へたと唱道せる學者もある。說き方は種々あるが、然し創世記の記事に歷史的性質を認めず、たゞ宗敎上の眞理を敎へる爲に構成されたものとすることに於ては皆一致して居る。

觀念說は天啓と科學とを引離し、兩者の衝突を全く不可能ならしめる利益がある。調和說の如く科學に隷屬して居ないから、科學界に新事實の發見される毎に、その說に修正を施さなければならぬ憂もない。だが聖書の本文を熟讀して見ると、之が一片の寓話か、宗敎詩か、幻影かで、何等の史的根據も有しないのだとは、どうしても思はれない。ローマの聖書委員會（Commissio de re Biblica）も一九〇九年六月三十日附を以て右の觀念說を排斥し、創世記卷頭の三章を歷史的事實と認むべく決定した。で現代のカトリック註釋家は大抵兩者を折衷した觀念的調和說（Concordismus idealis）を唱へる樣になつて來たのである。

（ト）**觀念的調和說**—先づ創世記のあの記事は、宗敎上の目的から、救靈に必要な眞理を我等に敎へ、神や宇宙に關する異敎の誤を正すが爲に書かれたもので、天文學とか、地質學とか、古生物學とかを授けるのが著者の目的ではなかつた。宗敎上の眞理を敎へる爲に書かれたものではあつても、然し歷史的事實だ、天地創造の實際を描寫して居るのだ。それは創世記その物の性質から推しても明白で、若しアダムとその子孫、ノエとその三子、アブラハム、イザアク、ヤコブに關する記事を正銘な歷史とするならば、何故卷頭の三章だけを事實に基かない寓話か、小說かと觀なければならないだらうか。同書の後半がヘブレア民族の起原を語るものとするならば、同じく前半も天地の開闢、人類の起原を錄せる歷史だと見るが當然ではあるまいか。歷史ではあるが、然し極めて通俗的である。その記述も當代人の知識の程度にしつくり嵌つて居る。好んで具体的な辭句を用ひ、一日セッセと立働き、夕方になると、その仕事の結果に滿足の笑を洩しつゝ休息に就く勞働者の如く神を描いてある。

創造の事實を記すにも務めて簡潔素朴な筆を用ひ、たゞ重要な點を物語るに止め、一切が何んな風に造られ、幾久しく生存を續けたかゝ云ふ所まで深入りしてない。

だから創世記に出て居る天地開闢の次第ゝ、地質學や古生物學の語る年代ゝを精密に突き合せてはならぬ。固より大体の一致だけならば確かに認められる。最初の星雲瓦斯、長い〳〵無生時代、それから不完全な機關を備へた原始的生物、生命の漸進的發達、植物の大繁殖が動物のそれに先じたこゝ、哺乳動物以前に水中の大怪物―爬蟲類―が空前の大發展を遂げたこゝ、人類が比較的輓近に現出したこゝ等は双方ゝもよく一致して居る。

然し高等の顯花植物は第五日か第六日に發生したのであるのに、之を第三日に出し、却つて植物ゝ同時に生育した古生代の動物に就ては何等語る所がない。蓋し著者の趣旨が科學を說くに在らずして、たゞ天も地も草木、禽獸、人類も一切神の御手に造られたこゝを敎へるに在つた。隨つて各時代の特色を最も鮮かに描き出すべき動植物のみを數へ上げて、他は措いて問はなかつた。して夫等はすべて六日間に完成したかの如く記したのは、六日間働いて七日目に安息する制度を立て、國民に之を遵奉させるのがその目的であつたからである。

なほ少しく思ひを潛めて、著者が何んな風にこの筆を進めて居るかを調べて見よ。彼は森羅萬象を幾何かの種類に分ち、各種類を論理的に組合せて、之を一週の各日に配して居る。動物は植物にその養料を求めるので、その發生は當然植物に遲れ、地上が靑草に蔽はれた後に出で、しかもその植物は地上に生育するのだから、植物の發生した時は地球は既に安定して居なければならぬ。同じく人間は動物を必要ゝし、往々植物界ゝこの仲介にも之を使用する、例へば遊牧の民は多く牛羊の乳を以て生活するが、その牛羊は草を常食ゝする。故に人間は最後に現はれ、その直前に草食動物が造られて、家畜ゝなり、侶伴ゝなり、幇助ゝもならなければならぬ。斯う云ふ鹽梅に、著者は無生物、植物、動物、人間ゝ云ふ鹽梅に自然界の等級を立てゝ居る。

その他魚ゝ鳥ゝは他の陸上動物ゝは別種の群をなして、第五日に造られたものゝしてある。蓋し鳥は陸上動物よりも餘程人間に懸離れて居る。魚は鳥よりも更に低級で、發聲器を有しない。たゞ自由に移動し得るゝ云ふ點が植物ゝ異るのみである。斯の如く粗より精へ、下層より上層へ、不完全より完全へゝ次第に溯り、その最頂點に現はれたのが、神に肖つて造られ、萬物の靈長、被造物中の傑作ゝ稱へられる人間である。是こそ創世記の著者が我等に傳へてくれた世界開闢の詩的描寫、創造の御業の讃美歌であつて、決して科學を敎へる爲に詠まれたものでないこゝだけは、承知して居なければならぬ。

でも植物は第三日に現出して居るのに、日、月、星はどうして第四日に造られたゝしたものであらうか。

植物は無機物から養料を攝るので、わざゝ兩者を相隣接せしめたのだ等ゝ云ふ人もあらう。然し無機物が植物の養料ゝなることは、一八四〇年ヂューマ（Dumas）ゝブーシンゴール（Boussingault）の實驗によつて漸く明ゝなつたので、著者にそれだけの知識があつたらうゝは思はれぬ。なほ調和論者は石炭紀の植物が空中に漲れる炭酸瓦斯を吸收し、爲に空氣は淸朗になり、日、月、星も始めてその姿を現したのだゝ言つて居るが、さうまで穿ち過ぎた假說を持出す必要もあるまい。日、月、星の役目は夜ゝ晝ゝを分ち、四季の變遷を司るにある。その旨は聖書の本文にも明記してある。

所で植物は地上に固定して居る。格別夜晝の分ちを必要としない、却つて動物は自由に移動し、夜間は一般に休息するので、大にその必要を認める。故に動物の造られる前に、日、月、星が現れた樣に書いたものではあるまいか。

然し光を太陽と引離して、之が現出を第一日に置いたのは何の爲であるか？

理由は至極簡單である。モイゼは創造の業を六日間に配する考で筆を執つたが、夜晝を別つには是非とも光を必要とする。だが光は必ずしも太陽に附隨せるものではない。太陽の出ない前に曙光が現れ、太陽が沒し去つてもなほ暫くは黃昏の光を殘して居る所から以て見ると、光と云ふものは太陽とは別に獨立して存在するに相違ない、と當時の人々は考へて居たらしく思はれる。その上、昔は日、月、星を以て蒼穹に固定しながら運行するものと信じて居たのだから、蒼穹の後に太陽が造られたとしたのは、むしろ當を得たものではあるまいか。

要するに創世記の第一章は、天地創造の通俗的事實談を記すと共に、また神とその性質、その德、宇宙間の森羅萬象、及びその森羅萬象の大王たる人間との關係、人間の神に對する義務等を敎へんが爲、聖靈の感導によつて書かれた神學書の一ページなのである。

第二章　人類の創造と樂園

(一) 人類の創造—最後に造られたのは人であつた。是こそ神の御業の傑作、有形世界で最高の地位を占める筈のもので、神も決して無造作に之を造り給はなかつた。他のすべての物は「成れよ」の一言を以て造り給うたが、人を造る時は「吾等に像つて人を造らう」と曰うた。人が理性を持たない自餘の生物に如何ほど超越して居るかと云ふことを示し給うたものではあるまいか。實に他の生物は僅に神の足跡を印せられてゐるにすぎないが、人はその智慧と自由意志からいふと、確に神の無限の御德を象つてゐる。この超越性があるので、神も之に諸々の生物を支配するの大權を授け、地上に繁殖するすべての草木を取つて食する許可をもお與へになつたのである。

さて神は土を以て人の體を造り、之に生ける魂を結合せ給うた。その魂は靈にして無形なる所から創世記には之を「氣息」と呼び、神がこの魂を肉體に結合せ給うた動作を形容して「氣息を顏に吹き給うた」といつてある。顏は人の智慧や喜怒哀樂の情が最もよく顯れる所だからである。

肉體は土を以て造られたので、始めの人はアダム

神と天地萬物

斯の如く魂は神より直接に與へられたが、

(Adam)と呼ばれた。アダムとはヘブレア語のアダマ(Adamah)に出で、土、又は赤土を意味する。

(2)樂園―神は東の方なるエデンに一の園を築き、アダムをそれに置いて耕作に從事せしめ給うた。「地上の樂園」といふのがそれで、この園には草木が綠に萠ゑ、色樣々の花は美しく咲き匂ひ、甘い〳〵果實は枝もたわゝになり下り、水晶の如き清水が一の源から分れて四方に流れ、フイソン、ヂエオン、チグリス、エウフラトの四大河となつてゐる。樂園にあつた樹木の中で、「生命の樹」と、「善惡の知識の樹」といふ二本は特に注目に値する。「生命の樹」とはその果に不思議な力があつて、之を食してゐると、永く若々しさを保ち、死ぬ憂すらないはずのものであつた。「善惡の知識の樹」は、人祖の忠誠を試すが爲に使はれ、善だけしか知らなかつた者が、之を食した結果、惡をも知るに至つた所から、さういふ名を得たものである。

さて神はアダムを樂園に置いて、之が保管と耕作とに當らしめ給うた。して園の樹々に實る甘しい果は、すべて心のまゝに取つて食べても可い、たゞ眞中にある善惡の知識の樹の實だけは、どんなことがあつても食べてはならぬ、之を食べた日には死んで了ふぞよ、と嚴しく禁めて置かれた。

(3)女の創造―人は性質上、團體的生活をなすべく運命づけられて居る。その上、生めよ、殖ゑよ、全地に充ちて之を從はせよと仰付かつたものである。そこで「人獨り居るは宜しからず」と曰うて、神は之に性質を同じうせる侶伴を與へようとお定めになつた。先づアダムに獨りぼつちの寂しさをしみ〴〵感ぜしめ、適當な配偶を得たいと熱く望ませ、少くもその望を盛ならしめんが爲、彼の前に野の獸、空の鳥を連れ出し給うた。アダムは萬物の靈長と立てられてゐるので、自己に服從せる鳥、獸の性質を辨へ、それ〴〵似合つた名を之に付けた。

然し眼前に次から次へと出て來る數々の鳥や獸を見ても、一つとして自分に似たものは居ない。自分の心を諒解してくれる侶伴が欲しい、でもこの望を實現するには、神の特別干涉に俟つより外はない。アダムは自づと夫れを悟つたはずだ。是に於て神はアダムを深く眠らせ、その肋骨を一つ取つて女を造り、之をアダムに引合せなさつた。アダムはその眠れる間に、超自然的光に照され、神の御業の意義を悟つたものであらう。自分の前に立つてゐる女を眺めると、先の動物に見付からない、何かしら尊い氣高い顏と眼を備へ、自分のそれに等しい智慧を反映さして居る。彼は忽ち叫んだ。

「是こそ吾骨の骨、吾肉の肉である。男から取つたものであるから、女と名付けらるべし。で人は父母を離れてその妻に就き、二人一體となるであらう」

と。キリストはこの言葉を神の御言葉として居られる(マチオ一九ノ六)、アダムが神感によつて之を言つたといふ明かな證據である。婚姻は家庭の基礎、社會の根底である。神は世の始に自から之を定め給うた。してその制度を一夫一婦となし、離婚を認め給はなかつた。故にキリストも「神の配せ給ひしもの、人之を分つべからず」と曰うたのである。

人類はアダム夫婦に出で、その源流は全く一つである。しかも「すべての生ける者の母」たるエヲは、アダムの體によつて造られたほゞ一つである。して人類が同一源流に出たといふ事はキリスト教の根本教理の一つに數へられ、聖パウロはローマ書の第五章ノ第十二節と、コリント前書の第十五章ノ二十二節に之を斷言してゐる。この根本教理よりして、人は皆兄弟なること、その性質でも、權利でも全く同等なること、すべての人が原罪に染まり、又イエズス・キリストに依つて救はれたこと等、幾多の重要な結論が導き出されるのである。

(4)無罪の狀態——人祖が初めて造られた時は、たゞ無罪であつたばかりでなく、また成聖の聖寵を恵まれ、超自然的狀態に引擧げられて居たのである。「我等に象りて、我等の俤の如くに人を造らう」と神は宣うた。「象りて」とは、自然界に於て神と似てゐることを示し、「俤の如くに」とは、超自然界に於ける類似を言つたものだ、と主張せし二三の教父があり、神學者もある。

兎に角、アダム夫婦は完全の狀態に造られた。神と靈魂、又靈魂と肉體との間に些の申分もなき調和が行はれてゐたし、一方、理性は全然神に服從すると共に、肉體の上に絶對主權を掌握して居たので、それだけ易々と善を行ひ惡を避けることも出來た。この幸福な狀態を仄見せるがため、「アダムとその妻は二人とも裸體であつたが、それを少しも耻ぢとしなかつた。」と聖書には記してある。彼等は天眞爛漫な幼兒の如く、情慾の刺戟を感じなかつた、肉慾なるものを全く知らなかつたのである。

アダム夫婦は不死であつた。それは彼等の肉體が本質的に、又絶對的に死の不幸を免るべく出來てゐたからではない。たゞ神の御誡を忠實に守つたらば、死ぬ憂が無いといふ迄にすぎなかつた。實際聖書には死を以て罪の罰だと明言してある。(創二ノ二三)

アダムは直接に神より造られ、初から勝れた智慧を恵まれた(創世記三ノ六)、自然界の知識も一家を立て、子孫を教育して行くのに必要なだけは與へられたに相違ないが、特に廣く深く宗教上の知識を恵まれたことは疑ふべくもない。

終にアダム夫婦は異常な幸福を享け、樂園に置かれて、何の不自由もなく、些の苦痛すら知らない。その上、神と親しく交り、その御寵愛を忝うしたものである。

教訓——女は男の脇から取つた骨で造られた。夫婦が一體となつて相愛して行くべきこと、妻は夫の下にあつても、その奴隷ではないことなどを是によつて教へられるのである。

參考　(1)樂園の位置

樂園の位置に就ては何とも確言はされないが、然し聖書の本文を注意して讀むならば略判斷がつかないものでもない。「神はエデンの東の方に園を設け給うた」と譯した書が見受けられるが——新教の

譯本の如く―然し原文には「東の方、エデンの地に園を設け給うた」となつてゐる。即ちエデンの地は著者から見ると東に位して居たといふ意味で、ごうしても聖地の東に當らねばならぬ。

なほその位置を明かにするが爲、エデンを左の如く描寫してある。

「一の河エデンから出でゝ園を潤し、夫より（或は其後）四の源に分れて居る。第一の河の名はフイソンといひ、金を產するヘウイラの全地を繞つて居る。第二の河の名はヂエオンといひ、クシュの全地を繞つて居る。第三の河の名はヒデケルと云ひ、アッシリアの東を流れて居る。第四の河はエウフラトである」（創二ノ一〇―一四記）

この四つの河の中で、第四のエウフラトは全く說明を要しないので、聖書記者もたゞその名を揭げるのみに滿足して居る。第三のヒデケル（Hiddekel）は「アッシリアの東を流れる」といふ說明によつて知られる如く、確にチグリス河を指したものだ。古くバビロンに住んでゐたスメロ・アッカド人（Sumero Accadiens）はチグリス河をイディグナ（Idigna）又はイディグラ（Idiglat）と呼ぶのであつた。このチグリスとエウフラトの兩河は殆どその源を同じうし、其間僅に一時間程を隔てるに過ぎない。

次にフイソン（Phison）ヘブレア文のピション（Pischon）河は金產地のヘウイラを流れて居る。このヘウイラは金產地としてその名を謳はれしコルキド（Colchide）らしく、この地方にはエウフラトチグリスの源流近くにその源を發するチョログ（Tschorogh）河が流れて黑海に注いで居る。フイソンはつまりこのチョログを指したものと思はれる。尤もアラクセス河の支流たるキルス（Cyrus―今日のKur）河を之に充てる學者もある。

第四の「クシュの地を繞つてゐるヂエオン河」は、後のアラクセス（Araxes―今のAras）だ。アラビ

ア人は、現に之をゼフン・エル・ラス（Djehoun-er-Ras）と呼んでゐる。やはり源はエウフラト、チグリスのそれに近く東流して裏海に注いで居る。

その流域をクシュ（Kouch）と呼んであるが、クシュはカムの子で、エチオピア人の祖になつた所から、古代の註釋家中には、ヂエオンをエジプトのニール河とした人が少くなかつた。然し此處はクシュ族の移住先たるエチオピアではなく、むしろその原住地で、ヂオドルスやストラボンの地理書にあるコッセ人の地（Regio Cossaeorum）、アッシリア人の所謂（Kossi）であら

ねばならぬ。

是を以て見ると エデンはアルメニアの高原に在つた、と斷定しても差支ないやうだ。土俗學(Ethnographia)、地理、ヘブレアの歴史、アルメニアの年代紀及び比較言語等から推して見ても、さうらしく思はれてならぬ。なるほど今日で以て見れば、この四つの河は同一の源から發しては居ない。だが地勢の異動、山谷の隆起、陷沒の爲に、河川はよく其流域を變ずることがあるのだから、當時と同一でないからとて、怪むに足りない。尤も學者の中には、人類の發生地をバビル高原に置く人があり、バビロニアに置く人もあるが、然しカトリック學界では多くアルメニア說を採用する。

(2) 人類と進化論

人の體は神に造られた。然しそれは何んな鹽梅に造られたのであるか、今日の所謂「進化說」は之を人體にも應用し得べきものであるか。進化說の中には無神的進化說があり、有神的進化說がある。前者は神の干涉を一切排斥し、物質それ自體の力によつて原生動物のモネラが生じ、それから進化に進化を重ねて、終に人類に達したのだと主張する。後者は靈魂の存在とそが神に造られたことは固より之を認める。たゞ肉體のみは、下等動物から次第に進化の道程を辿り、適當な形狀に達した時、神が之に靈魂を合體せしめ給うたのだと斷言するのである。

無神的進化說は聖書にも哲學にも反し、我々カトリックの立場からして、到底問題とするに足りないことは言ふ迄もない所だ。然し有神的進化說は如何、英國のカトリック進化論者セン・ジョージ・ミワル (Saint-George, Miwart) 氏は、靈魂の直接創造さへ認めたら、肉體は動物から進化したとしても信仰に反する所はないと主張した。

然し聖書の文面から見ると、そんな解說はどうしても容れられさうにない。神は先づ熟考し、然る後、土を以て自から人體を造り給うたかの如く記してある。成る程それも直接の創造ではなく、進化の意味に解されぬこともないが、さうすれば女の體と男の體とは全然異つた道によつて造られて居る。女の體が直接、神に造られたことは聖書の明文によつて疑ふべくもない、然らば何故男の體のみが進化の法則に從つて、長い〳〵道程を經ねばならなかつただらうか。

教父等や神學者等は殆ど萬口一致、人間の體を以て直接に神より造られたものと說き、創世記の本文をもその意味に解說して居る。そればかりか、神の直接創造は信條とまでは言はれないにせよ、少くも信條に近いものと斷言せる神學者すら無いではない。ローマ聖務省の態度も一貫して變らない。ドミニコ會のルロア(Leroy)師が一八九一年、一書を著してミワルの說をそのまゝ提唱するや、聖務省は之をローマに召喚して取消を命じた。數年を經てザム(Zahm)師が同一說を唱へて、同じく聖務省よりその書の販賣を差止められた。終に一九〇九年六月三十日、聖書委員會は「創世記の初の三章、殊に人間の特別創造や、最初の婦人が最初の男子から形造られたことや等は文字通りに解說すべきものだ」と斷定した。

(3) 創世記の兩記事

宇宙の創造、殊に人祖の創造に關する記事が創世記の第一章と第二章とに兩回出てゐる。世には、この兩記事を以て互に何の聯絡もなく、むしろ相矛盾し、時代も著者も全然異にせるものを寄せ集めたものだ、斷じてモイゼの筆になつたのではないと主張する批評家がある。殊に彼等が最も重きを置い

て居るのは、第一章には神をエロイン(Elohin—能力者)と呼んであるのに、第二章にはヤウェ(Jahweh—有つてあるもの)とか、或は兩者を併せてヤウエ・エロインとか稱した點である。

右の兩記事がその出典を異にし、モイゼより以前に成り、モイゼはたゞ之を轉載したのみだとしても、別に差支へはない。然しながら第二章の記事は決して第一章の記事の無意味な繰返ではない。第一章の世界開闢は創世記全篇の緒言とも言ふべく、無生物から人間まで天地萬物の創造を大つかみに一幅の畫面となした樣なものだ。第二章からは人間の歷史をかき出さうと云ふので、天地萬物の創造を簡單に摘要し、然る後初の男、初の女の造られた次第を詳細に述べて居るのである。隨つて兩記事は互によく連絡し、總說より特記へと進んで居ると謂はなければならぬ。互に矛盾せるかの如く見ゐるのは、たゞ外觀だけに止り、實は少しも矛盾して居ない。蓋し第一章は天地萬物の創造をば順を追つて記述したもので、第二章は順序の如何を顧慮せず、人間を中心として、降雨にせよ、草木にせよ、等しく神の慈愛を物語るもの、禽獸の如きも同じく人間の爲に造られたものだと言つて、一切を人間に歸着せしめて居る。うつかりして讀むと、草木禽獸が人間より後に造られたかの如く見ゐるのは全く之が爲である。

神の名を二樣に記してあるのも、原著者を異にするからと謂はんよりか、むしろその名が記事の內容にそれ〴〵嵌つて居るからではあるまいか。神を世界の創造主、人類の君と觀た時はエロインと稱し、かへつてその選民と契約を結び、特別の關係を有し給ふかの如く觀た時は、ヤウエと呼んだものらしく思はれる。無論今日ではカトリック註釋家もエロイン出典と、ヤウエ出典の存在を認めないでは無い。何れにしても兩記事が互に矛盾して居ないこと丈けは確かである。

第三章　人類の墮落と原罪

ミカエルと大天使サタン

(1)無形界—神は有形世界の外に、又無形の世界をも造り給うた。無形の世界とは、天使を指したもので、彼等は靈にして形なきが故に肉眼に觸れない。しかも我々からすると餘程勝れた智慧と能力とを備へ、始めて造られた時は、それこそ淸い美しい、見事なものであつた。然し神は終なき幸福を彼等に與へる前、一應彼等の忠誠を試み給うた。すると彼等の中には、有難い神のお恩惠を忘れ、柄にもない傲慢心を起して謀叛を企てたものが少からずあつた。爲にその巨魁はサタン—反對するもの—と云ふ芳しからぬ名まで頂戴し、その淸さも聖さも立所に失ひ、部下もろとも地獄の底へ蹴落され、醜い惡魔となつて、終なき苦罰に泣かなければならぬ羽目に陷つた。之に反して大多數の天使は、ミカエル大天使の指揮の下に堅く忠節を守つて動かなかつたので、其時から神を面に仰視て、窮りなき幸福を擅にすることゝなつた。

サタンは聊か心得違ひからして今の樣な淺ましい姿となりはてたのを口惜しがり、絕ねず神を怨み、人を妬み、樣々の惡事を計畫んで止まない。善と惡との戰は此處に始まつた。

さてこの天使や惡魔に就ては、舊約聖書にも新約聖書にも到る處に明記してあつて、その存在は一點の疑も容るべき餘地すらない位に明である。だが何時頃造られ、如何なる試に遭ひ、如何なる種類の罪を犯したのか、其處は判然しない。人祖が樂園に居た時、墮落天使が出て來て之を誘つた所から以て見ると、人よりも早く造られたことは察するに難からぬ。その墮落の原因も傲慢であつたことだけは、「總ての罪の始は傲慢なり」(トビア四ノ一四、會衆書一〇ノ一五)と云ふ一句から推しても略判斷がつく。然し一口に傲慢と言つても、それは何に就ての傲慢であつたか、聖書に明記してないから、何とも斷言は出來ない。イザヤ書の第十四章第十二節に「我天に昇り、我位を星の上にあげ…雲井の高きに昇り、いと高き者の如くなるべし」(イザヤ一四ノ一三)とルチフエルに言はしめてあるので、そのルチフエルを直にサタンとし、彼がさう云ふ大それた考を起して、神と位を爭つたもの〻如く世の人は多く信じて居る。然しあれはバビロン王の傲慢極まる自惚を具体的に描いたまでのことで、サタンの言葉ではない。

尙聖書にはサタンを呼んでルチフエルと言つた個所は一つも見當らない。ルチフエルとは曉の明星を意味し、キリストは自ら聖ヨハネの默示錄中に、「我は輝ける曉の明星なり」(默示二二ノ一六)と宣ひ、聖會も聖土曜日の典禮歌中に、救主をルチフエルと呼んで居る。俗にルチフエルを以てサタンの名とするのは、全くイザヤ書に基いたものと思はれる。

(2)誘惑―サタンは人祖が樂園に置かれ、大なる幸福を擅にして居るのを見て、連りに嫉妬の焰を燃やし、何とかして之を罪に陷れ、自分等と同じ不幸に泣かしめたいものと、隙を狙つて居る所に、恰もよし一日女がたゞ獨り善惡の知識の樹の下に居るではないか。之を見た惡魔は早速、蛇の體を借りて、その女に言ひ寄り、言巧みに之を罪に誘はうとした。何故彼はアダムをさし措いて、女を欺さうとしたかと云ふに、女は一般に深く考へ、遠く慮ること云ふことがない。それで居て男に對しては非常な魅力を有する。女に勸められると、男は一も二もなく之に從ふのが常である。奸智に長けた惡魔のことだから、其處をちやんと見込んで、「敵を倒すには馬を射よ」と云ふ筆法を用ひて女を狙つたのである。

蛇が物を言ふのすら不思議であるのに、女は少しもそれを不思議とせず、平氣で之と話をして居る。蛇に限らず、一切の禽も獸も蟲けらも、その時までは人を害することなく、また人も樂園では神とさへ物を言ひ換して居た位だから、蛇が口を利いたからとて、別段珍らしくも思はなかつたものであらう。さて惡魔は女に向ひ、

「なぜ神樣は樂園の樹果を食べるなッてお禁めになつたのです」

と遠方から話を持ちかけた。女は早速そんな危い樹の下を立去れば可いのに、そこが女の淺智慧と云ふものであらう。蛇なんかの相手になつて下らぬことを喋り散らし、

「樂園の總の樹果は食べても可い。たゞ眞中にある樹果だけは食べてはならぬ、手を觸れても可けない、死んではならぬから、と神樣は仰せつけになつたのよ」と、

答へた。「食べてはならぬ」と云ふだけであつたのに、女は更に一句「手を觸れても可けない」と加へて、餘り無理な重過ぎる禁令の如く言ひ立てゝ居る。彼女の心が早や脱線しかゝつたことが察せられる。惡魔はそれを見て取つた。次第に女を深淵へ釣込まんものと、

「決して死ぬことはありません。何時にしても之を食べたら、貴方等の目が開いて、善と惡とを分り、神様の如くなることを御存知だから、お差禁めになつたのですよ」と、

神を以て嘘を吐き、さもしい嫉妬心にでも燃ゆ給ふかの如く言ひ立てた。女は甘々と彼の口車に乘せられた。今迄は神の御禁令を後生大事に守り、ごんなことがあつても破らぬと固く心に誓つて居たから、その樹果を見ても、何だか薄氣味惡い心持ちもしたであらうが、今目を擧げて熟々之を眺めると、成るほど美しい、如何にも甘さうだ。蛇の言ふのも滿更ら嘘でもあるまい、善と惡とを分つて神様の如くなれたら、之に越したことはない、とでも思つたものらしい。到頭その果を採つて食べ、アダムにも與へた。アダムは堂々たる男子だ、さう易々と欺されるはずはないが、女の心を悲しませてはと云ふ淺ましい考から、言はれるまゝに食べて了つた。

(3) 罪の後—果して夫婦の目は開いた。是まで清く、美しい、水晶の樣だつた彼等の眼には、身の裸體なることすら見ない、それこそ全く無邪氣な小兒の樣だつたのに、今度我身を顧ると淺ましい丸の裸體だ。恥しくて堪らない。一時の恥しのぎに無花果樹の葉を綴り合せて腰の邊に纏つた。

さうして居ると、午後の涼しい風に吹かれて庭をお歩きになる神の御聲が聞こた。二人はぶる〳〵顫ひ出した。自分の目にすら恥しくて堪らない位だもの、この姿を神に見られたら何うしよう、と急いで樂園の樹蔭に隱れ、息を殺して小くなつて居る。萬事を見拔き給ふ神の御目に隱れようとした彼等の子供らしい考を思ふと、その智慧が早や以前ではない、善は悟り得ないで、たゞ惡のみを分つて來たことが察せられるであらう。

(4) 神のお咎め—神は二人にその過失を覺らせ、悔悛に導きたいと思召になり、アダムの名を呼びかけて「何處に居るのだ」とお聲を掛けられた。アダムも今は絶對絶命だ。恐る〳〵答へた、

「私は園の中で御聲を聞きましたが、裸體で御座いますものですから、恐れて隱れて居ます」

「誰がお前に裸體であることを知らした？食べるなと禁めて置いた樹果を食べたからぢやないか」

「貴方樣が侶伴として私に下さいました女が、その樹果を私に與へましたので、つい食べたのでございます」

重々惡うムいました、と平謝りに謝つて赦を願はうとはしないで、彼は女に罪を塗りつけようとした、否、「貴方樣が侶伴として私に下さいました女」と加へて、その失策を神に轉嫁しようとしたのである。よつて神は女に向ひ

「何故そんなことをしたのだ」

こお尋ねになると、是もまた下らぬ言譯をして、

「蛇が欺したから食べました」

と答へた。もう罪の爲に智慧が暗んだばかりでなく、意までが捻れて來たのである。

（5）罰の宣告―是に於て神はアダムとエワと二人を欺した蛇とに、それ〴〵罰の宣告をお下しになつた。

先づ蛇に向ひ、

「汝は斯ることをなしたのだから、總の家畜と野の獸に勝つて詛はれ、地上を腹這ひ、一生の間塵を食ふのだ。我は汝と女との間、汝の裔と女の裔との間に怨を置くであらう、彼は汝の頭を踏み碎き、汝もまた彼の踵に嚙み付かんとするであらう」

と宣うた。惡魔は折角人類を罪に陷れ、仕濟したりと、ほくそ笑んで居たのに、是はまた案外の宣告である。自分の上に恐ろしい詛を浴せかけながら、アダムとその子孫には無限の情をかけ、最後の勝利をさへ御約束になつた。彼はきつと赤恥を搔き、這々の體で地獄へ逃げ隱れたに相違ない。夫は夫にしても、この宣告は惡魔の道具に使はれた蛇にも一部分は及んで居る。今日でも人が蛇を恐ろしく厭らしく思ひ、奸智い、手に負へぬ人間を形容して「蛇の如し」とさへ言ふのは、これに基くのぢやあるまいか。然し蛇はたゞ道具に使はれたばかりなのに、何故そんな詛を蒙つたのだらうか。其處が神の御慈愛の有難い所で、總て父たるものは、最愛の吾子が劍に斬られたと云ふ時は、悲みの餘り劍そのものを打折り、叩き潰して了はうとするものである。神が蛇を詛ひ給うたのも道理はそれと同じだ、否「神の宣告は專ら惡魔を指したもので、蛇の獸らしく見ゐるのも、惡魔が大恥をかき、散々な敗北を蒙つた象徵たるに過ぎないのだ」と聖アウグスチヌスは言つて居る。

兎に角女が欺された時は、惡魔と巧く話が組んで、互に親しい關係を結んだやうな形になつたのだが、神はその關係を破つて、倒に深い〳〵怨を置き、俱に天を戴かざる仇敵の間柄となし給うた。その怨は何時になつても解けることがない。女の裔たる人類と蛇の裔たる惡魔との間に戰は何時までも續く。そしてこゞの詰り、蛇の頭が踏み碎かれ、蛇は又敵の踵に嚙み付くに至るのである。

蛇の勝利者は「女の裔」とは全人類にも當れば一個人にも當らぬことはない。文面上から見ると、人類が一度は惡魔に打勝つべきことを豫言したもの、如く思はれるが、然し「彼は汝の頭を踏み碎くべし」と言つて、一個の蛇と女の裔とを對照してある所から見ると、その女の裔と云ふのも、やはり一個の人を指して居ると解釋すべきではあるまいか。實際「女の裔」たる人類はすべて惡魔に打勝つた譯ではない。カインを始め、その惡業を見倣つた人々は、むしろ憐むべき戰敗者である。さすれば約束の勝利を博すべき誰かゞ必ず女の裔に出なければならぬ。イスラエル人は皆さう解釋し、その未來の救主に多大の望を屬したものである、然り、惡魔の戰勝者はイエズス・キリストで、惡魔の爲めその踵に嚙み付かれ、十字架に釘けられて無慘な御死去を遂げさせ給うたが、然しそれによ

つて、見ん事、彼の頭を踏み碎き、罪と死とに打勝ち給うた。さればこそテルツリアヌスはこの預言を名けて、「Protoevangelium—原始福音—人類の救濟に關する第一の福音」と呼んだのである。

人祖樂園を逐はるればならぬことゝなつたのである。

次に神は女に宣うた、

「我は大に汝の懷妊の苦みを增し、汝は苦んでお產をせねばなるまい。又汝は夫の下にあり、夫は汝を支配するであらう」と、

女の罪は肉慾と傲慢とより成つて居る。禁斷の樹果がさも甘さうなのを見て、それが欲しくなつて來ると共に、又神の如くなりたいとも欲した。なほ自分がその果を食べた許りでなく、夫までも蹶かして、惡い感化を及ぼし、之を墮落の道伴となした。この二つの罪の償として二の罰を申渡された。卽ちお產の苦みを嘗めた上に、夫の下に服從し、その支配を受けなければならぬことゝなつたのである。

終にアダムは女の頭で、之を敎導して行かねばならぬはずの身でありながら、阿容々々と之に曳かれて罪を犯したのだから、最も嚴しい處分を蒙らねばならぬ。よつて神は宣うた。

「汝は妻の言を聽き、食べてはならぬと禁めて置いた樹果を食べたのだから、地は汝の爲に詛はれ、汝は一生の間、苦んで是れより食を求めねばなるまい。土は汝の爲に荊棘と薊とを生じ、汝は野の草を食すべし。又汝は土から取られたもので、故の土に歸るまでは面に汗して物を食べるのだ。汝は塵だから、また塵に歸るであらうぞ。」

アダムは地の王と立てられ、是まで多大の惠を蒙りながら罪を犯したにより、地は彼の爲に詛はれ、彼の命に從はず、惠を施すにも隨分惜み〳〵施す樣になる。で衣食住に必要なものを地から求めるには、粒々たる汗を絞つて働かねばならぬ。してアダムに浴せられた詛ひは情なき萬物にまで及び、「彼等も虛しきに服せしめられ……腐敗の奴隷となつて歎いて居る……彼等がその屈辱を免れる時は、神の子等が光榮の自由に入る時である」(ローマ書八ノ二一以下)

人の上に申渡された罰の中で最も重いのは、「汝は塵だから又塵に歸るであらう」と云ふ死の宣告であつた。然しアダムはこの宣告を聞くや直にその妻の名をエヲと呼んだ、「總ての生けるもの〻母だからである」と聖書にはその名の意味さへも說明してある。一見甚だ辻褄の合はない話の樣であるが、實はアダムの美しい信仰を見せたものである。死の宣告を受けたその刹那に、彼は神の御約束を信じた。

その御約束によつて人類は生存、繁殖し、サタンに對して凱歌を奏すべきことを確信したのではないだらうか。

もう罪に汚れた人類は樂園に留るに堪へない。神はアダムとエワに毛皮の衣を作つて着せ、

「視よ、アダムは我等の如くなりて善と惡とを知つて來た、でその手を伸して生命の樹果を取つて食べ、永遠に生きてはならぬから」

と言ひ、彼等を樂園から追出して土を耕させなさつた。そしてエデンの園の東にケルビンと自から廻る焰の劍とを置いて、生命の樹を守らしめ給うた。ケルビンとは上級の天使であるが、その天使がごんなにして樂園を守つたか、創世記の記事は餘りに簡單で判然しない。たゞ樂園の門は絶對に閉鎖された、何が何うあつても再びその門を潜ることは許されないのだ、と云ふことを人々に悟らしめんために置かれたのであるから、必ずや嚴しい形相をしたものであつたに違ひない。しかもそのケルビンが焰の劍を振り廻して居たのだと常には解説されるが、然し聖トマスは附近一帶が火になつて居て、到底人の近接を許さなかつたと云ふ意味ではあるまいかと言つて居る。

獸訓—人祖の罪は人祖のみに止らないで後世子孫にまで傳はつた。之を原罪と云ふ。原罪の話は聖書に記してあるばかりでない。また我等の身内に色々の誘惑が起る、心は惡に流れたがる、勞働の辛さ、貧の苦さ、病の堪へ難さを感じ、死を恐ろしく思ふ一方には、已むに已まれぬ知識慾があり、幸福にあこがれ、眞、善、美を冀ふの念もある。是等はすべて原罪の存在を語る生きた證據である。フランスの有名な詩人ラマルチヌは巧みにこの事實を歌つて「人は天より墜落した神で、始終天を忘れ得ないのだ」と言つた。「神」とは嘗て不死、幸福であつた者と云ふ意味である。因みにアダム夫婦は遙に約束の救主を信じ、長い間罪を悔い悲んでその償をした。

參考　アッシリヤ、バビロンの世界開闢說と人祖の墮落

(イ)世界開闢說—人間の搖籃に關する聖書の記事は、簡潔素朴にして、しかも莊重を極め、それこそ唯一無二の大文字である。之に反して各民族の間に遺れる古い口碑傳說は明かに小說的特色を帶び、多神教的神話と墮し去つて居る。然しながら世界開闢、人類の起原、始祖の幸福、その悲むべき墮落等に關して多少傳へる所あるのは爭はれない。就中、最も勝れた價値を有し、何うしても閑却し得られぬのは近年アッシリヤ、バビロンで發見された楔狀文獻であらう。この文獻はユデア人とその祖先を同うし、その語系を一にせる國民の遺せしものたるのみならず、その一部は非常に古く、モイゼやアブラハム以上の古い時代のものさへある。

世界開闢に關する楔狀文獻はニニヴ王アスルバニバル（Assurbanipal）の圖書館中に發見された七枚の粘土版で、當今イギリスのブリテン博物館に珍藏されてある。粘土版は紀元前六百七十年頃、アスルバニバル王の代に書かれたのではあるが、然し實はカルデアから傳はつたのを寫本したので、原本は紀元前二千年から千五百五十年頃までに出來たものらしいと、英國の若いアッシリア學者スミス

氏は曰つて居る。不幸にして未だ全部は發見されない。今スミス氏の譯文によつて之を讀んで見ることにしよう。

第一枚―はまだ天もなく地もなく、神々さへ造られざる時から書き出してある。

「天は高きに未だ名いはれず、
地は低きにまだその名を有せざりし時、
彼等の父なる初生の「アプス！(Apsu)―大洋」と
彼等すべての母たる騷がしきチアマ「(Tiama)―海」とを以て
水は共に混同した。
未だ如何なる神も顯れず、
一の名も呼ばれず、一の運命も確定されざる時、
神々は發生した。
ラクム(Lacmou)、ラカム(Lachamou)は顯れた、
アンカル(Anchar)、キカル(Kichar)は發生した、
彼等は日を長くした
アヌ(Anou)は……

この次は缺損して居るが、その一部はベロゾの傳へしカルデアの開闢說をもつて補足することが出來る。夫に由ると、他の神々、特にエア(Ea)、マルドウク(Mardouk)も原始の大洋より生じた。然し無氣力のアプスーは神々の活動にその安靜を妨けられ、チアマと談合して神々を滅さうと謀つた。神々の中で最も賢いエア女神はその謀を察して、之が裏を搔き、全然不成功に終らしめた。チアマは怒つて蛇、龍、さそり、その他の怪物を生み、其等を驅りて神々を襲はせた。

第二枚―エア神が その父アンサル(Ansar)にチアマの謀を告げると、アンサルは、別子アヌー(Anou)を遣してチアマを征服せしむ。アヌーはチアマを一見するや恐れて逃げ歸る、その時マルドウクが、若し神々の集會に於て自分を第一位に据ゑてくれたら、討伐に向ふべしと約束した。

第三枚―アンサルは使者ガガ(Gaga)を遣して神々を召集する。神々は食卓を圍み、酒を飲み、醉つて大聲を發する。

第四枚―神々はマルドウクに全能を授けた……よつてマルドウクは弓、網、各種の强風を携へ、大旋風に乘つてチアマに立向ふ。彼が口を開けた時を見すまして暴風を投付け、矢を放つて彼が身體を射拔く。夫れからその體を二分し、一分を以て天を蔽ひ、天上の水を堰き止めるが爲に閂をさし、番兵を置き、水を流さない樣に命じた……

第五枚―是には多大の缺損がある、「マルドウクは大なる神々の爲に住所を建つ、神々の面影たる星、輝く(遊星)を立て、一年を定め、各部を分つた。十二ケ月の爲に三の星を立た。年中の晝の爲、その面影を拵へた後、月を輝かさせ、之に夜を托した。

第六枚―殆ど缺損して僅に數行を遺す、マルドウクは神々を禮拜せしめんため、血を取りて人間を造る、(それは謀叛をして殺されたキング神の血だと)

第七枚―中央に大きな缺損あり、マルドウクの功名と創造の偉業を摘要し、彼が神々や人間の崇敬を博すべき肩書を五十ほども數上げて居る。

マルドウクは穀物及び樹木の創造主だの、草の發生者だのと呼ばれて居り、ベルズによつて見ると、獸類も人間と同じ時に造られたと云ふのだから、第五枚と第六枚の缺損した所は、丁度草木、禽獸の創造を物語つて居るのかも判らぬ。

バビロンの世界開闢說が創世記のそれと多くの類似點を有することは一目瞭然である。チアマ(Tiama—海)も、創世記のテホン(Thehon—淵)に似た語ではないか。この海が二つに分れ、一つは以て天と成り、他の一つは地と成つたが(ベロズ)、其方は缺損して居る。諸天體の創造はその次に來りしかもその諸天體に時の運りを司らしめた點などは創世記によく合致する。若し文獻に缺損がなかつたら、動物や人間の創造も出て居たらうかと思はれる。然し類似點はたゞ是だけに止り、双方の間にはそれこそ深い根本的な相違があつて存する。先づバビロンの世界開闢說、その根底をなせる對チアマ戰の如きものは、創世記中に全然見られない、殊に思想上の相違は最も甚しい。

バビロンのは多神教的たるのみならず、實に物質的である。物質世界は無始より存し、靈能の神々が後から後からと發生して居る。之に反して創世記中に見られるのは、全く純乎無雜な一神教である。唯一絕對の神が無上の君としてその全能力を發揮し、敵の勢力に對して抗爭する必要もなく、たゞ一言もて萬物を創造し、整頓し、組織して居る。その思想の精神的なる、その調子の崇美高尙なる、その畫面の威風堂々たる、到底バビロンの神話を始め、古代の如何なる世界開闢說も足下にすら寄りつけさうにもない。

(ロ)人祖の創造及びその墮落—バビロンの文獻は人祖の創造、人類の起原、及びその墮落に就いて何等語る所がない。成程アダパ(Adapa)の神話が多少類似して居ないではない。アダパはエア神の子で、或日漁に出て南風に妨げられたのを怒り、その風の翼を打折つてやつた事から、天の神アヌー(Anou)の前に召喚された。よつてエア神は前以て之に注意を促し、

「アヌーの前に行つたら、きつと食物と水と服と油とを與へられる、服と油だけを受けて、食物と水とは謝絕せよ、毒が入つて居る」と、

言含めて置いた。さて天の神はアダパの答辯の賢明なのを喜び、之に不朽の生命を施さんと欲して、

生命の樹

「生命の食物」と、「生命の水」とを與へた。然しアダパはエア神の教を守つて食物と水とを受けなかつたので、不朽の賜を忝うし得なかつた云々、

この神話はアダパとアダムと名が少し近いと云ふ迄で、話の筋は全く異る。アダムは人間の始祖なのにアダパは夫らしくない。アダパが不朽の賜を得る能はなかつたのはエア神の教を墨守したからで、アダムが夫れを失つたのは神の誡に背いたからである。アダパに與へられた服はアダムが恥を凌ぐ爲に賜はつた毛衣とは全然趣を異にして居る。

尙バビロンの文献中には「生命の樹」の話がよく出て居る。樹の左右に神が立つて居て之に水を灌ぐか、その花を賈らすべく務めるかして居る畫を見ることが多い。然し是が果して樂園にあつた「生命の樹」に當るや否や速斷は出來ない。終にバビロンの古い器に刻まれた繪で、一本の樹を眞中にして人が二人その左右に坐し、左側の人の背後には蛇が蜒々と伸び上つて居るのがある。是こそ樂園の誘惑をそのまゝ描いたものではないかと、一時は隨分騷がれたものである。然しよく〳〵研究して見ると、疑はしい點が少くはない。

(1)この兩人はさも心地よさそうに坐し、全身に服を纏うて居る。

(2)角を持つた人間は確に神を表したものである。

(3)左側の人を婦人と斷ずるのは當らない。是も右側のと同じく神を表したものではあるまいか。婦人らしい特徴は少しも見ゐて居ない。

(4)バビロンの文献中には、蛇を狡猾な動物としたり、人を誘ふとか誘つたとか言つたりしたのは全然見當らぬ。創世記第三章に讀まれるやうな記事は、今日まで堀出された文献中には一つも發見されないのである。

第四章　カインとアベル

(1)兩人の性格―アダム夫婦は樂園を追放された後、如何なる生活をなし、如何なる運命に見舞はれたか、聖書には別段之と云ふ程の記事も出て居ない。たゞ長男が生れた時、之にカイン(Cain)と名け、次男はアベル(Abel)と呼んだ。この二人は同じ血を分けた兄弟でありながら、性格から氣質まで全然違つて居る。成長の後カインは農夫となり、アベルは牧畜をやつた。アベルは至極正直、温和な男であつたが、カインはそれに引かへ、何うも心立のよくない、曲つた人間であつた。

或日二人は神に物を献げた。アベルの献げたのは羊の初子で、カインのは畑に出來た穀物であつた。是を以て觀ると神に祭を献げると云ふのは、人類とその起原を同うして居る。多分神自らが之を人祖の心にお吹き込みになつたものであらう。

さて神は正直なアベルの供物を顧み給うた――天から火を降してアベルの犧牲を燒き盡すか、何とかして、之を嘉納すると云ふ意をお示しになつたものであらう――然しカインの供物は一向顧みて下さらぬ。「信仰によつてアベルはカインより優れる供物を献げて、義者と稱せられたり」(ヘブルヰ一一ノ四)と聖パウロは云つて居る。彼が羊の初子を取つて神に献げたと云ふ所にその信仰は顯れて居るのである。

カインは甚く自尊心を傷けられ、不平で堪らない。是も自分の信仰が足りないからだ、とは思はないで、たゞもうブリ〳〵怒つて顏を俯向けて居る。神は何とかして彼に心を改めさせたいと思召になり、「お前はなぜそんなに怒つて、顏を俯向けて居るのだ？若し善いことをなしたらばその報を受ける。然し善くしなければ、罪は門口に俟伏せをして居る。だがお前の望はお前の手の内に在るので、お前は之を制御め得るのである。」

と御諭しになつた。然しカインは少しも心を悛めない。弟を野外に誘ひ出し、不意に飛びかゝつて之

を打殺した。是こそ世界に死の入つて來た始めで、しかも夫が兄弟殺しと云ふ忌々しい形の下に行はれたのである。

(2)カインの處罰—神はカインに悔い悛めさせたいと思召されてか、

「お前の弟アベルは何處に居る？」

とお尋ねになつた。するとカインは父アダムの如く隱れもせねば、謙遜もしない。

「存知ません。私、弟の番人ですか」

と圖々しい返答をした。でも幾ら白ばつくれたからとて、神は一から十まで御存知なのだ。カイン自身もそれは飽まで承知して居たはずだけれども、神に向つて傲慢の角を突き立て、少も謙る樣子がない。爲に一層嚴しい處分を蒙るに至つた。

「お前は何をしたのだ？お前の弟の血の聲は我に向つて地から呼んで居る。見よ此地は口を開けてお前が手から流した弟の血を飲んだのだから、お前は此地の上に詛はれる、いくら耕しても實を生ずることはあるまいぞ。そしてお前は一生の間、處も定めず地上をうろつき廻るのだ、その通り心得よ」

と神に申渡された。カインは己が罪を痛悔してお赦を願はうとはしない、

「私の罪は餘りに大きい。とても赦免は蒙られません。唯今私を地の面から逐出しなさるので、私は御前を隱れます。是からは地上を彷徨ひ歩くのです。そして誰でも私を見付かつたら、捕へて打殺すんでせう。」

と捨台詞見た樣なことを云つた。もう全く失望しきつて居る。然し罪人をその場で罰せず、成るべくは之に痛悔の暇を與へたいのが神の思召である。其上、何んな罪人に對しても、個人が勝手に制裁を加ふべきでないことを諭すが爲、

「否、決してそんな事はない。カインを殺すものは七倍の罰を受けるであらう。」

と重ねて神は曰うた。そして誰も害を加へ得ない樣、彼に一つの記號をお與へになつた。かくてカインは神の御前を離れて迷兒となり、エデンの東、ノド（Nod）の地に住んだ。その妻との間にヘノク(Henoch)と云ふ子を生み、町を立て、その子に因んで同じくヘノクと名けた。

カインが妻を娶つたり、町を立てたりしたので、當時アダム系外の人種が生存してゐたはずだ、と主

カイン神に詛はる

張する向がある。然しそれは未だ一を知つて二を知らざる愚論たるに過ぎない。先づ今日でこそ兄と妹との結婚は人道上許すべからざる罪惡とされるが、その當時は他に家族がない以上、さうするより外に道はなかつた。ヘノクの町と云つても、今日の夫れの如く幾万の住民を包有せる大都市を意味するのではなく、數百戸の聚落を直に町と稱したものに違ひあるまい。してその町の住民と云ふのは、皆カインの子なり孫なりではなかつたらうか。と云ふのはカインがアベルを殺した時は既に結婚して子の親となつて居たのかも知れないし、ヘノクの町を建てたと云ふのも幾百歳の後か分らない、假りに六百歳の時だとしたらば、その間に生れた子供を鼠算で勘定して見ると、優に何千の住民を擁せる都市が築かれたはずである。

終に町を築いたからとて、カインは放浪生活を止めて、それに定住することになつたか、何んとも斷言は出來ない、「地上を彷徨ひ廻るであらう」と宣告されたのだから、その以後と雖も、安住を得ずして始終東に西にうろつき廻つたのじやあるまいか。

(3)カインの系圖—聖書にはカインの子孫を六代まで記載してある。即ち左の如し、

カイン(Cain)————ヘノク(Henoch)————イラド(Irad)————
—マウイアエル(Maviael)—マツサエル(Mathusael)—ラメク(Lamec)——
—ヤベル(Jabel)
—ユバル(Jubal)
—ツバルカイン(Tubalcain)
—ノエマ(Noema)

この系圖には簡單なる説明さへ附けてあるが、その説明こそカインの後裔が一歩一歩罪惡の巷に深入りして行く道程を示したものとしか思はれない。

先づヘノクが町を築いた事實から推しても、彼の一族が安易、享樂の地を求め、專ら物質的方面に進出せんと務めつゝあつたことが察せられる。殊に六代目のラメクに至つては、全く神を忘れて、肉の樂に耽り、殘虐、倨傲、始末に負へぬ惡漢であつたらしい。彼は是まで嚴守されて來た一夫一婦主義を棄てゝ婚姻の神聖を破り、アダ(Ada)とセルラ(Sella)と云ふ二人の女を妻とした。アダの腹に生れたのがヤベルとユバルの二人で、ヤベルは天幕に住む遊牧民の祖となり、ユバルは琴や笛を弄ぶ者の祖となつた。セルラの子ツバルカインは銅、鐵等すべて刃物を鍛ふ術を發見し、その妹はノエマ(優婉な女)と呼び、ユデアの傳説に由ると、絲を紡いだり、布を織つたりするのは彼女の發明にかゝるのだとか。

要するにカインの子孫は父祖の良からぬ性質を傳へて、利慾を追ひ、歡樂に耽り、農業を止めて都市

に住む樣にしたので、幼稚ながらも各種の工業が起り、音樂の發明となり、冶金術の芽生を見るに至つた。それだけ彼等は傲慢不遜に流れ、肉慾を擅にしたものであるが、たゞヤベルだけは遊牧の民となり、文化圏外に落伍したものではないかと思はれる。

聖書に拾つてある最も古い詩の斷片も、ラメクの口を漏れ出たものであるが、それは如實に彼族の特質を顯して居る。曰はく、

「アダとセルラよ、我聲を聽け、
ラメクの妻等よ、我言に耳を傾けよ、
我を傷けし人を、
我を打ちし少年を我は殺せり、
もしカインの爲に七倍の罰あらば、
ラメクの爲には七十七倍の罰あらん」

この斷片は凶暴と冒瀆とを匂はしたもので、ラメクはその子ツバルカインの鍛つた刃物を以て、暴に報ゆるにより大きな暴を以てする、神の援なんか自分に要がない、この腕とこの刃物とさへあれば澤山だ、と云ふことを仄かしたものではあるまいか。

教訓—聖アウグスチヌスは世界を地上の都市と神の都市との二つに大別して居る、「二の愛が二つの都市を築いた。地上の都市を築いたのは神を輕ずる迄に至れる自己愛で、天上の都市は己を輕ずる迄に至れる神愛が之を築いた」と。カインこそ正しく地上の都市を築いたもので、彼の子孫は主として物質的文化の增進を謀るに專にして、それだけ神に遠かり、道德を無視せるのであつた。

なほアベルが罪なくしてカインの嫉妬故に殺されたのは、キリストがユデア人の嫉妬によつて殺され給うた象であり、カインが弟を殺した罰で地上をうろつき廻つたのは、キリストを害した罰を蒙り、世界に離散して居るユデア人そつくりではあるまいか。

第五章　セットとその子孫

(一)大洪水前の系圖—アベルの代りに神がアダムにお授けになつた子はセト(Seth)と呼び、アベルにも劣らぬ善良、敬虔な人であつた。隨つてその子孫はよく神に事へ、幾代かの間はカインの子孫とは突つ離れて淸い社會を築いた。斯くて善の分子と惡の分子とが判然と分れ、カインの後は「人の子」と呼ばれ、セトの裔は「神の子」と稱されるに至つた。救世主を遣すと云ふ神の御約束は、このセトによつて子孫に傳へられたのである。

聖書にはセトの子孫を八代まで、アダムから數へて十代まで揭けてあるが、その揭け方がカインの夫れとは全然異つて居る。その契約を傳ふべき長男を生んだ時の年齡と、それから死ぬまでの歲月、その

全年齢を一々丁寧に記してある。中には一寸した注意書さへ添へてあるが、それこそセト族の深い宗教心、厚い敬虔の情を仄見せたもので、カイン族の系圖に見られる夫れとは天地の違ひがある。先づセトの子エノス（Enos）に就て「彼はヤウエの名を呼ぶことを始めた―即ち神に祈願を凝すことを始めた」と記してある。固より祈願を凝すのは人間の性情に基くので、アダム、エヲの時から之を實行し來つたに相違ない。たゞ是までは個人間、若しくば家庭内に行はれたのみであつたのを、エノスの時から社會的に行ふことになつたと云ふ意に解すれば大差あるまい。物質的方面にばかり進んで行くカインの子孫とは反對に、セトの子孫は精神的方面の開拓に務め、誠意から神に奉仕して、所謂神の都市を築いたものである。

(2)長命―今聖書の本文に從ひ、セト族の系圖を記して置かう。アダム百三十歳に及び、その像に從ひ、己に象りて子を生み、之をセトと名けた。それからなほ八百年間生き存へて男子女子を生み、九百三十歳で死んだ。セトは百五歳の時エノスを生み、後八百七年間生き存へて男子女子を生み、九百十二歳で死んだ。エノスは九十歳の時、カイナン（Cainan）を生み、なほ八百十五年間生存へて男子女子を生み、九百五歳で死んだ。カイナンは七十歳の時マラレエル（Malaleel）を生み、なほ八百四十年間生存へて、男子女子を生み、九百十歳で死んだ。マラレエルは六十五歳の時にヤレド（Jared）を生み、なほ八百三十年間生き存へて男子女子を生み、八百九十五歳で死んだ。ヤレドは百六十二歳の時にヘノク（Henoch）を生み、なほ八百年間生存へて男子女子を生み、九百六十二歳で死んだ。ヘノクは六十五歳の時マツサレム（Mathusalem）を生み、なほ三百年間神と共に歩いて男子女子を生んだ。ヘノクの年は三百六十五歳で、彼は神と偕に歩み神が之を引取り給うたので、世に見えなくなつた。マツサレムは百八十七歳の時ラメク（Lamech）を生み、なほ七百八十二年間生存へて男子女子を生み、九百六十九歳で死んだ。ラメクは百八十二歳の時、男子を生んで、ノエ（Noe）と名け「この子は神の詛ひ給ひし地に於て我等の勞苦と作業につき、我等を慰めてくれるだらう」と云つた。ラメクはノエを生んでから五百九十五年間生存へて男子女子を生み、七百七十七歳で死んだ。この十太祖とその年齢との一覽表を作つて見ると左の如くなる、

名	長子の生れた時の年齢	其後の年月	全年齢	生年世の初より	死亡
アダム	一三〇	八〇〇	九三〇	元　年	九三〇
セト	一〇五	八〇七	九一二	一三〇	一〇四二
エノス	九〇	八一五	九〇五	二三五	一一四〇
カイナン	七〇	八四〇	九一〇	三二五	一二三五
マハラレル	六五	八三〇	八九五	三九五	一二九〇
ヤレド	一六二	八〇〇	九六二	四六〇	一四二二
ヘノク	六五	三〇〇	三六五	六二二	九八七
マツサレム	一八七	七八二	九六九	六八七	一六五六
ラメク	一八二	五九五	七七七	八七四	一六五一

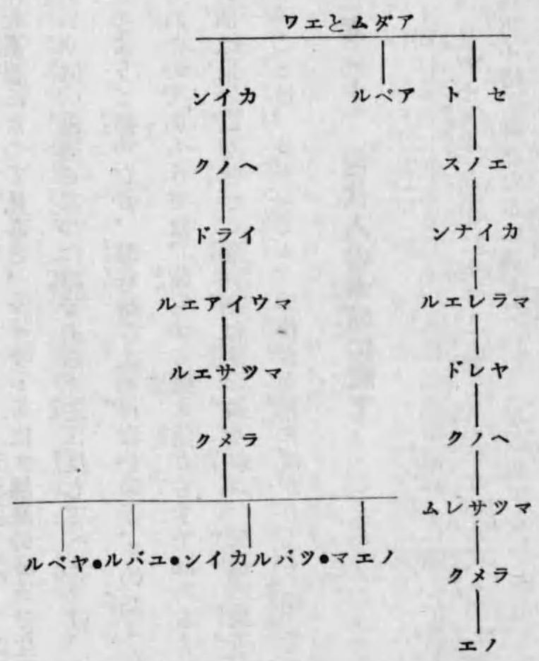
ノエ	五〇〇	四五〇	九五〇	一〇五六	二〇〇六

この年表はヘブライ文、及びラテン譯に由るのであるが、ギリシアの七十人譯とサマリア文には大きな差違がある。ヘブライ文はアダムから洪水まで千六百五十六年を數へるのに、七十人譯は二千二百四十二年、サマリア文は僅に一千三百〇七年を數へて居る。この差違は筆寫の誤に基いたものとも思はれない。と云ふのは、七十二人譯はマッサレムとラメクの二人を除き、他の八名の年齢は皆百年づゝを加へ、サマリア文は却つて百年づゝを減じて居る。ヘブライ文の方が正しいのじやないかと思はれてならぬ。

右十人の太祖中、最も長生したのはマッサレムで、最も早く世を去つたのはヘノクである。ヘノクは特に敬虔に秀で、清く正しく行ひすまし、「神と偕に歩んだ」ので、生きながら神に引取られたのである。世の終に當り、エリアと共に再び顯れ出て、エリアはユデア人にヘノクは異邦人に痛悔を勸め、アンチキリストと花々しく靈戰を交へるのだと、ユデア人間にもキリスト教徒間にも言ひ傳へられてある。

會衆書に「ヘノクは神の御意に適ひ、異邦人に痛悔を勸むる爲め、樂園に移されたり」（會衆書四四ノ一六）とあり、聖パウロはヘブライ書中に「ヘノクは死を見ざらん爲に移され、神之を移し給ひしによりて見出されざりき。そは移轉の前に神の御意に適へることを證せられたればなり」（ヘブライ一一ノ五）と斷言して居る。使徒聖ユダも其書簡中にヘノクのことを述べ、彼が主の審判を豫言して當時の罪人を戒めた由を記して居る其頃セト族とカイン族と互に婚を通じて次第に神を忘れ、行を敗り、不道徳に流れるのを見て、彼等に警告を發し、その不信、不德を咎めたものであらう。然し彼の長子マッサレムは我子にカインの六代の孫ラメクと同じ名を付けて居るのを以て見ると、或は自らラメクの女ノエマを娶りてその腹に生れた長子をラメクと稱し、自ら不敬虔な徒輩の首魁となりて、いよ〳〵罪惡を增長せしめたのではあるまいか。

セト族とカイン族の一覧表



前に掲げた系圖によつて見ると、マツサレムは大洪水の時まで生存へて居た筈で、さうなると彼も他の人々と共に水底の藻屑となつた譯である。之に反してヘノクは、自分の家族中に侵入し來れる腐敗を極力喰ひ止めようと務めたが、到底喰ひ止め得ないので、その滔々たる腐敗を何時までも目擊しない樣、神に引取られたのであらうとは、當らずと雖も遠からずではあるまいか。

教訓—良い樹は良い實を生じ、惡い樹は惡い實を結ぶ。父母の良否が如何なる影響をその子孫に及すものか、と云ふことは、カインとセトの後裔を見たばかりでも明である。

參考（1）古代人の長命に就て

セトの子孫は非常に長命を保ち、大抵は五百歲以上に達して居る。果してそれは事實相違ないのであらうか。是こそ何事も誇張に失する傾を免れない古代人の妄想に出たもので、この一事を以ても聖書が荒唐不稽の神話たるに過ぎないことを證明するに十分だと斷定する論者が世に少くはない。この難問にたいして色々の解答が考案された。聖オグスチヌスの頃には、その年齡をすべて十分の一に減少し、三十六日を一年として數へたものだと主張する者もあつた。然しさうする日になると、カイナンは七歲、セトは十歲で子を生んだと云ふ馬鹿々々しい結果を見ることになる。その上大洪水の記事を讀んで見ると、ノエの六百歲の十月とか七月二十七日とかの話が出て居る。六百歲の十月から六百一歲の始まで六十一日を數へてある。さすれば當時と雖も十二ヶ月を一年とし、太陰曆の二十九日半を一ヶ月としたものであると謂はなければならぬ。

固より聖書の現代文に出て居る數字は不正確で、文字通りに解釋すべきものではないかも知れぬ。然し大洪水前の人が異常な長命を保つたと云ふことは何處の傳說にも殘つてゐる。アブラハムの孫ヤコブも自分の年は百三十歲になるが、祖先の齡には及ぶべくもないと言つたことがある。（創世記四七ノ九）

他國の神話に記載せる古代人は、より以上長命を保つて居る。エジプトのマネトン、カルデアのベロス、フエニキアのモクス等の記錄は云ふまでもなく、ギリシアのヘロドトスでも、古代人の長命を物語つて居る。支那人は三皇の年齡を各一万八千歲と云ひ、ベロスは洪水前、カルデアに君臨せし十王の治世をば、百二十サルと數へて居る。一サルは三六〇〇年であるから、その百二十は四三二、〇〇〇年となる譯だ。夫れから以て見ると、聖書の年齡はむしろ短きに失すると謂はなければならぬ。

なほ生理學上より難問を提出する向きもあるが、然し其方から人命の長短を斷定するには實驗に訴へるより外はない。所で今日我等の觀測し得るのは現代人のみで、今の狀態では古代人の如き長命が保てないと斷定し得るに過ぎない。然し現代人と雖も、時としては百五十歲にも、その上にも達する人がある。然るに大洪水前には自然がより若く、より生氣發溌として居り、氣候は今日より良好で空氣は清鮮、人間の生活も簡素純朴、贅澤を知らなかつたから、それだけ體格は壯健にして、膂力は强大、よく長命に堪へ得たのではあるまいか。

（2）文化の起源

創世記によると、世界の始より農工業が起つてゐる。始祖アダムからして、既に土地を耕作して食を求め、その子のカインも農作に從事し、アベルは牧畜を始め、やがては家屋の造營、市街の建築、

天幕、樂器、冶金術の發明となつてゐる。是が果して事實とするならば、如何なる民族も農工業なり幼稚な藝術なりを有するはずだが、なか〳〵然うはなつて居ない。むしろ多くは何かの機會に偶然その基礎的知識を得、悠久の年月を經る間に漸次之を完成したと見る方が妥當ではあるまいか？論者はかう言つて聖書の記事に疑を挾んでゐる。解答はなか〳〵容易でないが、然し全然不可能でもない。

（イ）―アダムは人類の始祖と立てられ、之を教導し、薫陶すべき大任に當るべきはずであつたから、それを全うするに要するだけの知識を惠まれたはずである。彼は諸の鳥や獸にそれ〴〵名を付けてゐる。「理性と言語と自由と事を考へる爲の心を彼等に與へ、知識と悟りとを彼等に滿し給へり」（會衆書一七―五）と會衆書にも言つてある。決して論者の考へてゐるが如く、猿の少し氣の利いた半獸半人程度のものでなかつたことが察せられるであらう。

（ロ）―現存の野民中には農工業の何たるかを知らないのが居るにせよ、それから推して原始人の知識を評價するのは當を得て居ない。今日の野民は概して敗殘の民である。優者に追はれて、不毛の荒蕪地へ逃避した結果、農耕をしようにも氣候の關係上それが出來ない、牧畜を營むにも家畜がない。木工なり冶工なりを始めようにも、その原料が見付からぬ。已を得ず、有合せの物を採つて糊口を凌ぐべく務めてゐる中に、以前覺えて居た農工業の知識も、經驗も次第に忘却し終つたものではないだらうか。

（ハ）―文化の進歩に就ての考察も、今日の狀態から推して悠遠の古代を斷じ、文化は是非とも遊牧時代、農業時代、工業時代と順を追つて進まねばならぬかの如く主張するのは當らない。人類の搖籃時代には、土地と云ひ、氣候と言ひ、今日とは頗る異つてゐたはずで、文化の進歩を資けるものは多々あつても、それを沮害すべき惡材料は案外少かつたはずである。なほ例へば火の發見の如きを偶然の結果に歸するのは、進化論に買ぶれ、原始人を以て半獸半人と見做す所から導き出せる愚論たるに過ぎない。

第六章　大洪水

（イ）**人類の腐敗**―アダムを始め、その子孫は皆長生をして多くの兒女を生んだので、人類は非常な勢を以て見る〳〵繁殖した。固よりその社會はカイン族とセト族の二つにかつきりと分れ、カイン族は「人の子」と呼ばれ、物質的文化の道を辿りて、肉の快樂、世の榮華を追ひ、セト族は專ら精神的文化に意を注いで、「神の子」と稱されたものである。

然るに年を經、代を重ねるに從ひ、「神の子」の中にも不心得な人間が出てきた。「人の子」の嬋妍な容色に迷つて之を妻に娶り、その不信不德を見做ひ聞き做つて、一日は一日と罪惡に溺れるやうになつた。殊に夫婦間に生れたのは、丈の高い力の勝れた、肉慾に耽つて止る所を知らない樣な巨人であつたので、その惡い習慣が人類一般に染まり、終には全く魂の拔けた、肉の塊も同然な人間となつて了つた。

神は人類がもう全く惡に浸つて腐り果て、その思ふ所、圖る所はたゞ惡のみであるのを見て、人を造つたのを後悔し給うた。大洪水を溢らして彼等を地の面から拭ひ去らう、獸畜も、昆蟲も、空の鳥まで

も滅し盡さうとお定めになつた。

然しそんなに腐つた人の中にも、ノエ夫婦とセム、カム、ヤフエトの三子、及びその三子の嫁だけは泥中を拔出た蓮葉の如く、周圍の濁にも染まず、身を愼み、行を研き、一心に神を崇め尊んでゐたので、神も之には慈愛の眼を注がれた。一日ノエに宣ふ樣、

「すべての人の末期は近づいた。彼等故に世は罪惡に充滿つてゐる。汝宜しく松木を以て方船を造れ、その長さは三百肘（一肘は凡そ一尺七寸）、幅は五十肘、高さは三十肘で之を三段に仕切り、上に明窓を開き、舷にも一の戸を設け、內外から瀝青を塗るべし。我は洪水を起して、すべての生氣あるものを滅し盡すであらう。たゞ汝と子等、汝の妻と汝の子等の妻とその方船に入るべし。又諸〻の潔き獸を七番潔からざる獸を一番づゝ携へ入りて、その生命を保たせよ」と。

（2）**方船の建造**—ノエは神の仰せを畏つて、早速方船の建造に取掛つた。是だけでも世の人には十分の警告となつたはずで、「信仰によりてノエは……方船を造り、之を以て世の人を罪せり」（ヘブライ書一一の七）と聖パウロは言つてゐる。そればかりか、方船がいよ〳〵竣工するまで百二十年もの長い〳〵年月を要しその間にノエは人々を勸めて悔い悛めささうと大いに努めたのであるが、惡に沈み入つた彼等は何と言つても取合ない。ノエが方船に入る其日までも、平氣で飲んだり食つたり、嫁を娶るやら、嫁に行くやら、少しも頓着しないのであつた（マタイ二四ノ三一）

ノエ方船に入る

（3）**大洪水**—方船は竣工した。一週の後にはいよ〳〵大雨を降らして世界を水になして了ふ、といふ御沙汰が出た。ノエは急いで家族でも禽獸でも入れるはずのものは殘らず方船に入れた。七日間の猶豫も瞬く間に過ぎたが、誰一人悔い悛めて方船に乘せて貰はうといふものは居ない。

六百歲の二月（今の十一月の半頃）十七日ノエはいよ〳〵方船に入つた。神は外から戸をぴたりとお締めになつた。忽ち大淵の泉は潰れ、天の堰は切つて落され、瀑の如き大雨が四十日の間も夜晝小止みなしに降り續いた。見る〳〵水嵩は增して川も海も溢れに溢れ、世界は濁流の滔々と湧き返へる大海原となり、ノエの方船は次第に高く水面に浮み上つた。

ノエの警告に耳を貸さなかつた人々も、この有樣を見ては如何に周章ふためき、我勝ちにと樹の上

に、岡に、高い山に駈け登つたであらうか。然し水は忽ち樹を沒し、岡を沈め、高山の頂をも十五肘の波の底に溺らして了つた。野山の獸、空の鳥、叢にすだく昆蟲までも殘らず死滅した。況んや罪に汚れた惡人輩が、いくら跪いても、あがいても遁れ得ようはずがない。ノエの方船に乘り込んだ人々を除けば生きごし生けるものは悉く滅び果てた。

大洪水來る

(4)洪水終る—雨が降り止んでも、地上は未だ一面に濁つた浪の揉み返す大海である。程經て神はノエのことを思ひ出し、風を地上に吹起させなさつたので、水は次第に減じ、百五十日の後、即ち七月の十七日に方船はアララト山に着いた。十月の朔になると山々の嶺が顯れた。

それから四十日を經て、ノエは何のくらゐ水が退いたか試めして見たいと思ひ、方船の窓を開いて鴉を放つた。鴉は彼方此方と飛び去り飛び來つて歸らなかつた。よつてノエは鳩を飛ばして見たが、鳩は足を止める處を得ずして空しく歸つて來た。ノエは手を伸し捕へて之を方船に入れた。七日を經て再び鴿を放つた。すると鴿は暮方に橄欖の青葉を啣へて歸つて來た。ノエは餘程水が退いたなと思つたが、なほ大事を取つて、船を出ない。更に一週間ほど待つた上で、今一度鴿を放つと、今度はもう歸つて來なかつた。水はいよ〳〵退いたのだ。

六百一年の一月三十日、ノエは方船の蓋を除いて外を眺めた。果して地の面はから〳〵になつて居る。二月二十七日に至ると、地は綺麗に乾いて了つた。その時「方船を出よ」と云ふ神の御命令があつたのである。生氣あるものは悉く滅し盡されたのに、自分等ばかり神の特別の御情によりて救はれたのであるから、ノエはその大恩を感謝するが爲、祭壇を築いて燔祭を獻げた。燔祭とは神の無上主權を尊ぶの意を表すが爲、犧牲の肉を寸斷にし、之を殘らず燒き盡して獻げる祭である。神はその床しい香をお喜びになり、ノエに有難いお約束を賜はつた。

「是から人の爲に地を詛ふことはあるまい。人の心は幼き時より惡に傾いてゐるから、もう再び諸の生物を滅す樣なことはせまい。地のあらん限り、播種、收穫、寒さ、暑さ、夏も冬も夜も晝も息むことはないであらう」

それから神はノエとその子等を祝して

ノエの燔祭と神の契約

「生めよ、殖ゑよ、地に滿てよ。野の獸も空の鳥も海の魚も汝等を畏れ、汝等を慄くであらう。是等は汝等の手に渡して置く。凡そ生ける動物は汝等の食となるべし。たゞ肉を血と共に食してはならぬ。汝等の生命を奪ふものがあらば、我必ず之を討つであらう……これからは決して洪水を漲らして生物を滅すことはあるまい。この契約を忘れない徵として、雲に虹を現はすことにするから、それが顯れる毎に汝等と結んだ契約を思出すであらう。」と、

洪水前の人は一般に穀類、野菜、果實等を食して居たものらしい。然れども今や罪惡の爲に體質がずつと弱つて來たから、夫れを補ふが爲め、鳥獸、魚類を食して可いとお許しになつた。たゞ肉を血と共に食しない樣、なほ人を殺したものは亦その生命を取らるべしと、申渡しなさつたのである。

獻訓—方船は公教會を象つたもので、之に乘り込まない人は、到底溺死を免れない。そして之に乘り込むには、洗禮の門が唯一つ開いて居る。

參考（1）カルデアの洪水物語

（イ）ベロスの斷片—カルデアの洪水物語はベロスの斷片によつて夙に知られて居たのだが、それは舊い傳說中、最も聖書の記事に近いものであつた。曰はく

「洪水前第十代の王、クシスートロス(Xisouthros)の時、大氾濫があつて、人類は滅され終つた。獨りクシスートロスはクロノス神(Cronos 或はEa)のお蔭で災害を免れた。と云ふのはその神がクシスートロスに命じて船を造らせ、家族及び親友と共にその船に乘り込ませた。船の中には、食べる爲、飲む爲に必要な品物を始め、獸や鳥や四足の動物をも積み込ませた。……果して洪水が來た。やがて水が退き、クシスートロスは二三の鳥を二回ほど放つた、三回目にだけその鳥は歸つて來なかつた。王は地面が顯れ出たことを知り、家人と船を降り、祭壇を築いて神々に祭祀を獻げた。忽ち彼は消え失せて見えなくなつた。クシスートロスの船は或山の上に停つた。……その船の一部が今にアルメニア國ゴルディエンス(Gordyens)山上に殘つて居る。巡禮者はその破片に固着せるアスファルトを削つて持ち歸り、病の豫防劑にすると云ふ」(Vigourouz, Bible et decouverts T.I.P. 380)

(ロ)楔狀文獻—ニニヴで發掘されしアスルバニバル王(Assurbanipal)の圖書館から出た楔狀文獻中には、より以上に貴重な資料が見出され、一八七二年英國の若いアッシリア學者スミス(Smith)によつて判讀された。洪水の話は十二の粘土版に書かれた叙事詩中の一挿話で、その十一枚目に出て居る。

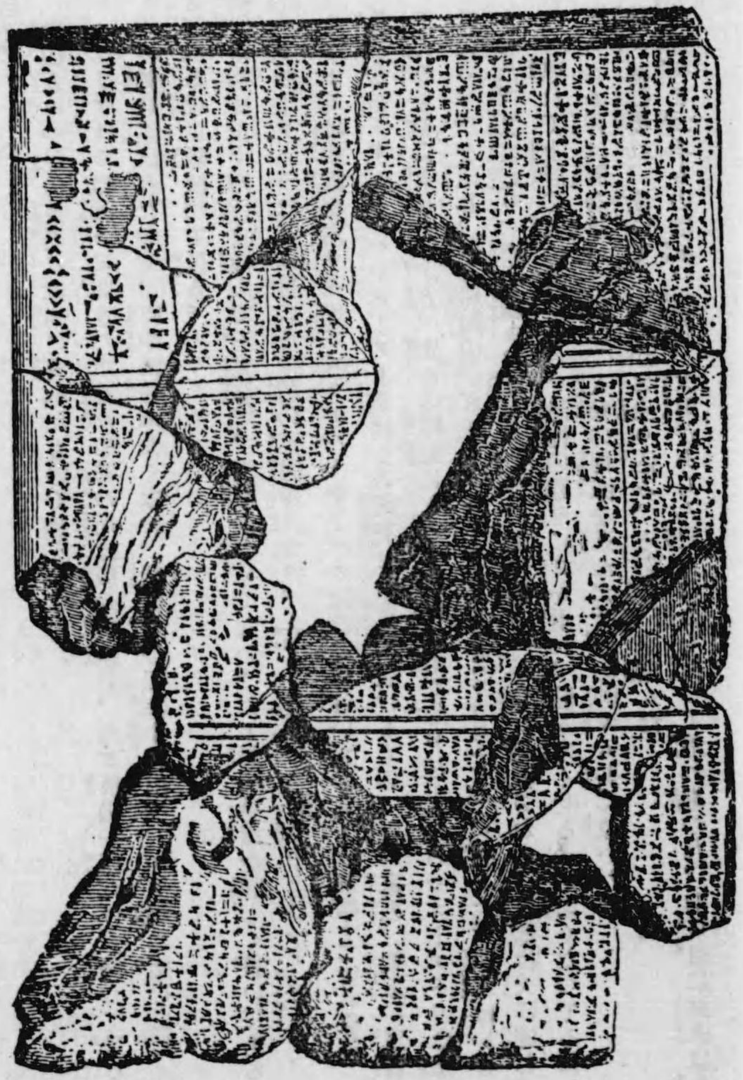
ギルガメス(Gilgames)と云ふ英雄が、イスタル(Istar)女神の機嫌を損じて病を得、その治療法を伺はんと、洪水の難を免れしハシスーアトラ(Hasis-atra)を尋ね、大汎濫の出來事を話して貰つたことにしてある。その要點を摘めば斯うだ。

洪水の話を傳へたギルガメス

エウフラト河の岸に位せる舊都スリブバク(Surippak)に神々は洪水を送らうと欲した。エア女神(Ea)はスリバクの人、ハシスーアトラ(ベロスの所謂クシストロスはこの名の轉訛か?)にその旨を告けて、

汝の家を棄てて船を造れ。——汝の所有物を遺棄して救ひを求めよ、汝の財産を措いて汝の命を救へ。——すべて生けるものゝ種子を船の中に收容せよ

と命じた。



狀現の楔文狀楔ため留き書を話の水洪

その次は意味が漠然として捕捉し難い。どうやら船の長さを書いてあるやうだが、然し數字が缺けて居る。

町の人々や民の長老には何と答へたものでせうかと、

ハシスーアトラは神々に問うた。神々の答の所は版が缺損し、たゞ後の一節だけが殘つて居る。

ベル神に詛はれたので、町中に住みたくない、船に乘つて海中に出で、エア神に遭ひに行く

と答へる樣に敎はつて居る。

次段の初め二十四行は極めて不完全で、說明が容易でない。たゞ船の構造を詳しく書いてある。

ハシスーアトラは五日目にその船の正面を作つた。高さも屋根も、周圍も百二十肘（キユビト）で、ハシスーアトラは松脂を六サルとアスファルトを三サルほど之に注いだ（サルとは周圍十二肘ある量）

造船が竣工するや、ハシスーアトラはその所有せる金銀、生けるもの、種、家族、親戚、家畜、獸類、工人等を船に乘せた。夕方、定めの時刻になると大粒の雨が降り注いだ。ハシスーアトラは恐れて船に入り、戸を鎖し、舵を船頭のプズルークルーガル（Puzuru-kur-Gal）に付した。洪水はいよ〳〵始まつた。黑雲起り、雷鳴轟き、風吹き荒び、地は震ひ、一切は破滅された。汎濫は天に達し、神々さへ恐れて上層の天に逃げ込み、恐怖の餘りに耳を垂れ、體を丸くせる犬の如くなつてゐた……

イスタル神は聲を擧げて叫び、人類の絕滅を悲んだ。他の神々も共に泣いた。

神々は打萎れ、泣いて、ぢつかと坐り込み、その唇を噤んだ

六晝夜と云ふものは風、龍卷、大雨があらん限りの力を振つて荒れ廻つた。七日目に洪水は止み、

船はニシル（Nitsir—バビロンの北、今のクルヂスタン方面に在り）へ向つたが、山に支へて六日間、其處に止づた。

七日目が近くと、私は鴿を出して之を放つた。——鴿は往つて又歸つた。

止るべき處がなかつたので歸つて來た。——私は燕を出して之を放つた。

燕は往つて復歸つた。——止るべき處がなかつたので歸つて來た。

私は烏を出して之を放つた。——烏は飛び去つた、彼は水の退いたのを見た、

彼は物を喰ひ泥の中を轉がり、鳴いて歸らなかつた。

私は一切の物を四方に出した。——私は祭を獻げた。

私は山の頂で獻物をした。——私は七つ宛香爐を列べた。

私は葦、香柏、桃金孃をそれに注ぎ込んだ。

神々は香を嗅いだ。——神々は床しい香を嗅いだ。

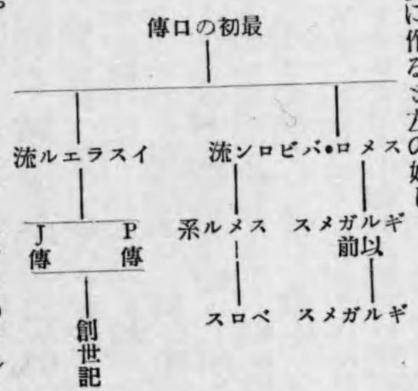
神々は蠅の如く獻物の上に群つた（一四六行—一六二行）

洪水を起したベル神はハシスーアトラの救はれたのを見て大に怒つた。然しエア女神は洪水を以て過度な處罰とせず、人を罰するのに野獸、饑饉、疫病等を以てする樣にと勸めた。ベル神は宥つた。ハシスーアトラとその妻とは神々の如く生活すべく、遙に河口へ移された。云々

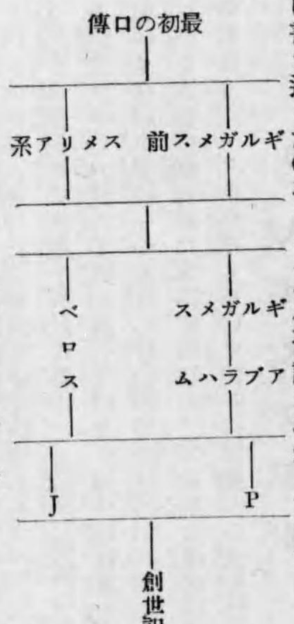
創世記の記事と、楔狀文獻との間に多くの類似點を存することは一見して明である。然し相違點もまた少くはない。聖書の記事の素朴にして一神敎的なるに反し、楔狀文獻は多神敎的、神話的である。聖書には洪水を以て人の罪の罰としてあるのに、楔狀文獻では、それを神々の出來心に歸し、後

で悲觀したり、後悔したりして居る。ノエが危難を免れたのは義人であつた爲であるが、バビロンの文獻に由るとハシスーアトラは却つてベル神の怒を招いて居る。楸欖の枝と虹の話はバビロンの文獻には見ゐない。この相違と類似とを解說するに二の假說が案出された。

第一假說—双方とも同一の原始的口傳に出たものである。この口傳は時代を經る間に、幾條もの流れとなつた。その一つはスメロ・バビロンの流で、多神教的思想を加味して變形し、今一つは純然たる原形を保つてアブラハムの一家に傳はり、モイゼが神感によつて創世記中に收めたものである、今之を一覽表に作ると左の如し。



第二假說—アブラハムはカルデアのウルに出たもので、彼の父祖は多神教徒であつた(ヨシユ一四ノ二)、隨つてアブラハムは神の召出に應じてその國を去るに當つて、國民中に存せし口傳を記憶して居た筈である。その口傳の中から神感によつて多神教的分子と誤謬とを省き、之を子孫に傳へ、子孫が之を二樣に書き遺したのをモイゼが創世記に收錄したのだ。



P傳とJ傳とは、創世記中の洪水の記事がP出典とJ出典とを寄合せて綴り成したものと云ふ說に基いたのである。但しPは司祭出典、Jはヤウエ出典

(2) 洪水と科學

以前は洪水の事實を直接に證明すべき地層が存在するものと信ぜし學者が多かつた。成るほど第三紀と第四紀との中間には、到る處、高山の上にまで砂礫、粘土、棄子石、黃土の地層を見ることがある。

洞窟內には人骨に動物の骨、石器等がごつちやになつて居り、時としては高山から轉げた巨石が幾百キロメートルの遠方に棄子石(Blocs erratiques)となつて居ることさへある。これこそノエの洪水の遺跡で、全世界に亘つて行はれた明確な證據だとされ、その地層に洪積層(Diluvium)と云ふ名さへ付せられたものである。

然し一ケ年やそこらの汎濫を以ては、到底是等の現象を說明するに足りない。砂礫、黃土の層は時

こして四百メートルからの厚みを有し、非常な長年月、殆ど第四紀の全部に亘れる汎濫―その一部は人類發生前に起りし汎濫の結果に出たものゝ如く見受けられる。棄子石は破損もせず角も潰れて居ないし、水に流されたのではなく、氷河の上に乘つて運ばれたものに外ならぬ。人骨を發見される洞穴は寒冷期に彼等が住居した跡で、動物の骨はその食料に供したものに過ぎない。

但し歐米の洪積世は寒冷の時代で、北歐、アルプス山、北米等は今のグリーランドの内陸と同樣な氷河に覆はれたものであつた。

無論この寒冷な氣候は、前にも一言せし如く全洪積世を通じて變化なく繼續したのではない。幾回も温暖な氣候と交代し、その都度氷は伸びたり、縮んだりした。この時代は今日と違つて雨が非常に多く、夫れもサハラから英國の中央まで、アメリカはルイジニアから大湖地方にまで及んだらしく、その雨の結果に成つたのが洪積層なのである。

だから第四紀の氷期―異狀な降雨、汎濫の頻繁に起りしその氷期を洪積世と呼ぶのは可いが、是を以てノエの大洪水と同一視してはならぬ。地質學上から云ふと、是こそノエの大洪水の跡らしいと云ふものは世界に一つも存しないのである。

然し人類の顯れ出た第四紀の初め、寒冷期と温暖期と相交叉せる當時、常ならぬ洪水が屢々起つたのだから、ノエの洪水もその中の一つと見たら大差ないであらう。

(3) 大洪水の範圍

大洪水の範圍に就いては、(イ)地球全面を溺らしたのだ、(ロ)人類の棲息せる地方だけに溢れたのだ、(ハ)ノエ等の住居せし地方のみに限るのだ、と云ふ樣な三種の見解がある。

(イ)地球全面を溺らしたと云ふ說は古代の註釋家が異口同音に唱道せる所であつた。「天下の高き山皆蔽はれたり」(創世記七ノ一九)とか、「水全地の面にありたり」(九ノ一)とか云ふ句を彼等は文字通りに取つた。地球面は殘らず水に沒し去り、方船に收容されたものゝ外は禽獸も人間も悉く死滅し終つたのだと信じたものである。

所で近年この說にたいして動物學と物理學上から容易ならぬ難問が提出されて來た。

動物學上から云ふと、もし大洪水が全地球面に及だものとするならば、現存せる諸動物や大洪水後に絕滅せし各種の動物は悉くノエの方船に收容され、飼養されねばならぬ筈になる。然るに動物の種族は殆ど無數で、方船に之を收容するだけの餘地もなければ、僅か八人の手で以て之を蒐り集め得ようはずもない。その上、寒帶に棲息するものも温帶に住み馴れたものも、北極の熊とアフリカ内地の獅子、ゴリラ、駝鳥等と同一温度の下に一ケ年以上も生を保つのは頗る困難と謂はなければならぬ。なほ此說によると、今日地球上に棲息せる諸動物は皆方船の止つた地點から出發し散布したものとせねばならぬが、然し如何なる手段によつて廣漠たる海洋を渡り、アメリカ、オーストラリアの兩大陸、その他の島々に移住し得たであらうか。アメリカやオーストラリアには他の地方に見られない動物も棲息して居るが、其等は何處から何うして渡つて行つたものであらうか。

終に大洪水が全地球面に及んだものとするならば、海水と淡水とが相混同し、魚類の中には到底生存を續け得ないのが少からずあつたに相違ない。ノエは魚類までも方船に收容しなかつたのだから、其等は絕滅の不幸を見るの外なかつたじやあるまいか。

物理學上から云ふと、地球全面を溺らす程の水量が何處から得られたであらう。聖書には大洪水の原因として豪雨と海水の汎濫との二つだけしか掲げてない。所で今日地球全面に存する水量のみでは到底世界最高の山までも溺らすに足りないことは分りきつて居る。アンデス山脈やヒマラヤ山脈中には八千メートルを超ゆるほどの高峰さへ少くはない。エウエレスト峰の如きは八千八百四〇メートルに達して居る。それを悉く水底に沒せしめるには幾何の水を要するだらうか。

その上、四十晝夜に亘つて地球全面に非常な豪雨が降り注いでは、容易からぬ大氣の冷却、氣壓の變動を來し、動物でも人間でも到底生きて居られなくなる。無論、神の全能力を以てするならば決して不可能ではない。然し世上の出來事を說明するのに、さう無暗やたらに奇蹟的干涉を持ち出すのは健全なる哲學、及び神學の許さざる所である。

(ロ)是に於てか、ノエの大洪水を以て人類の生息せし地方のみに限ると云ふ第二說が今日廣く行はれる樣になつて來た。この說に從へば「天下」(六ノ)とか、「すべての肉」(七ノ)とか、「天下の高き山」(十九)とか云ふ創世記の辭句は、「白髮三千丈」と云つた樣な東國流の書き方で、たゞ誇張法と見て差支ない。

加之、聖書の記事の性質を考慮に入れて見るがよい。この記事がバビロン地方の傳說と類似して居る所から以て察すると、センナアルに於ける民族大移動の前、大洪水に關する口碑、その大洪水を實見せしノエとその三子の語り傳へし口碑があつたものと思はねばならぬ。聖書記者の筆のきびくゝと生動し、しかも その記事が頗る詳細に亘つて居る所から以て見ると(特に第八章)、それは當らずと雖も遠からずではあるまいか。たとへ神感を以て書かれたにせよ、未知の事實を神に啓示されたのではなく、ノエとその三子の見聞したまゝの事實談が、次から次へと傳つて來たのを記述したのである。隨つて、「全地」とか「天下」とか云ふのは、ノエとその子供等が知れる地方、その目擊せし山や、見なれし動物に當るものとせねばならぬ。

要するに聖書の上から見ても、神學上から云つても、この大洪水をば、人類の生息せし地方に局限したからとて、何等の不都合もない。科學上から論ずると、むしろ夫れであらねばならぬ。

で今日カトリックの立場から安心して採用すべきものは、この第二說ではあるまいかと思ふ。然し人類の棲息して居た地方の最も高い山を水が十五肘の浪の下に沈めたと云ふならば、どうしてその水は他に流れて行かなかつたものだらう。水は流動物ではないか。堤防でも設けない限り、之を一地方に堰き留め得るものではあるまい。

なるほど水はよく流動する、一地方にばかり留め置くことは出來ないはずだ。然し地質時代に土地の隆起や低降が頻繁に行はれたことは學者の等しく承認する所である。だから神の干涉なり、或は何か自然の原因なりによつて、當時人類の棲息せる地方が急に低降し、爲に最高の山までが水底に葬られ去つたとするならば立派に說明が出來る譯ではないか。

(八)學者の中には大洪水の範圍をより狹くし單にメソポタミア地方に繁殖せる民族だけを溺らしたと見、難を免かれたのはノエとその家族だけではなかつたのだ、と主張する向がある。彼等に言はせると、聖書は世界史ではなく、たゞヘブライ民族の歷史である。著者は救靈の歷史に關係を有せない民族をば眼中に置かないで、獨りセトの子孫たる「神の子」と、その「神の子」と共に住んでゐた「人の子」の社會をば、「總の人」と稱してゐるのである。

(a)―その證據に、大洪水に關する傳說はアフリカや大洋洲の土人間には全く發見されない。

(b)—紀元四千年前から各種の民族や言語が形成されてゐたことは明かだが、從來の傳統的解說によつて大洪水を紀元前二千年かそこらにしては右の事實を說明することが出來ない。

(c)—大洪水の時、人類は地球上到る所に繁殖してゐた。アジア、ヨウロッパは言ふまでもなく、人骨なり、その器具なりから察すると、アメリカ大陸にも旣に居住してゐたものらしい。すべての人類が滅されたとしては之を如何に解說すべきであらうか。

カトリックの學者中にもこの說を主張せる者が二三ないではない。然しこの說に最後の解決を與へうるものは科學で、大洪水當時に於ける人類繁殖の範圍と大洪水の難を蒙りし地域とを確め得さへすれば問題は自づと解決される譯だが、今日まで科學は何等の斷定をも下してゐない。言語や民族の形成を說明するには、大洪水の時期を是まで人々の思つてゐたのよりずつと古くすればそれで澤山だ。必ずしも第三說に從ふ必要はない。とにかく今日カトリック敎會に廣く行はれるのは第二說であると承知しておいて貰ひたい。

第七章　ノエの子孫

(1)**詛と祝福**—ノエの方船から出た小な群の中にさへ善と惡との代表者があつた。ノエの第二子カムは餘り質の良い男ではなかつたが、洪水後、間もなく檻樓を出して了つた。

アララト山附近は今日でも至極葡萄の栽培に適して居る、否、葡萄の原產地は彼の界隈だと云ふ話だが、ノエも方船を出てから農業を營んで葡萄を栽培し、一日その汁を絞つて飲んだ。果してそれに人を醉はす力があるとは知らなかつたか、或は偶然何かの都合でさうなつたか、兎に角その爲に醉ぱらつて、素裸體のまゝ天幕の中に寢轉んで了つた。カムはその不樣を見ながら、そつと隱してあげようともせず、外に出てこれを兄弟に告げた。セムとヤフエとは流石に心掛が良い。上衣を肩にかけ、父を見ない樣、後退りのまゝ行つてその醜態を藏うてやつた。ノエは醉が醒めてからカムの爲したことを聞き、カムの子カナアンを詛ひ、「詛はれたる哉、カナアン、汝は兄弟等の奴隸の奴隸たるべし」と云つた。何故ノエはカムを詛はずしてカナアンを詛つたか、確に何とも言ひ難いが、カナアンとは「低地に居る者」を意味するので、ノエは其意味を取つてカナアンの將來を豫言し、その子孫たるカナアン人が後日イスラエル人の奴隸たるべきことを告げたものではあるまいか、學者は多くさう解して居る。

次にノエはセムを祝して、

「セムの神ヤウエは祝せられさせ給へ。カナアンはその奴隸たるべし」

と云つた。直接にセムを祝する代りに神を祝した。是れ他日セムとその子孫に賜はるべき神の御惠を遙に仰見て、心から感謝したのである。その御惠とは「セムの神ヤウエ」と云ふ語を以て示されてある。ヤウエは特にセムの神であると云ふ意味で、後日その子孫と特別の關係を結び、その中から救世主を出し給ふべきことが、この短い一句の中に仄見ゆて居るのである。

ヤフエトも同じく祝された。

「神はヤフエトを擴け給ひ、彼はセムの天幕の中に住み、カナアンはその奴隷たるべし」

ヤフエトは精神的と物質的と兩個の祝福を忝うした譯だ。ヤフエトとは「擴がる」と云ふ意味で、ノエはその名を解釋して、神が廣い大きな國土を彼に授け給ふべきことを豫言した。然しその外にもヤフエトがセムの祝福の分配に與るべきことを告げて居る。「セムの天幕に住む」とは必ずしもヤフエト族がセム族を征服する樣になるの謂ではなく、彼の子孫が他日改心してセムの神を禮拜すべきことを豫言したものに外ならぬ。たゞ「カナアンは兄弟の奴隷たるべし」と三回もくりかへされて居るのは、實に氣の毒である。

ノエの豫言は立派に實現された。カム族は最初バビロンの如き、エジプトの如き强大な國土を建て、一時は飛ぶ鳥も落すと云ふ勢であつたが、然し物質文化の進歩に比例して、道德上の腐敗もまた甚しく、その神、その神の禮拜式等は淫猥見るに忍び難きものがあつた。爲に何時しかセム族やヤフエト族に滅されて、その奴隷となり終つたのは、また實に當然の成行だと謂はなければならぬ。

なほ漠然と不明瞭な語を用ゐてはあるが、然し樂園で約束された勝利者、サタンの頭を踏み碎くべきメッシャがセム族に出づべきことだけは明白となつたのである。

(2)人種誌—創世記には、右の出來事につゞいて、ノエが大洪水後三百五十年間生き存へ、齡九百五十歲で死んだこと、諸國の民がその三子セム、カム、ヤフエトに出たことを簡單に錄してある。

是こそ歷史上に大きな足跡を遺せし人種の起源、その分布の狀態を確めるに見逃すべからざる最も古い、貴重な參考資料である。この人種誌はモイゼよりずつと古い口傳に基いたもので、最近エジプトやアッシリアで發掘された文獻と突合せて、その眞實、的確なることが立派に證明された。モイゼが之を記錄した目的は人類の一に出しことを明にするに在つたらしい。固より地球上の諸人種、ノエの三子より出でしすべての民族を殘らず數へ上げて居るのではない。たゞ白晳人種中でも、ヘブライ人が知つて居なければならぬのだけを書留めたもので、その人種の住める地域は、北は黑海とアルメニア山脈に限られ、東はチギリス河畔を遠く超ゆず、南はペルシア灣、アラビア、紅海、エジプト、アビシニアを包み、西は地中海の東岸に位せる島嶼に及んで居る。概して言へばヤフエト族は西アジアの北と東、及び小アジア、地中海沿岸に居を占め、カム族は主としてアフリカに住み、セム族はセンナアル附近に居殘つたものである。（參考の部を見よ）

(3)バベルの塔—ノエの子孫も久しきを經るに隨ひ、次第に眞の神を忘れて、偶像崇拜に陷つた。時に地上の住民は皆同じ言語を話して居たものであるが、人口はいよ〳〵增殖するし、何時までもアルメニアの高原に密集して居られなくなり、故鄕を去つて南東へ進み、センナアル(Sennaar)の地に平原を見付け、其處に住むことにした。センナアルは多分スミル(Sumir)或はシュミル(Choumir)と同じで、楔狀文獻には常にアッカドと併せて、バビロンを然う呼んである。但しアッカドは平原の北をスミルは

バベルの塔と人類の離散

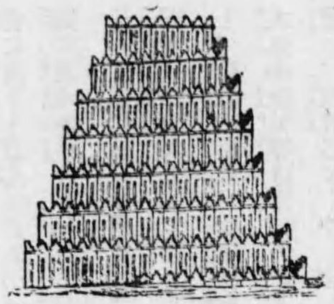
其南を指すものゝ如く、カルデアの諸王は好んで「スミル、アッカドの王」と自ら稱して居る。

この平原は非常に地味が肥沃で、彼等の滿足を買ふに餘りあつたであらう。然し全土は沖積層の土壌より成り、石を產しない。よつて彼等は互に話し合ひ、煉瓦を作つて火に燒くことにし、斯くて石の代りに煉瓦を得、瀝青をセメントに代用した。實際バビロンには砂岩もなければ大理石もない。たゞ多いのは粘土のみだ。よつてバビロン人はその粘土を以つて煉瓦を造り之を火に燒くか、日光に乾かすかして、建築に應用した跡が今なほ遺つて居る。

猶エウフラト河畔には、石油及び瀝青を多く產するので、彼等は直ちに之を應用したのである。彼等はまた言つた。

「都と塔を建て、その塔の頂を天に達かしめよう。斯くて我等の名を高くし、全地に散々となることを免れようではないか」と。

彼等の志は離散を防ぐに在つた。してその志を達するのに、都と巨大な塔を築くこと、己が名聲を天までも高くすること、この二の手段を思ひ付いた。つまり大都會を築き、その光榮の大、その建物の美を以て遠隔せる民衆をも吸引するに足るべき連絡の中心地たらしめようと欲したのである。



バビロンの高塔

バビロンの金字塔は神殿である所から以て見ると、或は今の塔もその用途に充てるはずで、つまりその都を政治、宗教の心臟ともなす考であつたのだらうか。何れにせよ彼等の計畫は不敬虔極まり、傲然と神に向つて挑戰狀を投付ける樣なものだ。よつて神は降つてアダムの子等が築かけた都と塔とを御覽になり、

「民は一つで皆同じ語を用ゐ、爲にこんなことを遣り出した。完成する迄は決してその企圖を止めることはあるまい。我等は降つて彼等の言語を亂し、互に人の聲が判らない樣にしよう」

と曰うた。斯くて彼等を其處から全地の表へ散らし給うたので、彼等は都市建設を思ひ止つた。それよりしてその建てかけた塔にはバベル(Babel)と云ふ名をつけられた「混亂」を意味するのである。

センナアルでバベルの塔を建てようとしたのは、全人類であると久しく信じられて居たものである。

然し近代の註釋家は之をセム族、たゞへ全部でないにせよ、少くも大部分はセム族だと見る樣になつた、前後の文脈から察すると、いかさま然うかと首肯れる所が無いではない。創世記の著者は最初からの立案に基き、救世の歴史に直接關係のない人種の話は斷然切り棄てることにして居る。塔を建て、名を百世に遺さうなんて云ふのは、セム族の宗教的使命に正反對な企圖であるから、神の干渉を招き、その企圖の實現を妨げられたのだと見れば、その間の消息を察することが出來るぢやあるまいか。

(4)—言葉の混亂は如何にして行はれたか—カトリックの學者中にも、ニスの聖グレゴリオの說に從ひ、「言葉が同一だつた」と云ふのを、心の一致と云ふ意味に解し、お互ひ意志の疏通を缺き、衝突を惹起して離散し、離散の結果、次第に舊い言語は變化し、新い言語は生れるに至つたのだ、と解する人がある。然し大抵の教父等は言語の變化を以て突然、奇蹟的に起つたものと解して居る。神がその全能を以て言語を變じ、相通じなくなし給うた結果、互に意志の疏通を缺き、不和を生じたので、言語の通ずる者ばかりが各一團となつて、東へ西へ南へ北へと離散するに至つたのは有り得べきことである。

兎に角、神の干渉が如何なる程度のもので、言語の變化は何に原因したのか、創世記の本文だけでは確定することは出來ない。同じく離散前センナアルで使用して居たのは何語であつたか、夫れより直接に發生した語は如何なる種類のものであつたか、其等は全く知る由もないのである。

然しその語は決してアダムとエヲの使用せし最初の語でなかつたことだけは確だ。奇蹟に由らない限り、殊に文字のない時代の言葉は、徐々に變化して行くが當然で、さうないとすれば、夫れこそ大きな奇蹟である。さればヘブライ語その物も決して人類最初の語にあらず、セム族の古い語でもあるかそれすら隨分疑はしい。

この事につゞいて創世記にはセムの直系子孫を數へ、アブラハムに及んで居る。大洪水前の太祖の系譜に倣つて作成したもので、アブラハムの歴史へ入る序幕と見て然るべきであらうか、卽ち左の如し、

人名	長男の出生した年	長男の出生以後	全年齡
セム	一〇〇年	五〇〇年	六〇〇
アルファクサド	三五	三〇三	三五八
サレ	三〇	四〇三	四三三
ヘベル	三四	四三〇	四六四
ファレグ	三〇	二〇九	二三九
レウ	三二	二〇七	二三九
サルグ	三〇	二〇〇	二三〇
ナコル	二九	一一九	一四八
タレ	七〇	一三五	二〇五
アブラハム	一〇〇	七五	一七五

教訓—傲慢は混亂を生むの母だ。ノエの子孫が大それた傲慢心を起し、柄にもないことを企て、僞に言語の混亂を來したのは、當然の罰である。然し言語の混亂は容易からぬ不便を來したに相違ないが、そ

の爲に人が世界の隅から隅へ行渡つて多くの邦國に分れ、惡人が出て來ても、皆が殘らず夫れに引かれる樣な憂がなくなつたから、結局はかへつて益になつた譯である。

參考（1）人種誌（Table Ethnographique）

既に一言せし如く、創世記の人種誌は最も貴重な參考資料であるから、その本文と簡短な說明とを添へて置かう。

「ノエは洪水後三百五十年間生き存へ、齡九百五十歲に達して死んだ。ノエの子セム、カム、ヤフエトの傳は是だ。洪水の後、彼等に子等が生れた。」

ヤフエト族—先づヤフエト族から書き出してある。

「ヤフエト（Japheth）の子はゴメル（Gomer）、マゴグ（Magog）、マダイ（Madai）ヤワン（Javan）、トウバル（Thubal）、モソク（Mosoch）、チラス（Thiras）であつた。

「ゴメルの子にアセネス（Ascenez）、リフアト（Riphath）、トゴルマ（Thogorma）があり、ヤワンの子にエリサ（Elisa）、タルシス（Tharsis）、ケチン（Cethin）、ドダニン（Dodanin）があり、諸の島の民は是から分れ、各その言葉とその宗族とその邦國とに從つて其地に住んだ」。

ゴメルは楔狀文獻のギミライ（Gimirai）、ギリシア人の所謂キンメリア族（Cimmeria）の祖で、マゴグは除り判然しないが、シチア人（スキタイ）の祖ではあるまいかと云ふことだ。マダイはメディア人（Media）の祖で、楔狀文獻には、クルディスタン（Kurdistan）の東に住める民族をさう呼んである。

ヤワンはイオニア人（Ionia）や、ギリシア人の祖だ。トウバルから出たのはコーカス山の南に住めるティバレニア人（Tibarenia）、モソクから出たのがアッシリア文獻のムスキー族（Muski）だ。黑海とカスピ海との間に國し、多分後ではロシアにも住んだものであらう。ティラスから出たのはトラキア族（Thracia）ではないだらうか。

アセネスの後がゼルマン族、トゴルマの後がアルメニア人である。

ヤワンの子のエリザはエリド人（Elide）の祖で、タルシスはイスパニアのタルテッシス人（Tartessis）ケチンはキプルス島民、ロダニンはローデス島民の祖であらうか。

カム族—次にカム族のことを記してある。

「カムの子はクス（Chus）、メスライム（Mesraim）、フト（Phuth）、カナアン（Chanaan）、クスの子はサバ（Saba）、ヘウイラ（Hevila）、サバタ（Sabatha）、レグマ（Regma）、サバタカ（Sabatacha）、レグマの子はサバ、ダダン（Dadan）であつた」

クスはエチオピア人（今のヌビア）の祖で、メスライムはエジプト人の祖だ。フトはリビア人の祖らしい。カナアンは低地を意味し、その子孫がバレスチナの住民となつた。クスとレグマの子孫はアラビアとアフリカの各地に占據したものである。此處に著者はクスの子ネムロド（Nemrod）の歷史を特に挾んで居る。

「クスはネムロドを生んだ。彼はヤウエの御前に有力な獵夫—征服者—であつた。彼は始めセンナアルの地にバベル（Babel—バビロン）、エレク（Erek）（今のワルカ）、アッカド（Akkad）、カルネ（Kalneh）（チギリスの東岸）等を建てた。其地よりアッスル（Assur）へ行き、ニニヴ（Ninive）、レホボトイル（Rehobothir）カラ（Kalah）、及びニニヴとカラの間なるレセン（Resen）を築いた。是等は大きな都城であつた」

アッスルはこの地方の首都であつたから、その國をアッシリアと呼ぶ樣になつたのだが、後ではカ

ラに、夫からニニヴにその勢力を奪はれた。ニニヴは今のモッスル(Mossoul)の前面に位し、カラは今日ニムルド(Nimrud)と稱しニニヴの南數哩の地に在り、レホボトイルは判然しない。コユンジク(Koyoundjik)とネビユヌス(ニニヴの跡)との中間に堆積せる廢墟こそ多分レゼンではあるまいか。

聖書にはネムロドの事跡を記してから、同じカム族でメスライムとカナアンの子孫の話に移つて、次の如く言つてある。

「メスライムはルヂン(Ludin)、アナミン(Anamin)、ラアビン(Laabin)、ネフトウイム(Nephthuim)フエトルシム(Phetrusim)、カスルイム(Chasluim)等を生んだ。その中からフイリスチイン人(Philistiin)、カフトリム人(Caphtorim)(島民)が出た」

メスライムはエジプト人の祖で、此處に記せる民族は主としてエジプト及びその附近に住んで居たものであらう。

「カナアンは長男のシドン(Sidon)、及びヒッチ族(Héthéen)、エブス族(Jebusœen)、アモリ族(Amorhéem)、ヘウイ族(Heveen)等を生んだ。カナアン族は大に蔓り、その境はシドンよりゼラを經てガザに至り、ソドマ、ゴモラ、アデマ、ゼボインに沿つてレサに及んだ」

カナアン族の住める地域を詳しく記してあるのは、他日イスラエル民族が取つて代るべきはずであつたからだ。

セム族—セム族に就てモイゼの記せし所は左の如し、

「セムはヤフエトの兄で、ヘベル(Heber)のすべての子孫の先祖である、彼の子はエラム(Elam)とアスル(Assur)とアルファクサド(Arphaxad)とルド(Lud)とアラム(Aram)であつた。」

エラムはアッシリア文獻によつて最先きに知られ、「高き者」を意味する。この民族はバビロンの東に當る山地に國し、シュシアン(スサン(Susan)とも云ふ)を都とした。

アッスルは都の名であるが、此ではアッシリア國を指したものである。アッシリア人が果してセム族に出るか否かは十九世紀の中葉までは隨分疑はれたものである。殊にルナンの如きは「セミチク語の歴史」中に之を怪しいと睨んで居るが、然し今や言語學上からも、又舊い浮彫に描かれたアッシリア人の生理的性質から見て、そのセム族たることは十二分に明となつた。

アルファクサドは前後の文脈よりしてカルデア人を意味することは明である。ヘブライ人に最も關係深き民族の一覽表を掲げながら、カルディア人ばかりを遺すはずはない。アルファクサドの子がサレ、サレ(Sale)からヘベルが出で、ヘベルの子がファレグ(Phaleg)、エクタン(Jectan)で、ファレグからヘブライ人が出、エクタンはアラビア人の祖となつた。

アラムはメソポタミア、シリアの大部分に占據せしアラメア民族の祖で、ルドは楔狀文獻にルル(Lul)と稱せられ、アッシリアの東に住んで居た民族を指したものではあるまいか。

(2) 大古の年表

(イ)年表の必要—年表は歴史に必要缺くべからざるものである。種々の出來事が如何なる順序で發生し、經過し、終結したかと云ふことを確實に示さないならば、それこそ混沌たる事實の堆積で、到底之に歴史の名を冠することは出來ない。だから文化の民は何れも年代を確定し、その歴史を構成せる種々の出來事をば年代順に並べるの必要を感じ、その爲に或る著名な出來事を選び、之を紀元として

その他の事實を之に結びつけようとして居る。歐米諸國でキリストの御降誕を紀元として、世界の出來事をすべて之が前なり後なりに排列して記述するが如きその一例である。

聖書も一種の歴史である以上、必ず年表を有するが當然で、實際太祖や、諸王の出生、死亡等を記した年表は幾回となく掲げてある。然し聖書に掲げてあるのは、正式の年表ではなくて、たゞ年表の資料と云つた樣なものに過ぎない。但し聖書記者は紀元なるものを知らなかつた。その年月日の數へ方は種々雜多で、例へば、エジプトを出てから幾年目だの、エルザレム神殿の建設、又は破壞から幾年目だのと數へて居る。たゞマカベ書だけがセレウクス(Selueus)朝の紀元（紀元前三百十二年）を襲用して居るのみである。

聖書註釋家は是非とも年表の研究を等閑に付してはならぬ。反對論者はこの點から聖書を攻擊し、その權威を臺なしになさうと務めて止まない。聖書に記載してある出來事の中には普通歴史の畑に屬するものも少くはない。そして兩者の年代は一致した所もあれば相違せる點も隨分ある。で論者はその相違點を捉へ、歴史的批評の立場から云ふと、聖書は文獻として何等の價値もないものだと痛罵を浴せるのである。だから彼等の論據の採るにも足らざることを明にし、聖書の記事に成るべく正確な年表を添へるのは今日の最大急務であると謂はなければならぬ。

(ロ)世界開闢の年代—先づ地球の星時代から生命の顯れ出るまでの年月日はたゞ學者の想像に托せるより外はない。地質時代に入つてからも、その長短を測るべき尺度は未だに發見されない。たゞ一つ確と思はれることは、原生代、古生代、中生代等の各生代は幾億万年も繼續したと云ふ一事である。高山、峻岳が風化作用を受け、次第に削り去られて平地となり、土砂が海底に沈んで幾千メートルの厚みある地層を作るが爲には、幾億万年を要するか、到底想像すら及び難い所である。

それは暫く措き、人間が初めて地上に顯はれ出た年代と、大洪水の年代だけなりとも、正確に知ることを出來ないものであらうか。

世人が口を極めて科學と聖書の衝突を叫んで止まないのは實にこの二大問題に就てゞある。基督教界に於て昔からこの二つの出來事に當てはめて居る年代は、科學上到底承認されない、全く誤つて居る、して右の傳統的見解は聖書に基いて居るのだから、それだけ聖書の信用は地に墜ちて來た譯だと彼等は聲をかぎりに叫んで居るのである。

この攻擊に直面せる一方から、驚ろくべき科學の進歩を目擊せるカトリックの學者等は、大古の年代と云ふ問題を深く〳〵研究した揚句、次の樣な新しい結論に到着した。

(a)—大洪水の年代は之を確實に知ることが出來ない。況んや今日の如き科學の狀態に在つては、人類の初めて世に現れ出たその年代なぞ、之を概算することすら不可能である。否、確實にして斷定的解決を得る爲の資料が全然缺けて居るのだから、何時になつても、想像の藪から科學の畑へ出ることは到底望むべくもないのだ。

(b)—然し兩出來事をはめ込むべき境界線を引き、その兩端を大ざつぱに定めることだけならば、必ずしも不可能とは思はれない。

(c)—その境界線は、大洪水のも人類の發生期のも、傳統的年代よりは遙か彼方に引かなければならぬ。

(d)—この結論は決して聖書の史實とは衝突しない。一體聖書には確實な年表なしと云ふことは、有

力な註釋家の皆一致する所である。

（八）**大洪水の年代**―大洪水を以つて一地方に限つた出來事だとすれば問題はないが、全人類を覆滅させるほど大仕掛なものであつたとする時は、夫こそアジア、アフリカの文化よりも非常に遼遠な時代にあつたものとしなければならぬ。今エジプトやカルデアの文化は何時頃からその萠芽を發したものであるか。それに就ては近年幾多の參考史料が發見されて、多少明い知識を摑むことが出來る樣になつた。先づ大昔の又その大昔より色々の人種や言語の存したことは、疾くに知れきつて居る所で、紀元前千四百年頃、エジプトに王たりしセチ一世(Seti. I)の墓には、今日の夫れと殆ど異らない人種を描いてある。たゞ夫婦二人の間から生れた人間が既にそれほどまで變化して居たとすれば、隨分と悠久な年代を閲して來たものと思はなければならぬ。同じく言語學上から考へても、全く類似點を見ない程に變化せし言語が、ずんどの昔から存在せしことは爭ふべからざる事實だが、同一の母語よりこゝまでに至るには、幾何の長年月を要したものであらうか。

夫ればかりでない。エジプト學に精通せるカトリックの大家等は紀元前四千年頃、既に一定の宗教があり、文學があり、建築があり、見事な文化の花の咲き亂れて居たことを認めるに躊躇しない。マネス(Manes)が始めてエジプトに君臨した年代は諸說區々として、ボエク(Boeckh)氏は紀元前五千七〇二年、ウンゲル(Unger)氏は五千六百十三年、ルノルマン(Lenormant)氏は五千四年、マスペロ(Maspero)氏は五千年頃だと主張して居るが、然しその當時でもエジプトの文化は隨分進んだものであつた。マネスの後を承けた三王系の墓は今だに遺存してある、それは長方形の大きい、頑丈なもので、內部には通路があり、それを辿つて行くと狹い一個の室に達し、大きな石碑を收めてある。種々の物象を描いた壁畫もあつて、その當時からエジプト人は各の種繪具を使つて、十四の異つた色彩を寫し分けて居る。彼等は礦物の採掘を知つて居て、シナイ半島の銅礦內に發見された第三王系最後のスネフル王(Snefrou)の碑文には、アジアの王を擊破して凱旋した手柄話を記してある。

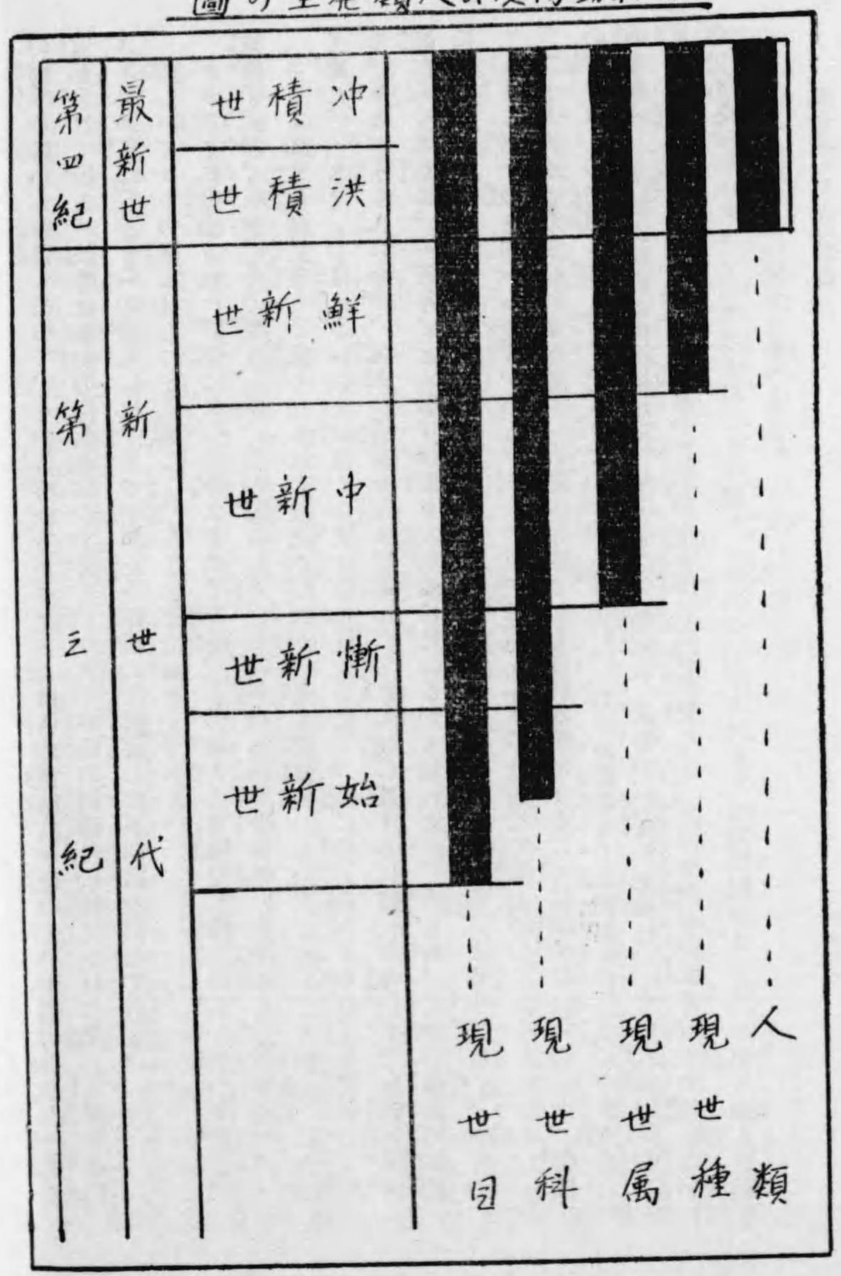
然しバビロンの歷史はもつと以前に溯ることが出來さうである。

カルデアに發掘された碑銘によつて今より六千年前、この地方に君臨せし諸王の名が判つて居る。彼等の武器、衣服、その乘りし馬、その驅りし車、その率ゐし兵卒等を描いた浮彫も見出された。

エラムの文化は近年まで餘り知られて居なかつたが、是も隨分古いものだと云ふことが明になつて來た。「スサンで發見された文獻はその文字の性質から見て、確に紀元前四千年以上を突破して居る。斯る稠密な人口を得、强大な國家を築き、進んだ文化の域に達するには一万年以下では到底不可能だらうと思ふ。一万年と云ふ數字は餘り大袈裟に見ゐるかも知れぬが、兎も角、從來の傳統的解說により、大洪水を以て紀元前二千年頃の出來事としては、到底辻褄を合せることが出來ない。どうしても更に數千前を加へる必要がある」とシエール師(P.Scheil)は云つて居る。

（二）―大洪水より更に一歩を進め、人類の創造されし年代を測定することは出來ないだらうか。俗間の歷史はこの問題に就て何等の資料をも提供し得ない。たゞ地質學と古生物學とによつて多少の光明を摑み、人類が地質時代の地層內に遺し置いた骨骼や武器や用具やを尋ね、その人骨の存して居る地層の新古、その當時の禽獸や草木の化石等と比較研究して、之が年代を測定するより外はないのである。

哺乳動物及び人類發生の圖



スエーデンのモンテリウス(Montelius)氏の言ふ所に由ると、「エラムの古都スサンの廢墟は高さ三十四メートルの丘をなして居る。上層の五メートルは紀元前十一世紀から今日まで卽ち三千前ばかりの間に成つたものである。その以下、五メートルの間に發見された器具は、青銅器や銅器で、鐵器は一つもない。夫れから二十四メートルまでは石器のみである。して見ると紀元前四千年頃、この地方では既に銅を採掘使用して居たことが判る。上、中層の十メートルが六千年ばかりの間に形成されたとするならば、石器時代の二十四メートルを形成するには、幾年月を要したであらうか。もし同じ割合で計算すべきものとするならば、この地方の石器時代は少くも今から二万年前に始まつた譯になるのである」と。

ヨウロッパの舊石器時代(Paleolithique)を測定するには、極めて重要な地質學の尺度、洞窟内にマンモスや馴鹿のスケッチを遺せし原始人と時を同うせる第四氷河の襲來と云ふものがある。よつてこの襲來以後の年月、第四氷河の存續期間、はては原始石器時代のアシユウレアン期(Epoque Acheuléenne)、及びその以前のセレアン期(Epoque Chelléenne)の長短を測定し、第四氷河の襲來を以て今から二十万年前となし、第三氷期との間には、より長い間氷期があつたはずだと主張する人がある。然し地質學上からその說に異議を申立て、ナイヤガラ瀑布の落下、ミッシッピ河のデルタ、スカンヂナウイア地方にある幾多の瀑布を研究して、第四氷河は七千年乃至八千年前に終結したものと斷定する人も少くはない。

然らば第四氷河その物は幾久しく繼續したであらうか。非常に廣大なる堆石を遺して居る所から以て見ると隨分長く繼續したものらしく、佛の地質學者ラッパラン(Lapparent)氏は、端堆石—氷河の

終端に堆積し偃月形の堤防狀をなせる堆石―を形成するに要する年月を極く内輪に見積つて大凡そ三千年と云つて居る。然しスイス全土を覆へる厚き土壤はその堆石の上に重つて居るので、是にも隨分長い年月を要したはずである。

第四氷期は洞窟内に動物のスケッチを遺せし人種と時を同うしたもので、それは幾千年もの久しきに及んで居る。然しその前にも舊石器時代、原始石器時代のセンアン期がある。其等がごのくらゐ繼續したか、何とも斷定は出來ないが、洞窟時代とその長短を同じうすると云つても過言ではあるまい。

その上、人類の發生地をバミル高原か、アルメニア方面かとするならば、その人類が增殖して幾多の種族に分れ、ヨウロッパへ移住するに至るまでには幾千の歲月を閲みしたであらうか。

一九〇七年ドイツのハイデルベルヒ(Heidelberg)附近で一個の下顎骨が發見された。その埋沒せる地層から見ると、第二間氷期のものらしく、この骨には「ハイデルベルヒ人」(Homo Heidelbergensis)の名が附いて居る。一八九五年、デュホア(Dubois)博士はジャワのトリニル(Torinil)に於て二三の骨を發掘し、猿と人間との中間動物となし、之にピテカントロプス・エレクツス(Pithecantropus erectus―直立猿人)と名づけた。しかもその地層が第三紀のものだと云ふので、一時大に學者の注意を引いたものであるが、その後この層は洪積層下部より古からざるものだ、その化石も人と云ふよりは、むしろ猿と云つた方が至當だらうと云ふことになつたとか。然しそれを以て猿でもなく、「猿人」でもなく、劣等な原始人だとし、その層が果して洪積層下部だとするならば、また更に幾千年月を加へなければならないだらうか。それに就て科學は今日まで的確な尺度を提供してくれないので、何とも斷定は出來ない

(ホ)―石地質學上の證跡と聖書の記述とは衝突する所がないか。聖書には人類發生當時の極めて明瞭、完全な年表を掲げ、アダムからノエまで、ノエからアブラハムまで各太祖の年齡を一々詳記してある。その年齡を加算しさへすれば、人間の造られた年代でも、大洪水の年代でも一目了然たるものがあるではないか。してこの年數はヘブライ原文に由ると、アダムから大洪水まで千六百五十六年、大洪水からアブラハムまで三百六十七年、アダムからキリストまで四千年と云ふことになつて居る。科學はそれに反して極く内輪に見積つて、人類の發生を二万年乃至五万年前(學者によつては十万年とする)として居る。矛盾もまた甚しいではないか。なるほど一見さう思はれぬでもないが、然しこの矛盾はたゞ外觀だけに過ぎない。先づ人類創造の年代を確定するのに聖書の數字は當にされないと云ふことに、今日の註釋家は皆一致してゐる。それには二つの理由がある、

(a)その數字は不確實である。(b)創世記の系圖は多分不完全で、脫落があるらしく思はれる。

(a)―先づその數字は不確實である。創世記はヘブライ文と、七十人譯と、サマリア文と三種あつて數字の點だけは互に甚しく相違して居る。何れが最初の數字だか知る由もない。ヘブライ文では大洪水前を千六百五十六年となし、七十人譯では二千二百四十二年とし、サマリア文では千三百七年としてある。後の人が筆を加へて居ることは明だが、それは如何なる程度のものであるか、原文は果して何れであるか、到底解決の方法がない。

カトリック教會では、夫に就いて各人の自由解說に托せて何とも干涉しない。教會常用の聖書たる通俗譯はヘブライ文に從ひ、ローマの殉教錄は七十人譯の數字を採つて居る。既に聖オグスチヌスも曰つて居る如く、七十人譯は組織的に修正を施したものらしく思はれる、と云ふのは、長男が生れた時の各太祖の年齡をば皆百年づゝ加へて居る。たゞマッサレムとラメクだけを除いて居るが、あれは

然うしなければ、マツサレムは大洪水後、なほ十四年間も生存へる譯になるからである。然しへブライ文の數字も變である。夫れに依ると、アダムはノエの生れる一二二年前に死し、セトはノエの誕生十年前に死んで居り、ノエが死んだ時、アブラハムは五十八歳になつて居る。何うも眞らしく思はれない所から、七十人譯は各人の年を百年づゝ加へたものではないかと云ふことである。

(b)—同じく聖書に數へ上げてある太祖の系圖も完全なものであるか、脱落がないだらうか、夫れも判然しない。聖書の系圖には往々中間の重要ならざる人名を遺してある。假へばダウイド王の財産を掌つて居たスバエル(Subael)をば、「モイゼの子ゼルソン(Gerson)の子」(歴代誌略前二六ノ二四)と云つてある。實はモイゼから幾代も幾代も後の人であるのに、猶以て「子」と稱してある所から見ると、子と云ふ文字は、遠い子孫にも應用するのであつたことが分る。同じく「生む」(Yalad)と云ふ文字も、父子の間にばかりは用ゐてない、マテオの遺せしキリストの系圖中にも、「ヨラムはオジアを生む」(マテオ一ノ八)とあるが、その實、ヨラムはオジアの曾祖父で、其間にオコジア、ヨアス、アマジアの三人を拔いてある。尤も創世記の系圖には長男が父となつた年を一々明記してあるので、そんな脱落なぞあらうとは思はれないが、然し「アルファクサドは三十五歳にしてサレを生む」(創世一一ノ一二)とあるのに、聖ルカはキリストの系圖中に、「サレ、その父はカイナン、その父はアルファクサド」(ルカ三ノ三六)と記して居る。七十人譯も同じくさうなつて居る。たゞこの一ケ所だけれども、之によつて見ると、他にも脱落があり得ると斷じても、差支ないじやあるまいか。

一體嚴密な年表を作るのは聖書の目的ではない。ナベンバウエル師(P. Knabenbauer)も曰つて居る如く、「聖書の史傳は救靈の歴史である、神の攝理の次第と、そが各時代を通じて如何に實現されたかを傳へるのがその唯一の目的である。それは年代と云ふ問題には全く關係がなく、隨つて今日我等の頭で考へる樣な年代表を要しなかつたので、この點に就いて科學と衝突すべき譯は少もない。是は聖書學者の間に全く自由問題として取扱はれてあるのだ。要するに舊來の傳統的解說は襲用し難いがさらばとて人類の發生を幾十万年の遠きに置くと云ふ馬鹿に誇張した說も取るに足りない。昔の短縮せる解說が信條でなかつた如く、現代の幾十万年說も決して科學ではない。」

第二期　アブラハムの召出よりモイゼの誕生まで

第八章　神の選民

(1)イスラエルの召出—是まで聖書は人類全般に關する出來事をかい摘んで物語つたものだが、是に至つて突然筆を改めて、特選民族の歴史に移つて居る。

抑もセムがノエより授かつた祝福は、その子孫たる一般セム族に施されたものゝ如く思はれるが、實はさうでなく、たゞセム族中の一家族が之を忝うし、その家族によつて、セムは「蛇の頭を踏み碎くべき勝利者」の祖先となるの光榮を擅にしたのである。然しこの祝福がそんなに狹い範圍内に局限されたのは、全く一時的のことで、神はやがてその一家を大なる民族となし、右の祝福中に含まれてある

靈的富を豊に蒙らしめ給うた。救世の準備は一歩を進めて新過程に入り、イスラエル民族は神の選民となつた。

(2)召出の結果—イスラエル民族が神の選民となりしその結果は非常に重大であつた。神はすべての民の中に獨りイスラエルを拔擢して己が選みの民となし、之と密接な關係を結び、イスラエルを「己が特殊の民」(申命記七ノ六)と呼び「われ汝等を取りて我民となし、汝等の神となるべし」(出エジプト六ノ七)とも聲明し給うた。

神は一個の契約を以てこの關係を固め、双方ともそれ〴〵或種の責任を負擔すべくお定めになつた。イスラエル民は神の御誡を忠實に守り、是まで他民族が拒んで獻げなかつた禮拜を神に獻げ、眞の信仰と、神の思召を果すことゝを以てメッシア（救世主）の御降臨を待つべしと誓ひ、神は亦特別の攝理を以てイスラエルの上に愛護を垂れ、自らイスラエルの慈父となり、「彼等を造り、養ひ、育て……その眼の瞳子の如く護るべし」(申命記三二ノ六—一〇)と約束し給うた。

今神のイスラエルに對し給ふ攝理は果して那邊に存するのであつたかと云ふに、それは心靈、物質兩方面に及び、心靈上から云ふと、最初の天啓—アダムやノエ等の賜はつた天啓—をそのまゝ保全せしめるのみならず、また新に、救世主とその救世の大事業に關する天啓とを彼等に寄托し給うたのである。

從つて「救世主はイスラエルから出給ふべきである」(ローマ書九ノ五)、先づイスラエル民に救ひの恵を蒙らしめ然る後彼等を介して異邦人にもその恵を施し給はねばならぬはずであつた。キリストがカナアンの婦人に向ひ、「我はたゞイスラエルの迷へる羊に遣されしのみ」(マチオ一五ノ二四)と宣ひ、又サマリアの婦人にも、「救ひはユデアの中より出づ」(ヨハネ四ノ二二)と仰せられたのを以ても知られよう。

物質上から見ても、イスラエル民は神の特別の攝理を忝うした。神は偶像教徒の間より彼等を選り出して、之に「乳と蜜の流れる立派な國」(出エジプト記三ノ八)をお約束になつた。隨つてイスラエル民族は國内に在つては神の祝福を溢れんばかりに蒙り、外敵にたいしても特別の御保護を忝うし得たのである。

なほ神は彼等と共に在し、彼等の間にその住居を定め、自ら彼等の王とも、政治上、宗教上の立法者ともなりて、彼等を統治して下さる。彼等の守るべき律法が直接に神より賜はつたと云ふ點は、その如何に勝れて神聖なるものであるかと云ふことを證するに餘あるであらう。

(3)當時の偶像崇拜者—神がイスラエルを選拔し給うた結果、イスラエル民ならざる偶像崇拜者は當然除外されて、イスラエルの享有せし特典に與ることが出來なくなつた譯である。然し除外されたとは云へ全く見限られて了つたのではない。たゞその選民にたいし給へるほどの異常特別な手段を用ゐてまで、彼等に眞理と義しきことを失はしめざる樣、お計ひにならなかつたと云ふに過ぎない。でも異邦人が斯る劣勢の地位に在つたのは救世の準備期—舊約時代—の間のみで、一たび救世の大事業が全うせられるや、異邦人もイスラエル人と等しく、その恩惠に浴することが出來た。神は最初アブラハムを召出し給うた時からこの旨を明にして、「汝によりて地上のすべての民は祝せられるであらう」(創世記一二ノ三)と曰う

た。その後も預言者等は絶ゑずこの眞理を叫んで止まなかつた。

「蓋し萬民の主は唯一に在して頼み奉る一切の人にたいして豊に在せば、ユデア人とギリシア人との別あることなし。故に誰にもあれ、主の御名を呼び頼む人は救はるべし」(ロ一ノ一二)

されば異邦人と雖もまた救世の御恵を蒙るべく準備しなければならなかつた。彼等が道徳上、頽廢の深淵に沈んだのも、今から思へば、この準備を助ける一個の手段となつた樣なもので、彼等は自己の慘め極まる狀態に愛想を盡かし、その狀態より脱出たいといふ熱い望に燃ゑ、喜んで救靈の話に耳を傾けるに至つた。イスラエル人が諸國に離散してからは、之と頻繁に連絡を通じ、關係を結ぶ機會を得、隨つて救世に關する神の聖旨の那邊に在るかを知り、其方からも多少の準備が出來て居たのである。

終に除外されて居る間と雖も、全然見限られ終つたのではない。最初の天啓はすべての民族に共通なので、それを保持することが出來た上に、なほ理性の光を失つて居なかつたので、容易に眞の神を知り得るのであつた(ロ一ノ一九―二〇)良心の聲によつて絶ゑず神の律法を聞くことも出來た。「神は前代(舊約時代)に於て萬民が己々の道を歩むをさし措き給ひしも、自ら證明し給はざることなく、天より雨を降らし、實の季節を與へ、食物と欣喜とを以て各の心を滿たしめ」(使徒一四ノ一六―一七)以て感謝と愛を起さしめ給うた。異邦人と雖も、原罪自罪を赦される爲に必要な聖寵は必ず賜はつたはずである。「神はすべての人の救はれて、眞理を知るに至らんことを欲し給ふ」(一チモテオ前二ノ四)、たゞ夫れが如何なる性質のものであつたか、我等には判然しないと云ふのみである。

だから異邦人の間にも、眞の神を知つたものゝ居たことは爭ふべからざる事實で、メルクセデクはカム族の人であり、モイゼの舅のエトロはマヂアン人であり、ヨブの如く感ずべき德の鑑を後世に遺せし聖人すら無いではなかつた。

(4)この期の區分―神はその民を幼少の時から歩一歩、順を追つて養成、訓導し給うた。先づアブラハムの召出からヤコブの死に至るまではイスラエル民族の搖籃期で、天啓の歴史は太祖の一家族内に展開した。この民の祖たるべく選れたのがアブラハムで、彼はイスラエルと云ふ大木の根株であつた。その家族にも二代の間は削除が行はれ、少し見劣のせられるイスマエルとエザウの傍系は切り棄てられた。孫のヤコブが本系となつてイスラエル十二族を分出せしめたのである。

次にヤコブの死よりモイゼまで(創世記五〇出エジプト記二)は、神の選民の大發展を遂げし期間であるが、然しこの間に起りし個々の出來事は救世の歴史に格別重要でなかつたので、聖書は殆どすべてを沈默裡に葬り去つて居る。

(5)駁訓―イスラエル民が神に選まれたのは、それこそ世に二つとなき御恵を忝うしたのである。然し我等キリスト信者が信仰に召入れられたのは、より大きな御恵ではあるまいか。イスラエル民が、

「我れこそ神の選民よ」と大きな顔をしたとすれば、我等も「神の愛子」の肩書を以て何よりの誇とすべきではないだらうか。

參考（1）聖地の地理一斑

（イ）名稱――イスラエル民族の活躍せし國土は種々の名稱を持つて居る。アブラハム時代に住んで居た民族の名に因みて、「カナアン」と呼ばれ、後之に代りし住民の名を取つて、「イスラエルの地」とも稱された。今日では一般に「パレスチナ」(Palæstina) と云つて居るが、それは聖書に出て居る名ではない。パレスチナは「フイリスチン人の國―Philistia」と云ふ意味で、實は地中海に沿へる西邊の地を呼んだものである。ヨゼフス(Josephus)、プトレマイオス(Ptolemaios)、フイロン(Philon)等の著作家が之をカナアン全土に應用してから、終に今日の如き一般の通り名となつたのである。その地は救世の歴史に深い關係を有する所から、「約束の地」(ヘブライ一一ノ九) と呼ばれ、舊新約聖史の舞臺であつた所から、「聖地」(ザカリア二ノ一三) と稱され、楔狀文獻にはアムリ(Amurri)、又はアムル(Amurru) と呼ばれてある。西の國を意味し、バビロン方面から見て西に當るのでさう呼んだものであらうか。

聖地の境界は一定して居ない。アブラハムに約束された地はカナアンのみであつたが、イスラエル人が始めて之を占領した時は、より廣大であつた。然したゞカナアンの一部しか占有しない時もあるにはあつたのである。

カナアンの地は、東をアラビア及びシリアの砂漠に境し、西を地中海に接して居る。北と南は、民數記(三三ノ三)ヨシヤエ書(一五)に明示してあるけれども、その地名を今日の夫に引合せることが困難なので何の邊まで及んで居たか斷定し難い。然し北はリバノン山(Liban)やアンチリバノン山(Anti-Liban)を境とし、南はスル(Sur)の荒野に限られて居たと思へば大差ないであらう。聖書には南北の境を示す爲、「ダン(Dan)よりベルサベヤ(Bersabee)に至るまで」とよく云つてある。さすれば北緯三十一度の邊から大凡三十三度二十分に及び、長さは大凡二百三十キロメートル、幅は最も廣い所で百五十キロメートル、總面積は二万四千乃至二万五千方キロメートルに過ぎないのであつた。

（ロ）ヨルダン河――が縱に國の中央を貫き、國を東と西に等分して居る。リバノン山とアンチリバノン山の支脈が河の兩岸に沿つて南に走り、遠くシナイ半島に及び、山脈の西部にはヨルダン平野と地中海沿岸の平野とを展開さして居る。

西パレスチナの山々はエズラエル (Jezrael) の平野によつて二分せられ、北なるをネフタリの山(Nephthali―後ではガレリアの山) と稱し、最高一千メートルに及んで居るが、次第にエズラエルの平野に向つて傾斜し、平野の中にタボル山(Thabor) がくつきりと突つ起つて、この地方の名山をなして居る。平野の南に連れる山脈は北部をエフライムの山(Ephraim)、南部をユダの山(Juda) と稱するのであつたが、後ではサマリアの山、ユデアの山と呼ばれる樣になつた。

是等の山脈は西北にカルメル山(Carmel)、東北にゼルボエ(Gelboe) の丘陵となり、南に走るに隨つて次第に高度を增し、ヘブロン(Hebron) では一千メートルに達し、夫から漸次先下りとなり、荒野の中にその姿を失つて居る。一體に圓味を帶びた丘陵の連り亘れるもので表土は極めて淺いにも拘らず、麥や橄欖や無花果等がよく茂つて居る。南に行けば行くほど山はます〳〵禿山となり、谷に水流がなく、土地は乾きに乾いて不毛の荒地と化し去つて來る。山脈の頂上は地中海よりも近くヨルダン河

に迫り、しかも河に面した方は急坂をなして居るが、地中海に向いた面は緩い傾斜をなし、徐々に廣漠たる平野に消え失せて居る。この山頂こそ實に聖地の動脈で、國道は皆この山頂を傳うて四走し、重要な都市もまた多く山中に位置を占めて居るのである。

エフライムの山は殆どエルザレムまで連つて居るが、その中にエバル(Ebal)とガリジム(Garizim)の二峰があり、二峰の間にシケム(Sichem)がある。シケムはアブラハムも一時足を駐めた所で、聖地の心臓とも謂ふべきものだ。國がユダとイスラエルに分裂した際、イスラエル王エロボアム(Jeroboam)は一時之に都したこともあつた。

ユダの山中にはエルザレム(Jerusalem)があり、ヘブロン(Heberon)がある。エルザレムはダウィド(David)が始めて國都と奠めて以來、宗教上にも、政治上にも樞要な地位を失つたことがない。ヘブロンはアブラハム、イザアク、ヤコブの居住した遺跡と、彼等の墳墓とを以てその名が夙に高い。南の端にはベルサベエ(Bersabee)と稱する町がある。

エズラエルの平野は三角形をなし、西をカルメル山、南をゼルボエの丘陵、北をガリレアの山に包まれて居る。この平野はキソン河(Cison)にその中央を貫流され、地味が極めて肥沃だ。エズラエルとは「神が蒔き給ふ」と云ふ意味で、その如何に肥沃豐饒なるかはその名稱が雄辯に物語つて居るのである。エズラエルは別にエスドレロン(Esdrelon)の平野とか、マジエッド(Mageddo)の平野とか、或は單に大平野と云ふ名をも持つて居る。龍攘虎擊の大活劇が演ぜられし古戰場の跡も多くその中に散見する。

地中海沿岸の平野はカルメル山によつて二分せられ、北部はアッコの平野(Plaine d'Acco)と呼ばれ、南部からすると遙に狹小である。南部はサロン平野(Plaine de Saron)と稱し、カルメル山からヨッペ(Joppe)に及び、ヨッペから南はシエフエラの平原(Hasch-Schephela)と云ひ、同じく豐饒である。

(八)ヨルダンの流域(基督時代にはプイリッポのセザレアと稱す)—ヨルダンの源流はヘルモン山のハスバニ(Hasbani)とバニアス(Banias—この三つで、何れも水量が豐富である。ヘルモン山の麓に於ける水面は地中海より五百六十三メートルの高きに在るが、メロン湖(Meron)に入つた邊は地中海と同じ高さになり、それを出ると、谷が深く穿たれて地中に沒入し、メロン湖の南四里にしてゼネサレト湖(Genesareth)に入つた時は、早や海面下二百十二メートルに降り、湖を出ると谷はいよ〳〵窄く、エリコ(Jericho)の南、死海に流れ込む時は、もう海面から三百九十二メートルの下に在る。百五十キロメートルを下る間に高低の差が大凡そ一千メートルからあるので、その流が如何に急なるかは察するに難からずであらう。

ヨルダン河の谷は世界の如何なる溪谷とも似た所がない。他の溪谷は水流の爲に穿たれたものであるが、ヨルダン河のは地質時代に生じた龜裂の跡である。北部は頗る狹小であるが、南に下るに隨ひだん〳〵廣くなり、エリコ附近では三里四里の廣きに達して居る。この廣い盆地の中に深い〳〵ヨルダンの河床が穿たれてあるのだ。流は紆餘曲折して居るので、ゼネサレット湖から死海まで直徑百キロメートルに過ぎないが、河の長さは三百キロメートルに及んで居る。水量は季節によつて異る、乾燥期(四月から十月まで)、殊に秋になると、幾個所も徒渉し得られる。その徒渉場の中でもエリコの前面とエズラエル平原の前面とに在るのは史上に名高い。

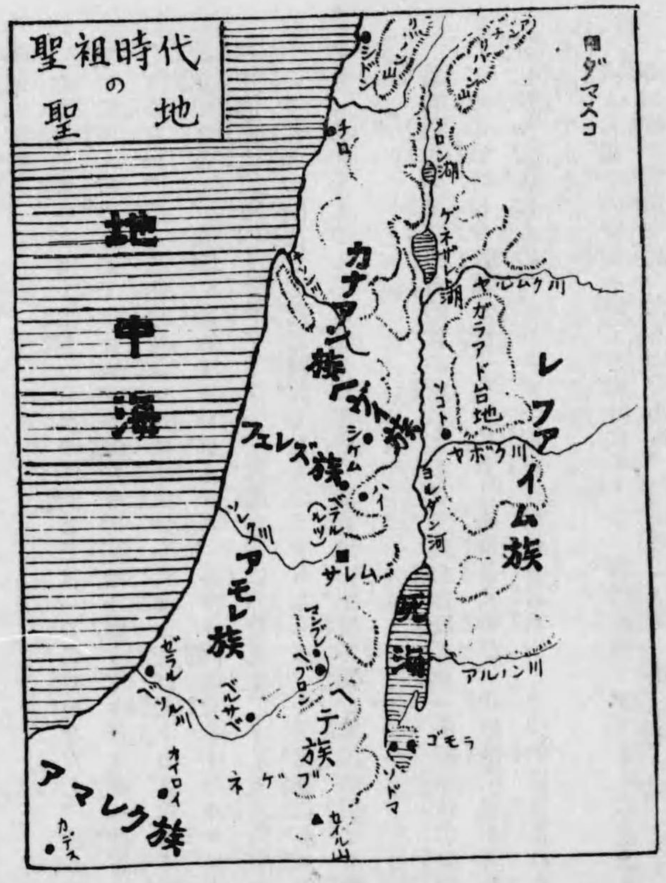
ヨルダンの水は深い谷底を流れるので、灌漑に用ゐられず、隨つてその流域は乾燥不毛の地で健康に適しない。たゞゼネサレト湖邊とエリコの附近に沃土を見るのみである。聖書にはヨルダンの平原をアラバ（Arâbâh—荒野）と呼んである。同じく死海の南から急に五百メートルの高さに登り、それから遞降してエラト灣（Elath）（後のアカバ）にその姿を沒して居る窪地を呼ぶにも同じ語を用ゐてある。然し今日アラビア人はヨルダンの溪谷を呼ぶにエル—ゴル（El-Ghor—龜裂）の名を以てし、死海の南の窪地だけをアラバと呼んで居る。

（二）死海—ヨルダンの水の流れ込む湖を聖書には「塩の海」（創世記一四ノ三）、「アラバの海」（申命記五ノ一七）、「東の海」（エゼキエル四七ノ一八）と云つてある、ヨゼフスは「アスファルトの海」と稱し、アラビア人は「Bahr Luth—ロトの海」と呼んで居る。一般に「死海」と呼ぶのは、餘り塩分が多くて魚類の生息に適せず、生物を一つも見ないからである。

死海は長さが六〇キロメートル、幅は中央部の廣い所で十七キロメートルで、海面下三百九十四メートルに在り、南と北は幅員と云ひ、水深と云ひ全く異つて居る。南北の境目は水面が縊れて急に狹く、舌の形をなして居る所よりして、リサン（Lisan—舌）（ヨズエ五ノ二）と呼ばれて居る。南部は一種の入江見た樣で、水深僅に四メートル乃至半メートルに過ぎない。却つて北部は幅も廣く、水深は三百メートル乃至四百メートルにも及んで居る。

死海の水は普通の海水より四五倍も多く塩分を含み、爲に比重は平均一、二〇〇。生卵を入れると三分の一は水上に浮び上る程だ。死海は排水口を持たない。毎日ヨルダンから流れ込む水量は大凡六百万トンに及び、その他の河川からも相當の流込みがあるにも拘らず、湖面が海面下三百九十四メートルも窪つて居る所から、炎熱ことに甚しく（攝氏四〇乃至五〇）それだけ蒸發も盛なるが故に決して汎濫する憂がない。死海の水が多量の塩分を含み、その比重も頗る重いのは全く之が爲である。今はヨルダン河口からリサンまで汽船が通つて居る。

死海でもヨルダン沿岸の龜裂でも、ソドマ、ゴモラ等の滅亡した跡で、もと〳〵ヨルダンの水はエラト灣に注いで居たものだ。尤も死海とエラト灣との間には海拔二百四十メートルの丘陵が横つて居るが、それは死海の陷沒した際、隆起したものとすれば立派に說明が出來る。と云ふ學者がある。



然しコント・ド・ベルトウ（Comte de Bertou）、フラアス（Fraas）、ロビンソン（Rohinson）、セップ（Sepp）等の自然科學者の說に從ひ、今日多くのカトリック註釋家は「ソドマ卽ち死海說」に反對を唱へて居る。

なるほど大ヘルモン山麓からエラト灣までは一帶の窪地をなし、延長四百四十キロメートル（百十里）に及んで居るので、ヨルダン河がその窪地を傳うてエラト灣へ注ぎ込んだものと思へば思はれぬこともない。然しこの窪地はヘルモン山から死海までは先下りとなつて居るが、死海を出ると次第に先上りとなり、死海の南百十キロメートル、エラト灣の北七十一キロメートルの所が分水嶺となり、地中海面上二百四十キロメートル、死海からは六百三十二メートルの高きに達して居る。もしこの分水嶺が死海の陷沒せし際に隆起したものとするならば、その地層に多大の變位を來さねばならぬはずだが、それらしきものは見られない。土質は白堊層で舊い水流の痕とも謂ふべきものを一つも止めて居ない。

實際近代の地質學者の言ふ所によると、死海は既に第三紀鮮新代の終頃から存在して居たもので、たゞその當時は今日ほど深くない代りに隨分長く伸び、北は遙にゼネサレト湖に連り、南はアラバの谷に及んで居たものだ。ヨルダン流域に於ける岩石や、その中に含まれる貝殼の跡などから以て見ても明である。

夫から幾多の變遷を經て有史時代に入り、湖の南端シッディム（Siddim）の低窪部にソドマ、ゴモラ等の町が繁榮を誇つたものである。低窪部には瀝青（アスフワルト）の坑が多くあつた（創世記一四ノ一〇）と云ふのだから、硫黃と火が降つて來た時、その坑に火が燃え移つて爆發し、爲に陷沒して死海の一部を爲すに至つたもので、リサン以南の淺い部がその跡に相違ない。

（ホ）ヨルダン河東の山々—アンチリバノン山は南走してヨルダン河東に至り、廣い大きな臺地となつて居る。分つて三つとなす、東北をバザン（Basan）と稱し、火山地帶で頗る牧草に富んで居る。次をガラアド（Galaad）と稱し、こゝにも牧草がよく繁茂する。更にその南がモアブの山で、アバリム（Abarim）とも稱し、ちやうど死海の東に位する。三條の河がこの臺地を橫斷して居る。ヒエロマクス（Hieromax或はYarmouk）と、ヤボク（Jaboc）はヨルダンに合流し、アルノン（Arnon）は死海に注いで居る。

（ヘ）救世事業から見ての聖地—イスラエル民の歷史は救世に關する神の御設計と深い關係があり、固より自然的發展の法則に支配されぬではないが、主として神の超自然的干涉の結果に出るのであつた。その住居に充てられた國土も、この兩個の特性によく嵌つたもので、先づ武器を執つて征服しなければならぬのであつたが、然し神は之を占領するのに特別の御保護を約し給ひ、一旦占領した上では永く之を領有し得べしと保證して下さつた。

隨つて神はこの國土を「我有なり」（レウイ記二五ノ二三）と稱し給うた。しかもこの地は餘程自然的恩惠に富んだもので、聖書にも幾回もなく、「善き廣き地…乳と蜜の流るゝ地」（エジプト三ノ八）「すべての地の中の美しきもの」（エゼキエル二〇ノ六）と呼んである。なほカナアンの國土の勝れて比びないのは、天國の象徵であり、その地味の豐饒さは聖寵と天國特有の超自然的寶の豐多なるを描き出して見せたかの樣であつた。

斯く地味は肥沃で、氣候も温和であつたことは云へ、然しこの地は旱魃だの、蝗だの、さう云ふ被害が少くはなく、政治上から云ふこと、世界の覇權を握りし强大な敵國の侵略に暴露されてあつた。是こそ物質的發展にせよ、歷史的向上にせよ、何れも神の特別保護に由るのだと云ふことを國民の頭腦に深く染み込ませたい神の思召に出たものに外ならぬ。隨つてイスラエルが神の恩惠を忘れ、一から十まで神に從屬すべきはずのものたることを輕視するに至るや、神は是等の破壞成分を道具に用つて國民を罰し、彼等を正しき道に引戻して眞理を認めしめ給ふのであつた。

なほ神がこの地をイスラエルに約束し給うたのは、彼等の精神的使命を全うするのに最もよく適して居たからである。先づイスラエル民は唯一神の信仰、純良なる風儀、救世主へのあこがれを誤りなく保つて行かねばならぬ。それには土地がなるべく周圍の異教民と懸け離れ、その惡影響を蒙る憂がないのを必須條件とする。然るにカナアンの地は北にリバノン、アンチリバンの山脈が連亙し、東と南にアラビアの砂漠が横はり、西には地中海が盛に激浪を擧げて居る。しかもその地中海の沿岸にはフエニキア人だの、フイリスチン人だのが割據して、イスラエル人の海外進出を許さないと云ふ鹽梅で、全く四境を塞がれて居たのである。然し國內は非常に地味が豐饒なので、他國と交らなくても生活に困る樣な憂もなく、立派に孤立して行かれたのである。

（ト）―だがイスラエルの使命は來るべき救世の惠を自分だけに保有しないで、之を全世界に配與するに在つた。イザヤは曰つて居る。

「汝が幕屋の中を廣くし、汝が住ひの幕を張り擴げて吝むこと勿れ。汝の綱を長くし、汝の杙を堅くせよ。そは汝が右に左に擴がり、汝の裔は諸の國を得、荒れ果てたる邑をも住むべき所となさしむべければなり」（イザヤ五四ノ二ノ三）と。

約束の地がアジア、アフリカ、ヨーロッパの交叉點に在り、殆ど世界の中心に位して居たのは、この目的を貫くのに全く誂向きであつた。

實にイスラエル民はバビロンに囚擒となるまで、他の世界と懸け離れて居たことは云へ、その國土が天下の心臟とも云ふべき便利な位置にあつた丈けに、絕えず四方の民に向つて神の天啓を宣傳することが出來た。隨つて如何なる國民もイスラエルの神なるヤウエ、その不可抗的大能、その底知れぬ哀憐、その恐るべき正義等を悟るの機會を得られた、神がイスラエル國內で行ひ給ふことは夫れこそ諸外國の目の前で行ひ給ふ樣な譯であつたのである。

殊にキリストの御降誕前後になると、是まで四方の出口を塞いで居た敵國は皆ローマ帝國に併呑され、關門は自づと撤去され終つたので、主の御敎を八方に傳へて、全世界の人々を救靈の道へ引入れるには、陸から行かうと海から出ようと、是ほど便利な國はなかつたのである。

（2）カナアンの住民

聖地の原住民の歷史は判然しない。一番舊くから住んで居た民族はカドモニ族（Cadmonites）、ケニ族（Qénites）、ヘウイ族（Heveens）、ラファイムス族（Raphaim）、エナキム族（Enacim）、エミム族（Emim）、ゾムゾニム族（Zomzomnim）等であつた。彼等はセム族であつたらしいと云ふのだが、それとても確言は出來ない。

ギリシアのヘロドトス（Herodotus）やストラボン（Strabon「地理」學者）の書き遺せし傳說によつて見ると、

ペルシア灣の邊に居住せしカナアン族は紀元前三千年の頃、大移動を起し地中海沿岸はフエニキアに達して一都を築き、之をシドン(Sidon)と名づけた。シドンとは魚の義で、漁利の多い所から付けた名であるとか。なほ下つてヨルダン河西の地に占據したものもあつたので、一般に彼の界隈をカナアンと稱するに至つた。カナアン族が侵入して來るや原住民は一部は慘滅され、一部は征服者に併合、同化され終つた。

早やアブラハムの時代にもカナアン族は幾多の小邦に分れて相獨立せるのであつたが、就中最も勢力のあつたのはアモレ族で、後日彼等の一部はヨルダン河東に强大な王國を築き、その領域はアルノン河より大ヘルモン山に及んで居た。否、テル・エル・アマルナ文獻によつて見ると、彼等は元々リバノン山地方に國を樹てゝ居たものであるが、小アジア方面に國せるヒッチ族の壓迫を蒙り、次第に南下してカナアンに根據を据ゑたものであつたらしい。

ヒッチ族とは創世記の所謂ヘテ族と同じで、その一支族はバレスチナの南部、殊にヘブロン地方に居住したものであつた。アブラハムは墓地としてマクペラ(Macpela)の洞窟をヘテ族から購入し、エザウムもヘテ族の娘を妻に娶つて居る。王政時代に入ると、ヘテ人を以て尙武の氣象に富める大民族と描いてある。(列王記前三ノ二九、全後七ノ六―七)、實際ヘテ族は遼遠の昔から小アジア及び上メソポタミア地方に跨れる廣大な王國を築いたもので、エジプト文獻にはキッティ(Kitti)或はケタス(Kretas)と呼ばれ、楔狀文獻にはハッティ(Hatti)と稱されて居る。彼等の都城で歷史にその名を遺せるのは、シリアなるオロンテ河上(Oronte)のカデス(Qades)と、エウフラト河畔のカルカミス(Karkamish)であつた。ヘテ族は隨分進んだ文化に達し、獨特の象形文字を有して居たが、未だに之を讀破する鍵が發見されない。

ヘテ族は長くエジプト人と雌雄を爭つて相下らなかつたものだ。然しラムセス二世の時、ヘテ王の女を娶りて、兩國が平和に局を結んだ。アッシリア王の爲にも危險な强敵であつたが、紀元前七百十七年アッシリアのサルゴン王はカルカミスを陷れ、ヘテの勢力を粉碎し終つた。

創世記に出て居るヘテ族はエジプト遠征に出掛けた將卒の一部がそのまゝカナアンに居殘つたものではあるまいかと云ふことだ。

カナアンの西南に住んで居た民族はフイリスチン人(Philistins)で、彼等はカムの子スメズライムに出で、エジプトは三角洲の東なるカスルイム(Kasluim)から移住したのだ、否、クレト島(Crete)から來たのだと云ひ、諸說紛々として何れも斷定されない。アッカロン(Accaron)、ゼト(Geth)、アゾト(Azot)、アスカロン(Ascalon)、ガザ(Gaza)の五都には夫れぞれ獨立の君主があつて、之を統御したものである。

(3) テル、エル、アマルナ文獻

(イ)―一八八八年の末、エジプトのテル・エル・アマルナ(Tell-el-Amarna(カイロ府より三百キロメートル南に位す))の附近で、バビロン、アッシリア、バレスチナ等の諸王が、紀元前大凡そ一四一〇年から一三五〇年の間にエジプト王アメノフイス(Amenophis)三世、及びその子アメノフイス四世と交換した三百五十通からの外交文書が發掘された。當時外交には主としてバビロン語を用ひ、何れの國でも楔狀文に通じた秘書官

を置いて居たもので、アマルナ文献もアルザワ語(Arzava)(小アジアは後シリシアの邊)の文書二通と、ミタンニ(Mitanni)語の一通を除くと、皆バビロン語で綴り、例の粘土版に楔狀形の文字を彫り付けたものである。エジプト王の發した文書の中で獨立國の君主、例へばバビロン王に宛てたのは、「我兄弟」と呼び、バビロン王もまた同じくエジプト王を「我兄弟」と呼んで居る。是は當時の習慣であつたと見ゐ、チロの王ヒラム(Hiram)がサロモン(Salomon)を呼んで、「我兄弟」(列王記前二九ノ一三)と云ひ、シリア王ベン

アマルナ文献

・ハダト(Ben-Hadat)もまたアカブ(Achab)を「我兄弟」(二〇—三上)と呼んで居る。

文書の大部分はシリア、及びパレスチナの諸王が宗主たるエジプト王に呈したもので、その中にはビブロス(Bybloa)、ベイルト(Beirouth)、シドン、チロ、アッカ、アスカロン等の海港、內地ではハゾル(Hazor)、マジッダ(Magidda—(後のマゼッド))、ウルサリム(Urusalim—(後のエルサレム))、ラキシ(Lakishi)等のが見受けられる。しかも夫れには告訴狀があり、警報があり、忠誠を誓ふのや、不平を訴へるのやがあり、隨分相矛盾、撞着して居るので、互に照合せて眞相を捉へるより外はないが、然し之によつて紀元前十四世紀の前半、イスラエル人が征服する一世紀前頃のカナアン地方が如何なる狀況に在りしかを詳にし、舊約史の研究に少からぬ光明を攝むことが出來るのである。

(ロ)アマルナ文獻上より見た地理—聖書にはイスラエル人が落着く前、聖地に住んで居た國民を、アモレ人ともカナアン人とも稱してある。この名稱が地理上の實際に當れることは、アマルナ文獻によつて明にされた。當時フエニキア及びシリアの一部をアムルー(Amurru-)と云ひ、その南をキナニ(Kinahni)と稱してある。アムルーは國名で、それからして國民をアモレ人と稱したのだ。キナニはヘブレア語のケナアン(Kenàan)、我等の所謂カナアンに外ならぬ。アムルー國は初め北に廣く遠く延び、エウフラト河、及びシリア砂漠の西に位する地方をも總稱したものであるが、後で小アジア方面から新民族、殊にヒッチ族(族ヘテ)の侵略し來るや次第に南方へ壓迫され、紀元前十四世紀の初頭になると、アムルーの國は北はアルワダ島(Arwada)、オロンテ河上のカデス(Qades)を越ゑず、東は活潑にして冒險の氣性に富めるドウマスク(Dumashk—(後のダマスコ))に遮られ、南はエスドレロンの平野を以てキナニ(カナアン)と境して居るのであつた。ヨズエの頃、ヨルダン河の東にヘセボン(Hesebon)とバサン(Basan)の二國を樹てゝ居たのも、このアモレー族であつたことは前にも一言した通りだ。

キナニ(カナアン)はそれより以南、エジプトの急流(Wadi-el-Arish)に至り、東はヨルダン河と死海に限られたもので、當時フイリスチン人は未だ地中海沿岸に强固な國を樹てゝ居なかつたらしい。

アマルナ文献時代の西アジア

(ナ)アマルナ文献より見た歴史—紀元前十四世紀の初に當つて、西アジアから北アフリカに亘つて覇を稱して居た國々はニール河畔のエジプト、チグリ、エウフラト流域のバビロン、ミタンニ、アッシリア、及びアジアミ北シリアに亘れるヒッチ(文獻には Hattou-卽ちヘテ族の國とも書いてある)の五國であつた、五國の間には互に外交關係、互親條約、協商等が結ばれ、書信の往復、方物の交換、結婚政略等が盛に行はれたものである。五國の周圍には餘り基礎の强固ならざるシリシアのアルザワ國(Arzawa)、キプロス島のアラシア國(Alashia)の如きがあり、シリアに國せるカデスやダマスコ等もまた機を見て獨立せんと欲し、エジプト王に直屬せるアルムー、キナニの爲には少からぬ憂慮の種子であつた。

エジプトがシリア方面に進出し、南はエジプトの急流から北はオロンテ盆地に至るまで、地中海沿岸一帶の地をその版圖となしたのは、第十八王系のトウトメス三世(Toutmès)で、彼は在位五十二年(一五〇〇—一四四八)の間に幾回か師を率ゐてアジアに遠征を試み、所在に蠢動せる諸王侯を威服懾柔した。固よりバビロン王とは婚を通じ、互に親交を固くして居たので、全く東顧の憂とてはなかつたのである。

當時メソポタミア方面の强國と云へばバビロンで、アッシリアの如きはバビロンに臣禮を執つて居た位、全く言ふに足りなかつた。却つて十五世紀の後半から十四世紀の初頭にかけて、北メソポタミアに雄視し、バビロンと頡抗し得るのは、ミタンニ國(Mitanni)であつた。ミタンニ人はセム族でない。多分アリアン族(ヤフエト族と同じ)らしいと云ふのだが、夙にエウフラトとチグリス河の間に大發展を遂げ、國王シャウシャタル(Shaoushatar)は紀元前一四三〇年頃、上チギリス一帶の地に覇權を確立し、ニニヴまでもその掌中に收め、エジプトには歴代その女を進めて親交を重ねて居たものである。獨りエ

ジプトの爲に油斷のならぬ强敵は、小アジアから西メソポタミア、北シリアにかけて廣大な版圖を包有せるヒッチ國であつた。

彼等は二世紀前から領土の擴張を謀り、一五二六年には一時バビロンを征服して、有名なハムラビ(Hammurabi)を出せし王朝をも覆した。ミタンニを向ふに廻して絶えず干戈を交へ、互に勝敗ありしも、エウフラト河上のカルカミス(Karkamish)や、シリアのアレプ(Alep)の二要害だけは飽まで死守して失はなかつた。彼等はミタンニと交戰寧日なき間にも、また次第に南下してアムルー國を侵し、オロンテ河上のカデスを取り、國境をリバノン山まで擴張した。キナニ地方の諸王は連りに急をエジプトに報じて、その援助を求めて居る。

その頃アムルー國内には、アブデイーアシルチ(Abdi-Ashirti)、及びその子アジルー(Azirou)が蹶起して ヒッチ國の指嗾の下に國民運動を起し、ハビリ(Habiri—同盟者の義)と稱する暴戾掠奪至らざる所なき徒輩と結んで所在を横行し、連りにエジプト黨を擊破した。

キナニでも ラバヤ(Labaya)と稱するものが同樣の國民運動を起し、ハビリの援助を得て各地を抄掠し、マジッダ(Magidda)を圍んだが、却つてマジッダの城主に生擒にされて命を失つた。然しその子は父の志を襲つて獨立運動をつゞけ、ウルサリム(所謂エルサレム)王がエジプト黨を組織して頑强に抵抗を試みたにも拘らず、キナニの諸王はガヅリ(Gazri)、アスカラナ(Asqalana)、ラキシ(Lakishi)等を始め、擧つて叛き去り、終にはセリ(Sheri—卽ちSeir-Edomのこゝろ)より、キルミル(Ginti-Kirmil—カルメル)まで皆敵側に附和雷同して了つた。

この十四世紀前半の歷史を以て見ると、アモルー及び キナニ地方には殆ど各都市毎に獨立の小王があつて、互に排擠攻伐を事として居たものだ、ヨズエが始めてカナアンに侵入した時、三十一人の王を相手にして戰つて居るが、アマルナ文獻時代から、既にさう云ふ形勢の下に在つたのである。そしてエジプト王は常に傍觀の態度を執り、朝貢さへ怠らなければ、誰が王位を簒奪しようと、他國を併呑しようと措いて問はないのであつた。一方ヒッチ國ではエジプトの羈絆を脱せんとするものがあると見るや、極力之を指嗾、誘扇、激勵し、毫も援助を惜まず、斯くて自國とエジプトとの間に緩衝地帶を設けようと務めた結果、兩國は暫く平和を保つことが出來た。然るに十三世紀の初頭に及んで再び激烈な衝突が起り、屢〻旗鼓の間に相見ゆるに至つたが、結局エジプト側の大勝利となり、エジプト王ラムセス二世は紀元前一二九〇年カデスに於てヒッチ軍を粉碎し、多大の名譽を荷つて凱旋した。後ヒッチの王女と婚して双方兵を收めた。當時シリアとパレスチナは再び小邦分立の姿になつて居たので、ラムセスは背後を伺れる憂もなく、自由に兵をシリアの北境に進めることが出來たのである。然しラムセスの沒後、エジプトは國勢陵夷振はず、リビア人に國境を侵されると云ふ鹽梅で、カナアン地方を顧る餘裕がなかつた。この間にエジプトを脱出たイスラエル人はシナイ半島を通過して、ヘゼボン、バザンの二國を滅し、進んでヨルダン河を涉り、カナアンの諸王を擊滅して、獨立の國家を築くことが出來たのである。

因みにアマルナ文獻中のハビリ黨をヘブライ人と同一視する學者もあるが、文法上それは成立たないと云ふことである。ヘブライ人の語原イブリ(Ibri)と、ハビリ(Habiri)とは共通の點がない、殊にハビリは形容詞、或は名詞の複數形で、單數はハビル(Habiru)と云ふのであつた。その上、このハビリ黨は侵入者ではなく、寧ろエジプトの宗主權を排斥する國粹主義者で、只管エジプトの鼻息を伺

ひ、叩頭主義を執れる軟骨漢を叩き潰さうと務めたものであつたのである。（聖書大辭典、補遺より）

第九章　アブラハムの召出

(1)アブラハムの出身地—アブラハム（Abraham）は始アブラム（Abram）と稱し、カルデアのウル（Ur）に生れた人である。カルデアは、聖書に「カスヂムの地—（Kasdim）と云ひ、楔狀文獻には、古くはカシユドゥ—（Kashdu）後ではカルドゥ—（Kardu）と呼ばれ、エウフラトとチグリスの流域に沿へる盆地で、北はバビロンに至り、南はペルシア灣に及んで居る。エウフラト河の西岸は、河口とバビロンとの中程に、今日ムゲイル—（Mugheir）と呼べる古い都の廢墟がある。ウル—（Ouru）と書いた煉瓦や粘土板の破片が夥しく發見される所から以て見ると、是が昔のウルであるに違ひない。紀元二千五百年から二千四百年頃までウルの諸王はバビロニア全土を統御し、所謂、「ウル王系」を築いたものである。ウルでは主として月を崇拜し、之をナンナル（Nannaru）又はシン（Sin）と呼ぶのであつた。バビロン王ハムラビ（Hammurabi）の先代シン—ムバーリ（Sin-muballit）の即位十四年、ウルの都民は多く殺戮されて居る。多分この時であらうか、アブラムの父タレ（Thârè）は、子のアブラム、その妻サライ（Sarai）、甥のロト（Lot）などを率ゐて、カナアンの地に移住すべくウルを出で、エウフラトの流域に沿うて北西へ進み、北メソポタミアのハラン（Haran）に辿り着き、其處に足を駐めて居る中にタレはそのまま歸らぬ旅に就いた。次男のナコル（Nachor）も後で父兄の跡を追ひ、ハランに移住したものしい。

(2)アブラムの召出—便徒行錄を以て見ると、アブラムはまだカルデアに住んで居る時、光榮の神これに現はれて、汝の國を去り、親族を離れて、我が示さん地に到れと云ふ仰を承つて居る。（使徒行七ノ二）斯くてアブラムは父に從ひ、ハランに移つたが、父の死後、再び神の御告を蒙つた。

「汝の地を出て、汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて、我が汝に示すべき地へ到れ。我れ汝を大なる民となし、汝を祝し、汝の名を大ならしむべし。斯くて汝は祝されるであらう。我は汝を祝する者を祝し、汝を詛ふものを詛はん。天が下のすべての民も汝によりて祝せられるに至るであらう」と。

アブラムがその國を出て、その父の家を離れる樣に命じられたのは、父にせよ、弟のナコル（Nachor）にせよ、早や偶像崇拜に陷つて居たからである（ヨシユア二十四ノ二—三）、夫れにしても彼に要求された犧牲は並大抵ではなかつた。隨つてその報として彼に約束されたのもまた大したものであつた。

1—アブラムは大なる民の祖となる。

2—神に祝せられる。

3—彼の名は偉大なるものとなる。

4—彼によつて天が下の諸〻の民も祝せられる。

と云ふのである。是は救世主に關する第三回目の約束で、この後も幾回となくアブラムに反覆され、確

められ、補足され、子のイザアクにも孫のヤコブにも繰返された。この約束は二個の意義を有する。先づアブラムの血統を受けた子孫が大なる民となるべきことを示す。果してアブラムの子孫は非常に發展し、イスラエル人、イスマエル人、マヂアン人、エドム人等は皆彼を父祖と仰いで居る。然し、この預言は特に精神上の子孫を指すのであつて、實際アブラムは信仰によつて、「すべての信ずるものゝ父」となつたのである。

次にアブラムに約束された祝福は現世の幸福となつて顯れ、アブラムとその子孫は神の特別の御保護を忝うし、大なる富と權力と名聲とをかち得た。でもより貴重な祝福は救世主を與へられ、その救世主によつて世界の人類が罪を贖はれ、救靈の恵を忝うするに至つた夫れである。

蓋し人類が次第に偶像教に溺れて、眞の神を忘れ、救世主を遣すと云ふ有難いお約束さへも忘れ勝ちになつたので、神は特に信仰の熱い、行の正しいアブラムを選んで之を大なる民の祖となし、以て眞の神の信仰と救世主の約束とを永く世に傳へしめようと思召になつたものである。

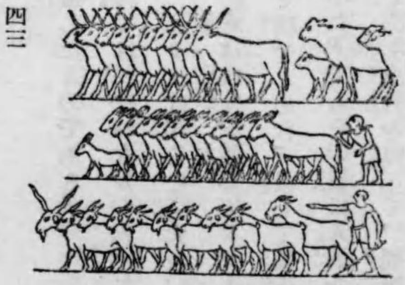
アブラムは早速主の仰を畏つて、妻のサライ、甥のロト、數多の僕婢、家畜等を引連れてハランを出た。「何處へ行くべきかを知らないで發足した」(ヘブライ二八)のだが、然し途中でその移住地を示されたものらしく、幾多の日子を費して終にカナアンの中央部、シケムと云ふ町に到着した。時にアブラムは年七十五歳であつた。

シケムに於て神はアブラムに顯はれ、「汝の子孫にこの地を與ふべし」と曰うた。アブラムは其處に祭壇を築いて神を禮拜した。夫から南へ進んでベテル(Bethel)とハイ(Hai)の中間に暫く足を駐めて神を祭つたが、なほ南へ南へと歩み續け、カナアンの最南端ネゲブ(Negheb)に達した時、偶ま饑饉が起つた。

アジア遊牧民のエジプトに避難

パレスチナは豊饒な土地ではあるが、降雨やその他の關係から、時々饑饉を免れない。却つてエジプトは「世界の穀倉」と云はれるほどあつて、こんな場合に隣國の民が唯一の頼と仰いだものであつた。アブラムも一家を擧げてエジプトへ避難した。

年代が確に分らないので、時のエジプト王は果して誰なりしか判然しない。然しアブラムの召出を紀元前二千年頃とするならば、エジプトは正に第十三王系の時代(二〇〇〇年—一八〇〇年)で、この系の諸王は皆アメネマ(Amenemat)、或はウセルテセン(Ousertesen)と呼び、武略に長ずると共



上　同

に工藝にも心掛け、内は農業を盛にし、外はエチオピアを征服して領土を擴張したものである。

エジプト人は常にアジア方面からの移住民を厚遇するので、アブラムも惡くは待はれなかつた。たゞその妻サライの一件よりして永く留ることが出來なかつた、と云ふのは、サライは年こそ老たれ、絶世の佳人であつたので、アブラムも自分の妻たることが國王に知れたら、或は自分を殺してサライを奪はうとするかも知れぬと氣遣ひ、サライに命じて妻と云はないで、妹と稱せしめた。果して國王はサライの噂を耳にして之を後宮に召入れ、それだけアブラハムを親切に扱つた。でもその爲に天罰を蒙つて、サライがアブラムの妻たることを悟り、彼女をアブラムへ還し、多くの引出物を與へて、國境外に連れ出させた。

(3)ロトと袂を別つ—アブラムはカナアンの地へ歸り、再びベテルとハイの間に天幕を張つた。是まで朔のロトはアブラムと進退を共にして來たものであるが、兩人とも夥しい牛、羊、驢馬、駱駝等の持主であつたものだから、一緒に住んで居ては芻が充分でない。爲にアブラムの僕とロトの僕とが互に爭ひをおつ始めた。アブラムはそれを遺憾に思ひ、ロトに別れ話を持ちかけた。

「お互ひ兄弟の間柄だものね、喧嘩なんかしては面白くないよ。廣い土地が眼前にあることだから、お前の方で分れて住むことにしてくれないか。お前が右へ往けば私は左を取る。お前が左を取れば私は右に往くから」

と云つた。ロトは喜んでアブラムの提議に應じ、目を擧けて東方を眺めると、ヨルダン河に沿うて靑綠の平野が横はつて居る。それこそ樂園の如く、ニール河に潤されるエジプトの如く肥沃な土地だつたので、ロトはその方へ立ち去り、後終にソドマ(Sodoma)の町に住むことにした。

ロトが立去つてから神はアブラムに顯れて、前々の約束を新にし給うた、

「汝目を擧げて、今汝の立つて居る地から北へ南へ東へ西へと見渡せ。汝の目に入る總の地は永久に汝と汝の子孫に與へ、汝の子孫をば地の砂塵の如くなすであらう。若し砂塵を數へ得る者があつたら、汝の子孫をも數へ得よう。汝起つてこの地を縱に橫に歩け、是は汝に與へるのであるぞ」と。

アブラムはこの約束を受けてから天幕を卷いて南の方へブロンの附近なるマンブレ(Mambre)の谷(或はレの橡林ともいふ)に移り、其處に祭壇を築いて神を祀つた。當時カナアンの南部に住んで居た民族はヘテ族とアモレ族で、マンブレはアモレ族の土豪の名であつた。アブラムは彼と同盟を結び、假にこゝを永住の地と定めた。

(4)コドルラホモルの侵入—その頃ヨルダン河に沿うた平野には、ソドマ(Sodoma)、ゴモラ、(Gomorra)アダマ(Adama)、セボイン(Seboin)、バラ(Bara)(後のゼゴル)と云ふ五都があつて、遠いカルデアの東に國するエラム王ゴドルラホモル(Chodorlahomor)に服し、十二年間は年々貢物を收めたものであるが、十三年目になると、俄に王命を担んで朝貢しなかつた。爲にその翌年コドルラホモルはセンナアルの王ア

ムラフエル(Amraphel)、エラサル(Elasar)(チクリスの東)の王アリオク(Arioch)、ゴイム(Goim)の王タダル(Thadal)の兵を合せて討伐に向つた。先づヨルダン河の東に沿へる地方を攻略し、ラフアイム族(Raphaim)、ヅジム族(Zouzim)、エミム族(Emim)、ホレー族(Horrhéens)等を征服して、アカバ(Akabat)灣頭のアイラ(Aila)港に達した。多分エウフラト河畔と紅海との間に商隊の通路を開かんとしたものであらう。それから北上してネゲブに到り、アマレク(Amalec)國を掠め、いよ〳〵北上してパレスチナの南、後の所謂エンガッヂ(Engaddi)に滯陣した。よつて五都の王等は兵を併せて敵をシヂム(Siddim)の谷に防いだが、力敵せず慘敗に終つた。シヂムの谷には瀝青坑が多くあつたので、ソドマとゴモラの王は逃走中、その坑に陷つて死し、その他は山に遁れた。敵は勝に乘じてソドマとゴモラに侵入し、人でも物でも手當り次第に掠め奪り、ロトの財産は言ふ迄もなく、身柄も虜にして引上げた。

アブラムは夫れと聞くや、家の子を三百人と、別にマンブレ兄弟の援兵を合せて敵を追擊ち、北の方ダンに到り、幾手にも分れて夜襲を試みた。不意を打たれた敵は狼狽へまいことか、何もかも棄て置いて命からゞ〳〵逃げ歸つた。アブラムは逃げるを追つてダマスコの南に當るホバ(Hoba)まで行き、ロトを始め、男女の捕虜、夥しき分捕品を殘らず奪還した。

(5)メルキセデク—するとソドマの新王とサレム(Salem)(後のエルサレム)の王メルキセデク(Melchisedec)とは歡

メルキセデクとアブラハム

んで彼を途に出迎へた。メルキセデクは最高き神の司祭でもあつたので、パンと葡萄酒を取出して神を祀り、且つアブラムを祝して、

「アブラムは天地を造り給ひし最高き神樣に祝せられませ。御保護を加へ、敵を御手に渡し給ひし最高き神樣も祝せられさせ給へ」

と云つた。アブラムは彼に謝禮として奪ひ還したものゝ十分の一を贈つた。ソドマの王は、人だけを自分に還して、他は其まゝ取つて置く樣にとアブラムに言つたが、アブラムは丁寧に謝絕した。

「私は天地の主なる最高き神ヤウエを指して誓ひます。一條の絲でも一本の靴の紐でも、王樣のものは受けません。アブラムを富ましてやつた、と言はれてなりませんから。たゞ若者等が既に食ひ盡したものと、私と共に行つたアネル(Aner)、エ

スコル（Escol）、マンブレの分とは除外します。彼等にその分前を取らせて下さい」

教訓—命かけで人助をしながら、報酬として何一つ受けなかつたアブラムの無慾は感ずるに餘ると云はなければならぬ。我等もアブラムの如く、他の不幸に心から同情を寄せ、之を救ひ出すべく應分の力を盡さねばならぬ。して其爲に報を得ないでも、感謝されないでも、神を愛し、又神の愛し給ふ人を愛するの實を擧げることに出來たのに滿足するやう、務めたいものである。

參考（1）メルキセデクに就て

（イ）—メルキセデクは眞の司祭たるイエズス・キリストを前表する。詩篇にも「ヤウエ誓を立て、御心を變へ給ふことなからん。汝はメルキセデクの如く永遠に司祭たり」（詩一〇九ノ四）と歌つてある。聖パウロはヘブライ書、第七章にこの句を解說し、兩者の間に存する類似點を數へ擧げて居る。

（a）メルキセデクは二つの使命を帶び、二の名を有した。彼は王たると共にまた司祭であつた。キリストも同じく王、且つ司祭である。メルキセデクの名は語原を尋ねると、「義の王」を意味し、サレムの王と云ふ方からは「平和の王」を意味する。義と平和とはメッシアの國を特徵づけたものである。

（b）メルキセデクがパンと葡萄酒を獻げて神を祭つたのは、後のミサ聖祭を前表したものである。

なほキリストの前表としてメルキセデクの著しき特色は、彼の出生も死亡も聖書に記述してないことで、聖パウロは之を聖靈の思召に出たものだと稱して、次の如く云つてゐる。

「彼は父なく、母なく、系圖なく、その日の始もなく、齡の終もなく、神の御子に肖りて、永久の司祭として在す」（ヘブライ七ノ三）と。

（3）メルキセデクはアブラハムを祝し、アブラムから十分の一の贈物を受けた。是によつて觀ると、彼はアブラムに勝り、又アブラムを祖先とするレヴィの司祭にも勝れることは明白で、キリストが「メルキセデクの如き司祭」たる以上、また他のレヴィ族の司祭に優れることを證するに餘あるのである。

（2）エラム族の侵略に就て

（イ）—エラムの王がカナアン地方に侵入したことは創世記の第十四章に出て居るのみで、他に何等の文獻も存しなかつた。主理論者はそれを楯にして聖書の權威を散々に貶し、全く取るにも足らぬ架空談となし、「アブラム時代に四人の王がペルシア灣頭からカナアン地方へ掠奪に出掛るなんて、そんなことが出來るものか」と、獨逸の高等批評家ウエルハウセン（Wellhausen）等は叫んで居る。成るほど楔狀文獻には、聖書と同一の遠征を物語つた記事は出て居ない。然しこの遠征物語が確乎たる史實を根據として居ることだけは疑ふべくもない。

先づエラムはバビロンの東に位し、最初の住民はセム族であつたが、後慓悍剛勇、戰鬪を好むアンザン族（Anzan）—多分トウラニアン系か？—がこの地方の主權を握つた。その爲か從來バビロンに隷屬せし エラム族は 俄然頭角を顯し、倒にバビロンへ侵入を試み、 その王クドウル・ナシュンディ（Kudur-Nachundi）は紀元前二二八五年、エレクよりナナ女神（Nana又はイスタル—Istar云ふ）の偶像

を奪ひ歸つたことがある。斯くてバビロンは全くエラムの屬國となり、紀元前二十世紀の後半期に、バビロン王シン・ムバリト(Sin-Muballit)もエラム王クドウル・マブグ(Kudur-Mabag)に臣事するに至つた。このクドウル・マブグは頗る勢力のあつた王で、自から「アッダーマルトウ(Adda-Martu—西國の王)」と稱し、その子エリ・アク(Eri-Aku)をラルサ(Larsa)の王となして居る。

コドルラホモル(Chodorlahomor)は、ヘブライ文にはケドル・ラオメル、(Kedor-laomer)、アッシリア、バビロン語ではクドウル・ラガマル(Koudour-lagamar)になつて居る。クドウルは冠を意味し、ラガマルはエラムの神の名である。エラムの王には之に類似せる名を持つたのが多い。クドウル・ナンフンディ(Koudour-nan-hundi)とか、クドウル・マブグ(Koudour-maboug)とかの如きがそれで、近代の歴史家は之をクドウル系と呼んで居る。

コドルラホモルが地中海沿岸まで遠征を試みたことも敢へて驚くには足りない。バビロン王國の創設者とも認むべきサルゴン一世(Sargon I)は六百年も前に、カルデアと地中海との間に介在せるすべての國を、隨つてカナアン地方をも征服して居る。コドルラホモルがバビロン王の後繼者を以て自ら任じ、先王の統括せし領土を回復せんと欲したのも怪むに及ばないであらう。

(ロ)—次にセンナアルの王アムラフエル(Amraphel)は有名なバビロン王ハムラビ(Hammurabi)のことらしく、エラサルの王アリオクは、ラルサ(Larsa)の王エリアクで、タダル(Thadal)が王たりしゴイム(Goim)族はバビロンの東北に住んで居たグチ(Guti)、或は(Kuti)族に違ひない。

この中で特に見落してならないのは、バビロン王ハムラビである。

一九〇一年の十一月から翌年一月にかけてフランスの探檢隊はド・モルガン(De Morgan)氏に率ゐられてエラムの古都スサン(Susan)に發掘を試み、偶然一個の石柱を堀出した。是こそハムラビ王が、紀元前二十世紀の頃、バビロン地方に行はれて居た法律、習慣等を參酌して編纂した二百八十二ヶ條の成文法を楔狀文字で刻み付けた世界最古の法典なのである。コドルラホモルの部下に屬してカナアンに侵入したセンナアルの王アムラフエルは此ハムラビに外ならぬと言ふのに現代の註釋家は大抵一致して居る。彼は位に在ること四十三年、最初はエラム王に隷屬して居たが、多分コドルラホモルがアブラムに敗られて其勢力を失墜したのを機會に獨立を謀り、漸次强大なる勢力を築き、內外に對して赫々たる治績を擧げたものらしい。殊に彼の法典は今より四千年の昔に成つたのみならず、堅固な石柱に彫刻されて嚴存し、口碑傳說に由れる古代法とは日を同うして論ずべくもない。この石柱がスサンに移されたのは紀元前一千年頃、エラムが國勢を挽回してバビロンに侵入した時、戰利品として携へ歸つたものだとか。

ハムラビはバビロン第一王系の第六代の君で、その年代に就ては學者の見解が區々として一定しない。最近アッシリア學者でイエズス會のクグレル師(P. Kugler)は各方面から研究を重ねた結果、ハムラビ王の治世を紀元前千九百四十七年—千九百五年と斷定した。バビロン第一王系の第十代アンミザドウガ王(Ammizadouga)の治世を記した粘土板に、王の六年金星が左の如く出沒したと云ふ記事が載つてゐる。

八月廿八日、太陽と同時に西天に沒す

九月一日、太陽と同時に東天に昇る

金星は二百二十四日、七を以つて太陽を一周するのだが、然し其間に地球もまた太陽の周圍を運行す

るので、金星が太陽にたいして地球から同じ方向に見ゐるのは五百八十四日目である。その地球から見て太陽の背後に在る時を上合と云ひ、それから二百九十二日すると、太陽と地球との中間に介まる様になる、之を下合と稱し、下合の少し後に曉の明星として東天に顯れる。それから次第に高く昇り、最高點に達してから、また次第に低くなり、終に全く姿を沒して見ゐなくなり、やがて宵の明星として西天に顯れる。それから日を追うてその高度を増し、或る一定の高さに達してから再び低下の道を辿り、全く姿を隱して、間もなく東天に現れるのである。

金星が西天に沒して見ゐないのは下合の直ぐ前で、夫れが月の終に當り、下合を過ぎて再び東天に見ゐるのが翌月の初で、其間僅に二三日を隔てるに過ぎない。で此年は金星の下合と新月とが出遇した譯で、斯る現象は極めて稀であるが、然し周期的に起るので、この周期より推すと、アミザドウガ及びバビロン第一王系諸王の治世に關して、四の假定說が得られる。ハンムラビ王に就いて云へば左の如くなる。

(A)二一八七年——二一四五年　(B)二一二三年——二〇八一年
(C)二〇〇三年——一九六一年　(D)一九四七年——一九〇五年

一九一二年にクグレル師はB說を採つたが、一九二二年に至つてD說に變更した。夫れには相當の理由がある。と云ふのは、同粘土板に、麥の刈入時に人を傭ふとか、麥の成熟期に地主と小作人との間に收穫を分配するとか云ふことに關する法令が載つて居る。D說に從へばその刈入時や收穫期がシックリ合ふと云ふのである。

その上、一九〇四年に發見されたサルマナサル一世の碑銘によると、七百三十九年前、イルスマ(Ilusuma)の子エリス(Erisu)と云ふものがアススルの神殿を再興した。夫れからサルマナサル一世の子トウクルテイ・ニビブ(Tukulti-Nibib)の碑銘には、エリスの父イルスマも七百八十年前、アスルにイスタルの神殿を建立したと記してある。

サルマナサル一世は紀元前一三〇〇年—一二五〇年の人であるから、エリスの神殿再興は二〇三九年(1300+739)で、イルスマの建立は二〇四〇年(1260+780)頃である。

なほイルスマはハムラビの屬せしバビロン第一王系の始祖スアブ(Suabu)と同時代の人らしい、「アスルの王イルスマ對スアブ」と云ふ文句も發見されてある。夫れから推して見ると、ハムラビ王の治世(スアブから六代目)はD說に合せて、紀元前一九四七年—一九〇五年としなければならぬと云ふのである。

然しながら(1)サルマナサル一世と、その子トウクルテイ・ニビブ王の治世を正確に斷定することが不可能だし、(2)もしイルスマと云ふ名の持主が幾人もあつたものとするならば、——サルマナサルが五人、サムシ・アダド(Samsi-Adad)が五人、アスルダン(Asurdan)が三人もあつた如く——碑銘のイルスマはスアブと同時代の人でないかも知れぬので、まだ今日まで確定は出來ないのだが、聖書大辭典補遺にはD說を採用し、アブラムを以て紀元二十世紀後半の人としてある。然しさうすると時代があまり遲くなるので、聖書の所謂アムラフエルとは別人としなければならぬと云ふ學者もないではない。ローマのプロバカンダ學院のルフィニ(Ruffini)教授の主張が夫れで、彼はむしろB說に從つて居る。

第十章　新な契約

（一）**アブラムの信仰**―その後神は再びアブラムに顯れて、

「恐れるな、アブラム、我れ汝の楯となりて汝を保護する、汝の報は大なるものであらうぞ」

と宣うた。然し是までアブラムとサライとの間には子寶がない。アブラムは平素より心細く思つて居た所であるから、

「主は私に何をお與へ下さつたからとて、夫れを傳へる子は有ちませず、我家の相續人はこのダマスコ出のエリエゼル（Eliezer）でありませう。私には子孫をお與へ下さいませんので、私の僕が相續人でありませう」

と力無げに答へた。神は折返して曰うた、

「否、相續人は僕ではない。汝の身より出る實子じや」

時は恰當夜であつたが、神はアブラムを天幕の外へ連れ出して

「天を眺めよ、出來るなら、あの星を數へて見よ、汝の裔も彼の通りになるであらう」

とお約束になつた。アブラムはすなほに神の御言を信じたので、夫れが義として彼に歸せられた。主は續いてアブラムと契約を結び給うた。

「我はこの地を汝に與へ、之を汝に所有せしめんとて、カルデアのウルから導き出したヤウエであるぞ」

「主なる神よ、私が之を所有すべきことは如何にして知り得ませう」

「三歳の牝牛と三歳の牝山羊と三歳の牡羊と山鳩、及び若き鴿とを我爲に取れ」

アブラムは仰の如くして、之を眞中から剖き、その剖いたものを各相對はして置いた。たゞ鳥だけは剖かなかつた。是はその當時の習慣で、固く誓つて渝らないことを示すが爲め犧牲を屠つて神に獻げ、然る後これを二つに等分し、少許の間隔を置いて相對せしめ、兩誓約者が交る〴〵その間を通つて行くのであつた。

アブラムは仰のまゝにして犧牲の肉を並べて置いたら、空の鳥が下つて來て、之を啄まうとする。アブラムはその鳥を逐うて居ると、何時しか日もトップリ暮れて、アブラムは睡に襲はれ、眞暗黑に包まれた樣な感じがして大に恐れた。その時、神の御告があつた、

「汝の裔は他國に流浪して奴隷とされ、四百年の間、苦しい目を見るであらう。然し我はその奴隷とせる民を判き、斯くて大なる富を擁して其國を出ることにする。汝は安かな眠につき、老齡に至つて墓の中の人となるであらう。汝の子孫は四代の後、此國へ歸る。まだアモレ人の罪惡が充滿つて居ないので、今日までは亡ぼされないのである」

日が暮れて眞暗黑となつた頃、煙と焰の出る爐がその兩分せる肉の間を通過した。神がお通りになつていよ〴〵その誓約を固め給うたことを示したものである。

斯くてこの日神はアブラムと契約を結び、エジプト河からエウフラト河に至るまでの土地を彼の子孫

に與ふべしと宣うた。

(2)**イスマエルの誕生**—其時サライは自分に子のないことを悲み、神の御託宣が一日も早く成就されたしと欲し、當時あの邊りによく行はれつゝあつた風習に倣ひ、エジプト人で自分の奴隷たりしアガル(Agar)を側室として夫に進めた。斯うして子供が生れると、それは當然主婦の子と見做し、實母には付さないと云ふことになつて居たのである。

アブラムはサライの勸めに應じ、カナアンの地に移住してから十年目にアガルを側室とした。然しアガルはアブラムの胤を宿したと見るや、急に横柄となり、何かにつけて主婦のサライを侮る樣な態度を見せて來た。サライは懲しめの爲、彼女を虐待し出したので、アガルも居堪らなくなり、終にアブラムの家を逃げて南の方エジプトを指して立去つた。スル(Sur)の荒野に彷徨つて居る時、泉のほとりで天使が顯れた。

「サライの女中アガル、何處から來た？そして何處へ行くのだ」

「主人サライの前を逃げて參りました。」

「主人の側に歸りて、その手の下に身を謙るのだ……我は大に汝の子孫を殖し、餘りに多くて數へも得ないほどになして遣す。……汝は男兒を生むであらう、その名をイスマエル—神聽し召し給ふ—と名けよ、彼は野驢馬の如き人となり、その手は諸〻の人に敵し、諸〻の人の手もまた之に敵しよう。彼はその總の兄弟(アブラムの子孫)の東に住むであらう。」と。

アガルはその井を「生ける者にして我を見給へる者の井」と名けた。この井はバレスチナの南、カデス(Cades)とバラド(Barad)の中間に在るのである。

アガルは天使の命に應ひ、サライの許へ歸り、アブラムの爲に男兒を生み、之をイスマエル(Ismael)と名けた。時にアブラムは齡八十六歳であつた。

(3)**アブラムの改名と割禮の定め**—イスマエルの生れてから十三年、アブラムが九十九歳の時、神は今一度彼に顯れて以前の契約を新にし給うた。

「我は全能の神である、なんぢ我前に歩みて完全なる者となれ。我と汝との間に我契約を立て、汝の子孫を大に增すであらう」

アブラムは地に平伏して神を禮拜した、神は猶續いてアブラムとの契約を詳細に說明し、

1—アブラムは多の民の父となるべきはずであるから、今後アブラム—高き父—とは呼ばないで、アブラハム—多くの人の父—と呼ぶべきこと、

2—子孫は永久にカナアンの地を所有すべきこと、

3—ヤウエは特別にアブラハムとその子孫の神たるべきこと、

4—契約はアブラハムより後世子孫に及び永遠に渝らざるべきこと、

5―その契約のしるしにアブラハムを始め、すべての男子に割禮を施すべきこと、等を命じ給うた。この割禮は神に誓へる忠誠の保證となり、又神の祝福の分配に與るのに必要缺くべからざる條件ともなるべきものであつた。そしてアブラハムの子孫と云ふは、アガルより生れた子ではなく、必ずサライの腹に生れ出るのだから、以後サライ―我妃―も名を改めて、サラ（妃）と呼ぶべし、と仰せになつた。單に一家族の主婦でなく、多くの家族の母となるべきはずだ。兎に角サラより子が生れる、その子によつて彼女は諸國民の母となり、數々の民族や王侯が彼より出るであらう、と暗示せられたのである。アブラハムは地に平伏して喜びの餘りに笑ひ、

「百歳の人に如何でか子の生れることがありませう。又サラは九十歳なのに兒を生むでせうか」

と云つた。彼が斯う云つたのは決して神の御言を疑つた爲ではなく、歡喜、驚嘆の餘に出たのである。故に聖パウロも口を極めてその事を讃め稱へて居る。曰はく

「彼は希望すべくも非るになほ希望して、多くの民の父とならんことを信ぜり。而もその信仰弱ることなく、殆ど百歳に及びて己が身は既に死せるが如く、サラの胎も死せるが如くなるを顧みず、又神の御約束に就きても訝らず、躊躇せず、却つて神に光榮を歸し奉りて、約し給ひしことは悉く遂げ給ふべしと、飽まで知りて信仰を固めたり。故にこのこと義として彼に歸せられたり」（ローマ四ノ一八以下）と。

アブラハムが笑つた爲め、サラが翌年産べき兒はイザアク（Isaac―彼は笑ふ）と名づけられた。神の御約束を寄托され、之を子孫に傳ふべきものは決してイスマエルではなく、このイザアクであつたのである。

然し神はアブラハムの請によりてイスマエルをも祝し、その子孫は大に繁殖して、有力な民となり、十二人の王侯が之より出づべきことを約束し給うた。アブラハムは神の御約束を信じ、其日直ぐに己もイスマエルも、その他、家に居る程しの男子と云ふ男子には悉く割禮を施した。

教訓―アガルが主人の胤を宿したと見るや、忽ち有頂天となり、サラを侮蔑したのは正理に反することであつたから、天使は彼に歸宅を命じ、主婦の前に謙遜せしめた。たとへ幸運に回り遭つたからとて主從の道に變はない。そんな幸運を惠まれたら、いよ〳〵以て謙遜すべきだ。靈魂上の恩惠を蒙つた時は、猶更らさうである。

參考　割禮に就て

割禮は契約そのものではなく、たゞ契約の固め、そのしるしたるに過ぎない。アブラハムの身に就いて言ふと、その信仰によりて求め得た義の象徴であつた。子孫も彼と同じくこの印を持たざるべからず。拒んで割禮を受けないものは、契約を無視する譯になるから、死罪に處せられる。異邦人にして、もし神の民の中へ加へられたければ、必ず割禮を受けなければならぬ。一たび割禮を受けると、イスラエル人と對等の地位に立ち、同じ義務に服し、同じ權利を享有し、同じ恩典に浴することが出來るのであつた。

割禮は今一つ象徴的意義を持つて居る。夫れは隨分痛い手術であつたから、之を受けるのは服從と犧牲の行爲であり、肉を棄て、心を清淨に保ち、神を愛すると云ふことを現すのであつた。アブラハムは割禮を受ける前から、既に是等の德を備へて居たので、割禮はたゞその德を外部に顯すしたるに止まつた。彼の後裔たるイスラエル人の爲には、割禮はアブラハムの德の紀念となり、それに則る爲の奬勵ともなつたものである。然しながら肉の割禮ばかり行つても、共に心の割禮を施さなくては格別益にならないので、モイゼは「心の割禮を行へ」(申命一〇ノ一六)と勸めて居る。

なるほど肉の割禮を受けると、外見は異邦人と區別されようが、然したゞ夫れだけでは無割禮と異る所がない。聖パウロはさう斷じて居る(ローマ二ノ二五)

なほ聖パウロによると、割禮は洗禮の前表、新約の洗禮と同じく信仰の秘蹟見た樣なものであつた。イスラエル人が神の選民のしるしを其肉に持つて居た如く、洗禮を受けた人も神の子の印章を靈魂に刻まれる、洗禮によつて聖會の一員に加へられ、信者のすべての義務を我身に引受けるのである。

聖アウグスチヌス、聖トマス等は割禮によつて原罪が赦されるのであつたと敎へて居る。無論それは洗禮の如く、割禮その物の力によつてゞはなく、キリストの功德にたいする信仰によつて、夫れだけの効果を生ずるのであつた。

割禮は契約のしるしであるから、契約の存續する間、その命脈を保つが至當である。然るに舊約はキリストの御死去によつて廢絶に歸し、神と人との間には新な契約が締結されたのだから、それと共に割禮も廢絶に歸するのは理の當然である。因みに割禮はこの時はじめて人に知られたのではない。

アブラハム以前からエジプトには行はれて居たもので、木乃伊の中にその證跡を存したのがあり、又割禮實施の場面を描いた極く古い繪畫も發見されてある。エジプト以外では、南アフリカの土人、フエニキア人、モアブ人、アンモン人、アラビア人間にも行はれた。然しアブラハムの出身地たるカルデアにはそんな風習はなかつた。イスラエル人が之を行ふ樣になつたのは、神の御定めに出で、式は全然宗敎的であつたのである。

第十一章　ソドマの滅亡

(一)三人の旅客—神がその選みの民を準備し給ふ間に、他の民族はいよ〳〵神に遠かり、罪惡に身を持ち崩すのみであつた。死海の南なるソドマ、ゴモラ、アダマ、セボイン、バラ等の如きは、地味は肥ゑ、產物は豐に、勞せずして收穫庫に充つると云ふ鹽梅であつたから、町の人々はたゞ飲食遊蕩に耽り、聞くだに忌々しい罪を平氣で犯して居たのである。流石の神も終に愛想を盡かし、恐ろしい天罰を降して之を滅さうとお定めになつた。或日アブラハムが暑い〳〵眞晝間にマンブレの樫林は天幕の入口に茂れる樹蔭に坐して居ると、突然三人の旅客がその前に立顯れた。アブラハムは早速走り出で、三人を迎へて恭しく地に平伏し、その中の頭とも思しき方に向ひ、

「主よ、もし私が御目の前に惠を得ましたならば、どうぞ私の天幕を素通りにして下さいますな。少の水を持つて參ります。足を濯いで樹蔭に御休息なさいませ。パンも少々差上げますから、夫れに氣力

をつけてお起ち下さい。その爲にこそ私方へ足をお運びになつたのでせうから」

と懇に言つた。三人の旅客は喜んでアブラハムの招待に應じた。アブラハムは早速天幕に入り、急いで麥粉を捏ね、灰の下に埋燒をする樣、サラに命じ、自分は牛小舍へ馳せ行き、犢の柔かで上等なのを取りて若者に與へ、急いで之を調理させ、そして牛酪と牛乳とその犢とを客に供へた。知らぬ旅客でも親切に歓待するのは彼の邊の風習ださうで、今日でもアラビア地方では、そんな風習が遺つて居るとか。然しアブラハムは特に人待しが勝れて居たのである。客は食し終つてからアブラハムに問うた。

アラビア地方に於ける天幕生活

「サラ奥樣は何處にいらつしやいます?」

「天幕の中に居りまする」

「明年の今頃、私は必ず歸つて參ります。その時サラ奥樣は男兒を擧げて居られませうよ」

サラは天幕の入口の後に在つて、それを聞き、クス〳〵と笑ひながら云つた。

「私はもう年を取り、主人も老齡になつて居るのに、そんなことを思はれますでせうか」

「お婆さんになつてから子を產むだらうかと、なぜお笑ひになるのです。ヤウエに爲し難いことがありますか。約束通り一ケ年の後に私は此處へ參ります。その時サラ奥樣はきつと男兒を擧げて居られます」

サラは恐れて言ひ譯をした。

「否、さうではない、屹と笑ひました」

アブラハムはもう是が常人ではない。何でも神樣が人の形を着け、二方の天使を從へてお顯れになつたのだと覺つた。

(2)アブラハムの仁腸—主はかう云つてから、ソドマの方を指してお出掛けになつた。アブラハムも途中までお見送り申上げると、主は彼に一切の事情を打開けなさつた。

「私のなすべきことをアブラハムに隱すことが出來ようか。他日大きな强い民族となり、地上のすべての民は彼に於いて祝せらるべきではないか。彼は必ずその子孫に命じて主の道を守り、正義と公平とを行はしめるであらうし、斯くてヤウエはアブラハム故にその語りしことを果すに至るのだもの……」

ソドマとゴモラの叫びが大きくなり、その罪はいよ〳〵甚しくなつて來た。果してその叫び通りに實行して居るか否か、是から降つて見る所である」

こアブラハムに告げ二方の天使はその儘ソドマを指して立去つた。アブラハムは猶主の尊前に立つて居る。平素よりソドマの腐敗しきつて居ることは承知して居たので、神もいよ〳〵見切をつけて、之を滅し盡さうこ思召させ給ふのだこ悟つたが、情深いアブラハムのここであるから、流石に不憫の情に堪へず、何こかならぬものかこ主の御側へすり寄つて申上げた、

「義しい人も汚れた惡人こ共に滅しなさいますか、若しソドマに五十人の義しい人が居ましたら夫に免じて彼町をお恕し下さらぬでせうか。まさか義人も惡人も差別なしにお滅しなさるやうな事はありますまいこ思ひますが」

「否、ソドマの町中に五十人の義しい人が見付つたら、夫れに免じて皆に赦して遣す」

「一度お願ひかけた事でムいますから、塵埃の私ではございますけれごも、重ねて申上げます。若し五十人から五人だけ缺けたら如何でせう。四十五人の義しい人があるこするならば、お恕し下さいませんでせうか」

「四十五人の義しい人が居たらば恕して遣す、滅ぼしはしまい」

「若し四十人しか居なかつたら、如何でございませう」

「四十人しか居なくても滅しはせぬ」

「餘り執拗いこお叱りを蒙るかも存知ませんが、若し三十人の義しい人が居ましたら如何でせう」

「三十人居ても恕して遣さう」

「押して申上げるやうですが、二十人だけ見附かつたら如何でムいますか」

「二十人だけ見附かつても恕して遣す」

「今一度申上げます、何うぞ御勘辨下さいませ、若しか十人だけ見附かりましたら」

「十人だけ見附かつても、恕して遣す。滅しはせぬ」

こ答へて、神は其儘立ち去り給うた。アブラハムも天幕に歸つた。

(3)ソドマの滅亡—實際ソドマには十人の義人も居なかつたのだから止むを得ない。主の御伴をして來た二方の天使は夕方町中へ入つた。ロトはそれを見て、固より天使だらうこ知るはずもないが、然し叔父のアブラハムにも劣らず、人もてなしの好い人だつたので、二人を喜び迎へ、頭を地に額いて曰つた、

「ごうぞ僕の家に臨み、足を濯いで宿り、明朝夙に起きて途をお續けなさいませ」

「否、我々は街衢に宿る積りをして居る」

こ天使は答へた。然しロトは强ひて己が家へ案内し、色々こ懇に欵待した。之を見た町の人々は老若男女打連れて八方からロトの家に押しかけ、二人を自分等の手に付されんこを要求して止まない。彼等にたいして怪しからぬ振舞に出ようこ云ふ腹なのだ。ロトが色々こ宥め賺して引取らさうこしても、なか〳〵承知しない、終にはロトに喰つてかゝり、

「貴様は宿借りの身でありながら、俺等の判事にでもならうと云ふのか。よし其儀ならば、より大きな危害を貴様に加へてやるのだ」

と云ひ、戸を破つて内へ闖入せんとした。そこで、天使は御手を伸し、ロトを内へ引入れて戸を堅く閉し、外にワイ〳〵と騒いで居る町人の目を突然暗まして了つた。流石の町人も入口を尋ねて手探り足探りするばかりで、どうすることも出來ない。其時、天使はロトに自分等の使命を物語り、

「其方の家族に屬するものは、婿さんも、嫁いだ先の娘さんも、皆こゝから連れ出すやうにせよ。この町の罪惡の呼號が大きくなり、我々は之を滅すが爲、神様に遣されて來たものであるぞ」

ロトは早速家を飛出して、二人の娘に許婚してある男の方へ行き、事の由を告げて共々に逃げようと勸めたけれども、彼等は戯言と思つて取合はない。翌朝になつた。天使はロトを急き立て、

「起つて早く妻子を連れ出せ。さもなくば汚れた町と共に滅びるばかりだ」

と云ふけれども、ロトは家や財産が氣にかゝると見ゐて、なほ愚圖々々して居る。よつて天使は親子四人の手を執つて町外へ引出した。

「逃げて生命を助れ。背後を顧るな。附近の地にも止るな。共に滅びまいと思はど山に遁れよ」

と天使が云つても、ロトはアブラハムほどの美しい信仰を持たない。云はれるまゝに山へ逃れようとはしないで、この急場に長々と我身の都合を訴へた。

天使ロトの親子の手を取りて町より引出す

「私は御目の前に惠を得ました。お情をかけて私の命をお救ひ下さいましたが、山へ逃げても救はれ得ますまい、恐らく災害が身に及んで死ぬかも知れません。あの向ふの邑は逃げて行くのに近くて、且つ小い。あれに逃込ましして下さい。あれは小さな町じやありませんか。あれで私の命は助かりませう」

「よし、其方の願を聽いた。其方の言つた町は滅さない、急いで救はれよ。其方が逃げ込むまでは何もされないから」

と情の返答を得て、ロトは一散に走つた。その町は從來バラ(Bara)と呼ばれて居たのだが、其時からセゴル（Segor—小き邑）と云ふ名を得るに至つた。

やがて朝日が東の山の端にさし昇り、ロトはセゴルの邑に入つた。神はソドマとゴモラの上に硫黄と火を天から雨降らし、彼の二の町と、その附近の土地、人も草木も青い物は殘らず燒き滅して了はれた。然るにロトの妻はセゴルへ逃げ行く途中、天使の命に背いて背後を顧みた。火の雨、硫黄の雨、燒けて

落ちる屋根、逃げ迷へる人々の喚聲なごに心を引かれて物好きに背を顧みたものだらう。忽ち硫黄の煙に窒息し、死體はそのまゝ硬直して塩の柱となつた。

アブラハムは朝起きて、昨日主と物語つた所へ行き、ソドマとゴモラ及びその附近一帶の地を打眺めると、煙が大きな竈の夫の如く盛に立昇つて居る。斯の如くして神は不潔な町を殘らず燒き盡し給うたが、アブラハムを思つて、ロトだけは滅の中からお救ひ下さつた。

ロトと二人の娘は無事セゴルに逃げ込んだが、餘りの恐ろしさに、それにも居堪らないで、やはり最初の命令通り、山へ遁れて洞窟に隱れた。後その二人の娘よりモアブ(Moab)とアンモン(Ammon)と云ふ子が生れ、同名の二民族となり、ヨルダン河の東に居を占めることになつた。でも後日アモレ族に逐はれて、モアブ族はアルノン河の南、死海の東に移り、アンモン族は更にその東の荒野へ退いた。

イスラエル人がカナアンに侵入する時、神はこの兩民族を攻擊すべからずとお差止めになつた。ロトの遠孫で、互に親戚の間柄であつたからである。然しこの兩民族は常にイスラエル人を敵視し、何かにつけて妨害をしたもので、その爲めに彼等をイスラエルの國籍に入れるのは神も之をお許しにならず、

「アンモン人、及びモアブ人はヤウエの會に入るべからず。十代までも何時までもヤウエの會に入るべからず。」(申命記二三ノ三)

と明に禁止し給うた。豫言者等はこの兩民族の上に屢神の嚴罰を威嚇して居る。殊にモアブ族の如きになると、神やイスラエルの敵の標本と見做して居る位である。

教訓—罪は恐るべきものだ。神は正義にて在す。罪に耽つて何時まで改めないならば、一度は必ず天罰がやつて來る。遁るべき道はない。

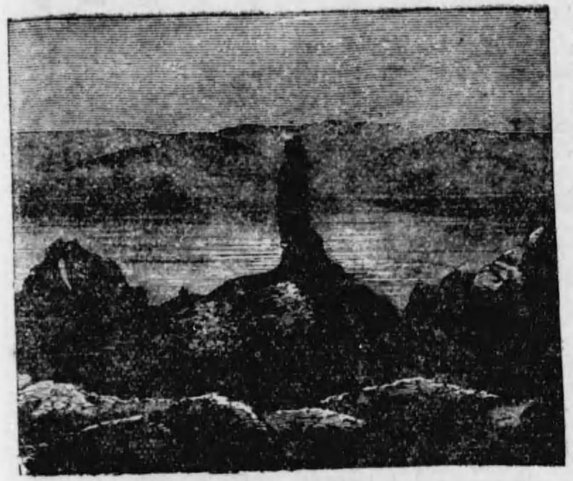
參考（1）一夫多妻に就て

婚姻は一夫一婦より成立つと云ふのが神の最初のお定めであつた。然るにカイン六代の孫ラメクはこのお定めを破り、一人で二人の妻を娶つた。大洪水の後にも風儀の壞亂るに隨ひ、一夫多妻の陋習が廣く世に行はれる樣になり、神もそのまゝ默許して置かれたので、アブラハムやヤコブの如く神の御意に適へる人々までが幾人もの妻を娶つて居る。但し族長制度の行はれし當時にあつては、子供を多く有するだけ勢力が加はる譯であつたので、婦人室に幾多の妻妾を擁するのは、富豪、權門には一種の缺くべからざる贅澤であつた。ゼデオン、ダウイド、サロモン、ロボアム等、皆それ〴〵に婦人室—後宮を備へて居たことは人の知る所である。

然しこの陋習はたゞユデアに限つたものではなく、それこそ全く世界的で、支那等になると、「後宮三千人」と註される位に、その豪勢振を見せたものである。然るにキリストが一たび世に出でゝ婚姻の神聖を說き、一夫一婦主義を叫び給ふや、信者は先づその聲に應じてこの陋習を廢棄し、延いては未信者間にすら一夫多妻を恥ぢると云ふ美風を生じ、今日文明諸國では、少くも法律上、畜妾制度を認めざるに至つたのである。

(2) 鹽の柱

ロトの妻は背を顧みた爲め鹽の柱になつた、と聖書に出て居るが、然しヘブライ原文を精讀して見ると、たゞ背を顧みた許りでなく、立止つたらしいと、ボナコルシ師(Bonaccorsi)は云つて居る。でも立止つたからとて、如何して鹽の柱になつたのだらう。それは地中の鹽分—硝石等が火の爲に溶けて噴出し、彼女の身に濺ぎかゝつて鹽の柱となつたのではあるまいか。



鹽の柱

フンメラウエル師(Hummelauer)の解釋も面白い。曰はく「今日でも死海は風が起ると、白い泡を立てゝ岸に打寄せ、鹽の薄い層を被せる程である。況して其時は非常に激しい嵐が起つたはずだから、ロトの妻は一寸立ち止つた際その浪を浴せられ、全く鹽水に覆はれて窒息したのだ。彼女の悲鳴に驚いてロトとその二女が顧みた時は、全く鹽の柱としか見ゐなかつたのである。」

ユデアの傳によると、この鹽の柱はそのまゝ長く遺存した。ヨゼフスもその「ユデア舊記事」に自分で夫れを見たと記載して居る。然しそれが實際ロトの妻の成れの果であつたか否か、確言は出來ない。

今日死海の南西部にウスドウム山(Usdum)と稱する岬が突出て居る。高さ百尺乃至百五十尺位の鹽の山で、その東側は死海に面した狹く高い崖の上に十五メートル許りの圓い鹽の柱が見ゐる。是を俗に「ロトの妻—アラビア人はロトの娘」と稱して居る。ユデアの傳説に殘つて居たのは或は之を指したものかも知れない。

第十二章　イザアクの誕生

(1)笑ひの兒—ソドマの滅亡後、アブラハムはヘブロンを去つて南へ下り、一時カデス(Cades)とスル(Sur)の間なるネゲブ(Negheb)に足を駐め、夫から北上してフイリスチン國の南端ゼララ(Gerara)附近に居を定めた。一年の後、サラは果して玉の如き男子を產み、イザアクと名づけた。時にアブラハムは百歲、サラは九十歲で、夫れこそ全く奇蹟の子であつたのだ。夫婦の爲に喜びの種となり、「笑の兒」となつたのも不思議ではない。八日目には割禮を施し、夫からは這へば立て、立てば歩めと夫婦は老を忘れて可愛がるのであつた。

三歲になると乳離れをさせるが彼の地方の習慣で、アブラハムはその序に盛宴を張つて大に祝つた。イザアクが生れた時イスマエルは年既に十四、アブラハムの家督相續人は自分の外にないと是まで信じ切つて居たのに、今や嫡子が生れて自分の期待はがらりと外れたのに氣を腐らし、何かにつけてイザ

アクを嘲り、之を虐待するのであつた。サラは終に堪へ兼ねて、アブラハムにイスマエル母子の逐出し方を迫つた。アブラハムは餘り氣も進まなかつたが、然し「サラの言ふ所を聽け」と主の仰があつたので、パンと水を盛つた革袋をアガルに與へて立去らせた。イザアクはアブラハムの信仰と美風を承繼いで、之を子孫に傳へなければならぬはずだつたので、一切の惡い影響を避け、父母の手塩にかけ、その監督の下に成長する必要があつた所から、主もさうお計ひになつたものであらう。

アガル母子は主人の家を出で、ゼララ(Gerara)の東南ベルサベエの荒野に彷徨つて居る間に、革袋の水を飲み盡した。アガルは途方に暮れた。イスマエルを唯ある樹の下に遺し置き、「我子の死ぬのを見るに忍びず」と云つて、自分は矢頃を隔てゝ之と向ひ合ひに坐し、聲を擧げて泣いた。神はイスマエルの聲をお聽きになり、天使を遣してアガルを呼ばしめ給うた。

革袋から水を飲ますこと

「アガル、何をするのだ、恐れるな。神樣は彼處に居る童子の聲をお聽きになつた。起て、童子を起してその手を取れ。我は之を大なる民となすであらう」と。

直ぐ近くに泉が湧いて居たのだけれども、疲れ惱んだアガルにはそれが見えなかつたのである。神はアガルの目を開けて下さつた。彼女は井を見當り、行いてその水を革袋に充し、童子にも飲せた。

斯くてイスマエルは聖地の南、シナイ山の北に當るファラン(Pharan)の荒野に成長し、エジプトから妻を迎へて一家を立てた。シナイ半島の荒野を心のまゝに彷徨つて居る放浪の民は實に彼の後裔である。

(2)アビメレクとの盟—その頃ゼララの王アビメレク(Abimelech)は神がアブラハムと共に在し、何事にも手厚き御保護を加へ給ふのを見て、之と同盟を結びたいと思ひ、或日將軍フイコル(Phicol)を從へてアブラハムを訪づれた。

「私にも子供にも子孫にも害することあるまじ、と誓つて下さい、私が貴下に厚意を表した如く、私にも、この土地にも同じく厚意を表して下さい」

と云つた。アブラハムは王の請に應じた。然し王の僕等に井を奪はれたことを訴へて反省を求めた。水に乏しいこの地方では、井が牧者間に紛爭の種となるのは不思議ではない。アビメレクは、全く知らなかつたと陳謝し、アブラハムにその井を返還した。アブラハムは七頭の若い牝羊をアビメレクに與へて、其井は自分の掘つたものだと云ふ證據となし、互に契約を取り換した。その爲に契約の場は、ベルサベエ(Bersabee—ヘブライ文の Beer-Seba—誓ひの井)と呼ばれた。アブラハムは長く此處に定住した。

(3)試練—アブラハムは今こそ幸運の絶頂に達した。身は巨万の富を擁し、諸人の淺からぬ尊敬を受け土着の豪族とは同盟を結び、家督を讓るべき男子も生れたので、もう何一つ思ひ遺す所はない。然るに

ヤウエはちやうどこの時を狙つて、彼に至大至難の試練をお加へになつた。

「汝の子、汝の愛する獨子のイザアクを携へて、モリアの地に到り、我が示さんとする彼所の山に於いて、之を燔祭として我に献げよ」

と命じ給うた。この命を承つたアブラハムの心は果して破られる思がしなかつたらうか、「汝の子孫を天空の星の如く數限りなく殖やして遣す」と云ふお約束の上から賜つたのがこのイザアクである。是れこそ實にかけがへのない一粒種だ。之を燔祭に献げたら、到頭自分の子孫は絶にて、ヤウエの御約束も全く反古になつて了ふ譯である。然しアブラハムは決して躊躇しなかつた、彼の信仰は動かざること山の如く、彼の從順もまたその信仰に劣らず英雄的であつた。聖パウロは彼の驚ろくべき信仰を讃めて斯う曰つて居る、

「信仰によりて、アブラハムは試みられし時イザアクを献げたり。その献げたりしは、約束を蒙りたりし獨子にして、曾つて汝の子孫と稱へらるゝはイザアクに由るべし、と云はれし其者なりき。即ち彼謂へらく、神は死したる人々をも復活せしむるを得給ふなりと」(ヘブライ一一ノ一七)

モリア(Moriah)の地とは、後日サロモンが神殿を築いたエルザレムの一丘陵たるモリア山であらうと一般に言はれて居る。アブラハムはまだ夜も明けない中に起きて、薪を切つて驢馬に負はせ、イザアクと二人の僕を連れて家を出た。三日目にそのモリア山を遙に望む地點に達した、よつて僕等を其處に留めて

イザアク薪を背負つて山に登る

「私はイザアクと彼山に登つて神様を祭つて來るから、お前等は此處に俟つて居るが可い」

と云つて、驢馬の背につけて來た薪はイザアクに負はせ、自分は火を入れた壺と刀とを携へて登りかけた。途中でイザアクは父に向ひ、

「お父様、火も薪もありますが、犧牲は何處に在るのですか」

と問うた。アブラハムは腸も千斷れる思がしたに相違ないが、強ひて夫れを押しかくし

「なに、心配するな、神様が何とかして下さるよ」

と輕く答へてお茶を濁した。さて山の頂に辿り着くや、アブラハムは急いで祭壇を築き、薪を積み、イザアクを縛つてその上に載せた。時にイザアクは早や逞ましい青年であつたはずだが、神の思召と悟るや大人しく犧牲になる決心をしたものらしい。アブラハムは終に刀を執り、手を振り上げて、いよ〳〵最愛の獨子を献げようとするその刹那、「アブラハム、アブラハム」と忽ち天から涼しい天使の聲が聞こ

アブラハムその子を犧牲に献げんとす

た。アブラハムは刀を持つたその手を控へて「ハイ」と答へた、

「その子に手を掛けるな、何にもしてはならぬ。汝が神様を畏れ、神様の爲とあらば、獨子でも惜まぬと云ふことは今こそ立派に分つた」

その天使は曰つた。之を聞いたアブラハムの喜は果して如何ばかりであつたらう。不圖氣が附いて背後をふりかへると、一頭の牡羊が藪に角を引掛けて居る。アブラハムはその牡羊を捕へて我子の代りに燔祭として献げた。「神様が何とかして下さつたのだ」。やがて主は再びお聲をかけられた、

「我は我身を指して誓ふ、汝がこのことを爲し、汝の獨子をさへ惜まなかつたから、我も汝を祝し、汝の子孫を殖して空の星の如く、濱の砂の如くなし、汝の子孫はその敵の門を占領すべく、汝が我聲

に從つたから、地上のすべての國民も汝によりて祝せられるであらう」

重ねぐの御約束にアブラハムは腸に沁みて嬉しく、イザアクと山を降つてベルサベエへ歸つた。ハランに居殘つた弟のナコルとその妻メルカ(Merca)との間に幾人も子供が生れたと云ふ通知を得たのもこの頃であつた。

(4)サラの死—イザアクの誕生から三十七年目にサラはヘブロンに於て永い眠に就いた、年百二十七歳、アブラハムはヘテ族なるエフロン(Ephron)と云ふ人の所有に屬せるマクペラ(Macpelah)の洞窟を銀四百セケルで求め、それにサラを葬つた。このマクペラの洞窟こそアブラハムがこの聖地に所有せし唯一の土地で、サラを始め、アブラハム、イザアク、レベッカ、リア、ヤコブ等も皆之に葬られた。

教訓—イザアクはキリストの前表である。彼がその燒かるべき薪を背負つて山上に登つたのは、キリストがその磔けらるべき十字架を擔いで、カルワリオへお登りになるのを立派に象つたものである。

參考　人身御供に就て

人身御供と云ふは古代人の間によく行はれたものである。然し是れは人道に戻れる忌々しき蠻風で、神の嚴しく禁じ給へる所であつたにも拘らず、自ら之をアブラハムに命じ、アブラハムも亦その命に應じようとしたのは、何うした譯であらうか。先づ神の方から云ふと、この命令はたゞアブラハ

ムを試みる爲で、之を實行させる考ではなかつた。その上、神は生と死との絶對主權者で、アブラハムにその子を犧牲に献げよと命ずることも出來ないはずはない。神にそれを命ずることが出來たとすれば、アブラハムがその命に從つたからとて、何等の不都合も見ない、むしろ非凡な信仰、双びなき從順の行爲だと感嘆するより外はないのである。

アブラハムの信仰はこの時ほど苦しい試練を經たことがなく、夫れだけその勝利も輝しく、隨つていよ〳〵「すべての信者の父」と云ふ美名を冠せられるに堪ふべきものとなつた譯である。

第十三章　イザアクの結婚

(一)嫁探し—サラが亡くなつた時、イザアクは早や三十七歳になつて居たので、アブラハムも之が嫁探しに相當苦心した。神の選民を作るべき一家の主婦をば、偶像を拜むカナアン族から求めたいとは、どうしても思ひ得ない。幸ひメソポタミアのハランに居殘つた弟ナルコは妻メルカとの間に八人もの子供を擧けたと云ふ話を傳へ聞いたので、その孫の中には適當な嫁が居ないはずはないと思ひ、或日、長くから忠實に事へて家事萬端を支配して居た老僕エリエゼルを呼んで、その事を依賴した。エリエゼルは主人の命を畏まり、澤山の贈物を駱駝十頭に負はせて發足した。無事ハランに着き、市外の井傍に駱駝を止めて休憩した。

時は正に夕景で、市の娘等が水汲みに出て來る頃であつた。エリエゼルは神に祈つた、

「アブラハムの神なる主よ、何とぞ私を助けて主人アブラハムに憐を垂れ給へ。私は只今井の傍に立つて居ます。町の娘等は水汲みに出て參ります。で私が、〝その水甕を傾けて一口飲まして頂戴〟、と申します時、〝サア、どうぞ、駱駝にも飲まして上げませう〟、と答へましたら、夫れこそ神樣がイザアク樣の奥方にお選み下すつたもの、私の主人に御憐みを垂れさせ給うたものと私は致しますでございませう」と、

まだ祈り終らぬ中に、容姿の勝れて世にも美しい一人の處女が肩に水甕を戴せてやつて來た。泉に下りて水を汲み、さつさと歸らうとする。エリエゼルは走せ寄つて

「どうぞ、その水甕の水を一口飲まして頂戴」

と願つた。處女は「サア何うぞ」と快く答へて、直ぐ水甕を肩から下した。エリエゼルが飲み終るや、

「駱駝にも飲ませませうよ」と云つて飲みさしの水は、ザアと溝に棄て、汲み直して駱駝にも殘らず飲ましてくれた。

エリエゼルは熟々と娘を見て居たが、駱駝に飲ませ終るや、純金の耳環と純金の腕環とを取り出して娘に與へた、

「何方のお孃さんですか、お宅には一夜の宿をお貸し下さる譯には參りませんでせうか」

「私はナコルとメルカの子にあたるバトウエルの娘でございます。宅には飼草も澤山あれば、宿るにも

廣い間があります」

彼女は實にレベッカ(Rebecca)と云ひ、イザアクの從妹に當るのであつた。神様が自分を眞直に主人の御令弟方へ案内して下さつたかと思つて、エリエゼルは感謝の情に堪へず、恭しく頭を下げて神様を伏拜んだ。

(2)緣談成立す—その間にレベッカは急いで家に歸り、今の出來事を逐一物語り、贈られた品々を見せた。兄のラバン(Laban)は聞くなり走せ行いて、遠方の珍客を喜び迎へ、家へ案内して足を濯がせ、駱駝にはたつぷり芻を與へた。

夕餐の時になるや、エリエゼルはきつと容を改めて、一應自分の話を聞いて戴かない中は食卓に就かない、と斷つた。それからアブラハムの豐富な財産、老年になつてからイザアクの生れたこと、親戚の中に嫁を探す樣に自分が遣はされたこと、井端での自分の祈、レベッカに逢つた事などを委細物語り、もしレベッカを若主人に嫁がして下さる意向がないものとすれば、他に捜さなければならぬから、心を打開けて返答して貰ひたい、と云つた。之を聞いた父のバッエル、兄のラバンは

「それこそ神樣の思召でございます。背いてはなりません。レベッカは貴下の前に居ります、連れ行いて若樣に添はせ申して下さい」

と一議に及ばず承諾した。エリエゼルは大に喜び、平伏して神を禮拜し、金銀の器や價貴き衣服を取出して、レベッカを始め、兄にも母にも贈り、樂しい夕餐の席に就いた。翌朝エリエゼルは歸途に就かうと言ひ出した。

「それは餘り早いじやありませんか。せめて十日間は滯在して、それから御出發なさい」

「否、お引留め下さいますな。神樣は私を案内して下さいました。放して主人の方へ歸して下さい」

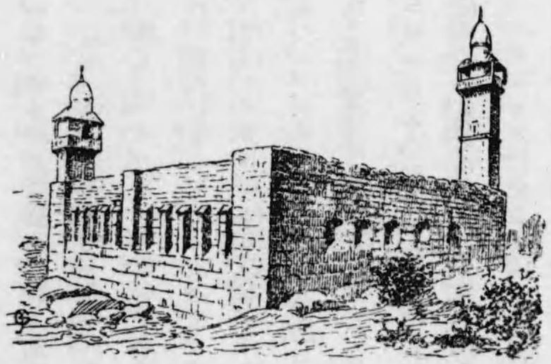
「ぢや娘を呼んで意を聞いて見ませう」

一同レベッカを呼んで「この人と一緒に行く氣か」と問うたら、「行きます」と答へた。

斯くてレベッカは乳母のデボラ(Debora)を召連れてエリエゼルに伴はれ、父母兄弟に祝辭を浴せられ、駱駝に乘つて父の家を去り、長の旅路を經てアブラハムの里に着いた。

時にアブラハムは南の方ベルサベエ附近に住んで居たので、イザアクは黃昏の頃、野に出て默想に耽りつゝ、ラハイ・ロヒの井の路(Lahai-rohi アガルが家出した時天使を見た處)から歸る途中、目を擧げて駱駝の來るのを見た。レベッカも同じく向うから若い貴公子然たる男の來るのを見て、ひらりと駱駝から飛降り、エリエゼルにその誰なるかを問うた。「御主人のイザアク樣です」とエリエゼルが答へるや、レベッカは當時の風習に從ひ、早速上衣を取りて、すぼりと身を覆うた。

エリエゼルは是までの一部始終をイザアクに告げた。イザアクはレベッカをその母サラの天幕に案内して夫婦の契を結び、母に別れた悲みを忘れた。



アブラハムの墓

(3)アブラハムの永眠—アブラハムはサラの死後、セトウラ(Setura)と言ふ側室を容れて六人の子を生んだ、その六人の中で特記すべきはマヂアン族(Madian)の祖となつたマヂアン位であらうか。

アブラハムは財産を悉くイザアクに讓り、アガルやセトウラ等側室の子供には生前物を與へてイザアクと引離し、東の方に居住せしめた。斯くてアブラハムは百七十五歳の高齢に達して永い眠に就いた。イザアクとイスマエルとがヘブロンなるマクペラの墓にサラと並べて葬つた。聖書にはアブラハムを呼んで「神の友」(歴代誌二〇ノ七、イザヤ四一ノ八)と稱してあるが、回教徒たるアラビア人も今にアブラハムを尊稱して「アラの友ハリル・アラ(Khalil Allah)」と呼んで居る。ユデア人はその墓を「太祖等の墓」と稱して大切に保存し、後キリスト教徒も舊約の太祖の墓として之を尊敬し、その墓の上に聖堂を建てた。聖地が回教徒の手に歸するや、その墓の四周に廣大な方形の禮拜堂を繞し、他宗教の人は一切その内へ入るを許さなかつた。然るに一九二九年六月、聖地の回教最高會議はヘブロン住民の猛烈な反對を排して、マクペラの墓を人種宗教の如何を問はず一般の觀光客に開放することゝした。で今日では一定の觀覽料を拂ひさへすれば、誰でも墓の上の回教堂内に入ることが出來る。併し洞窟内の墓には、回教徒でさへ入るを許さないとか。

駁訓—アブラハムが我子の爲に、眞の神を信ずる品行の正しい嫁を捜したのは、子を持つた親の鑑とすべき所で、容貌や財産と結婚させるのは往々一家破滅の基たることを篤と考へて戴きたい。

第十四章　エザウとヤコブ

(1)双兒—イザアクとレベッカの間には二十年も子がなかつた。然しイザアクの熱心な祈禱が終に神の御前に達しレベッカは漸く懷胎した。未だ生れぬ前からその子が胎内で相爭つて居る樣子である。レベッカは夫れを苦にし、往いて主にその譯柄を問うた。

「汝の胎内には二個の國民が宿つて居る。二の民族が汝の腹から別れ出るのだ。一の民族は他の一の民族に打勝ち、大(兄)は小(弟)に事へるに至るであらう」

と神のお答を得たが、果して双兒を產んだ。先きに出たのは、膚の色が赤くて全身毛だらけであつたから、エザウ(Esau—毛むくじやら)と名付けた。直ぐその後から弟が出て來たが、その手に兄の踵を握つて居たので、ヤコブ(Jacob—踵を捉へる者)と言ふ名を之に與へた。時にイザアクは年六十歳であつた。

(2)赤い豆—エザウもヤコブも無事に成長したが、兩人の性格は全く相反して居る。エザウは筋骨逞し